なし、後者は包含層遺物と接合することを確認しながら西壁壁際に遺物が認められた場合に包含層の流入堆積とみることにした。

(2) 集落の構成要素

集落は竪穴住居跡の集合体であり竪穴住居跡が主な構成要素であるが、集落は社会生活の場であり、道・広場等の施設が伴なう。今回の調査は限られた範囲で広場は検出されず、道は確認されなかったがフラスコ状土壙が発見された。フラスコ状土壙は竪穴住居跡の近くに位置し同時に使用されたと見られ同時存在が考えられる。

集落は「居住の場」生活根拠地であり、フラスコ状土壙は貯蔵穴と考えられ「居住の場」を物語ると言えるであろう。また、それは集落を構成する一要素と言えるであろう。

(3) 集落の復原 1

集落は竪穴住居跡の同時存在の証明によって復原されるが、その証明は遺物包含層の流入堆積によって行なわれる。ただ、竪穴住居跡には重複するものがあり前後関係によって修正されなければならない。その重複関係によると少なくても 2 時期以上が想定される。なお、この集落の復原は遺物包含層との関係によって行なうものであり、住居跡範囲の確認されない一次調査地域については除外することにした。

竪穴住居跡は遺物包含層の関係から 2 群に大別される。

Ⅰ群住居跡……遺物包含層に埋没しているもの。(2・4・5・7・8・16住居跡)

Ⅱ群住居跡……既に埋没しているもの。(9・10・14・15・17住居跡)

Ⅰ群住居跡は遺物包含層が埋土となっているもので、包含層の形成直前まで使用されていたと見られるものである。Ⅱ群住居跡は遺物包含層が上位堆積層となるもので、既に一次堆積層が形成され埋没していたものである。

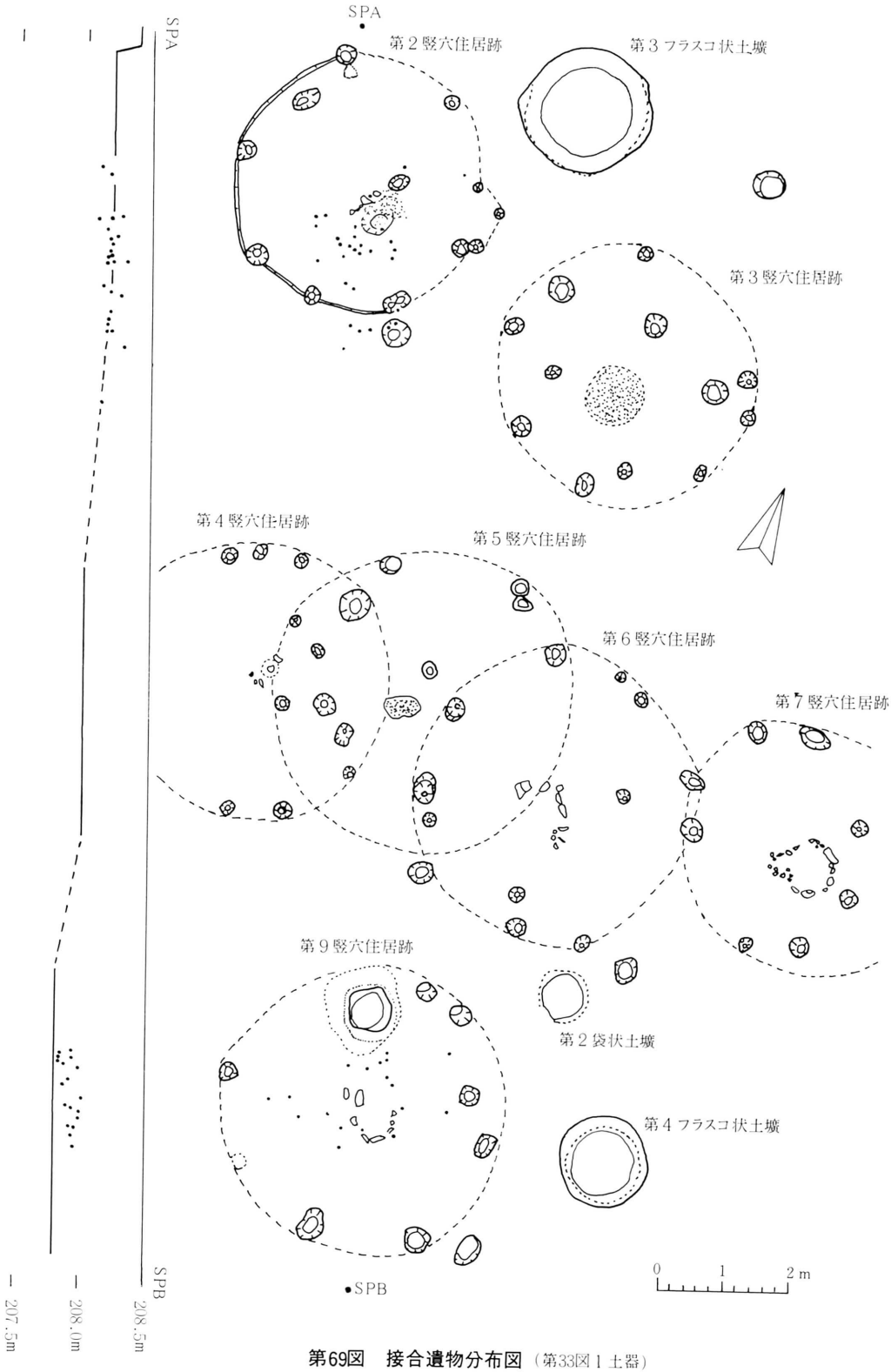
また、重複関係にあるものを図示すると

第 8 住居跡 ←― 第 4 住居跡 ―→ 第 5 住居跡 ←― 第 6 住居跡 ―→ 第 7 住居跡

第10住居跡 ―→ 第11住居跡

となり、第 4 竪穴住居跡が問題となる。第 4 竪穴住居跡は西壁壁際近くから遺物が発見され、遺物包含層に埋没していると見られるが、明らかに第 5 竪穴住居跡によって炉跡が破壊されており古い時期のものであることを意味している。また反対に第 9 竪穴住居跡は西壁壁際に遺物が認められなく既に埋没していたと観察されるが、この地域は既に削平されて遺物が少なかったためであり、接合個体により包含層形成直前まで使用されていたと見られる。

竪穴住居跡は接合個体によって同時存在が証明され、集落の復原となる。たとえば、第 2 竪



第69図　接合遺物分布図（第33図1土器）

穴住居跡の埋土土器と第9竪穴住居跡の埋土土器とが接合している（第69図)。この場合、同一土器が両住居跡に堆積したことになり、どちらも空洞であったことを示しており同時に存在したことになる。この時、両者の間には第4・第5竪穴住居跡が位置しているが、いずれも同一個体は入っていない。これらのものは埋没していたか、削平されていたかで遺物の停まる余地がなかったと見られる。これが第9竪穴住居跡に認められるということは凹地を形成していたことを示すものであり、空洞になっていたことを意味し同時存在を証明している。

また、第9竪穴住居跡の埋土遺物と第12竪穴住居跡の埋土遺物とが接合しており、両者は同時に存在したと見られる。第12竪穴住居跡は第9住居跡同様、既に削平されて壁は残存せず遺物は東半に集中している。さらにまた、第8竪穴住居跡・第11竪穴住居跡・第16竪穴住居跡の埋土土器の中には包含層遺物と接合するものがあり、包含層の形成以前に空洞になっていたと見られる。Ⅰ群住居跡のほとんどが同時存在であった可能性が大である。

竪穴住居跡はAグループ、Bグループに分けられ、それぞれ集落を形成していたと推測される。なおBグループは不明なものがあり、また、炉跡を伴なわない竪穴住居跡が存在しており細分されると思われる。

Aグループ……埋没直前まで使用されていたもの。(2・5・7・8・9・11・12・16住居跡)

Bグループ……既に埋没していたもの。(10・14・15・17住居跡)

(4) 集落の復原2

集落は同時存在をもって復原されるが、集落を構成しているものは竪穴住居跡のみばかりではない。ここではフラスコ状土壙について考えて見ることにする。

フラスコ状土壙は遺物包含層との関係から3群に分けられる。

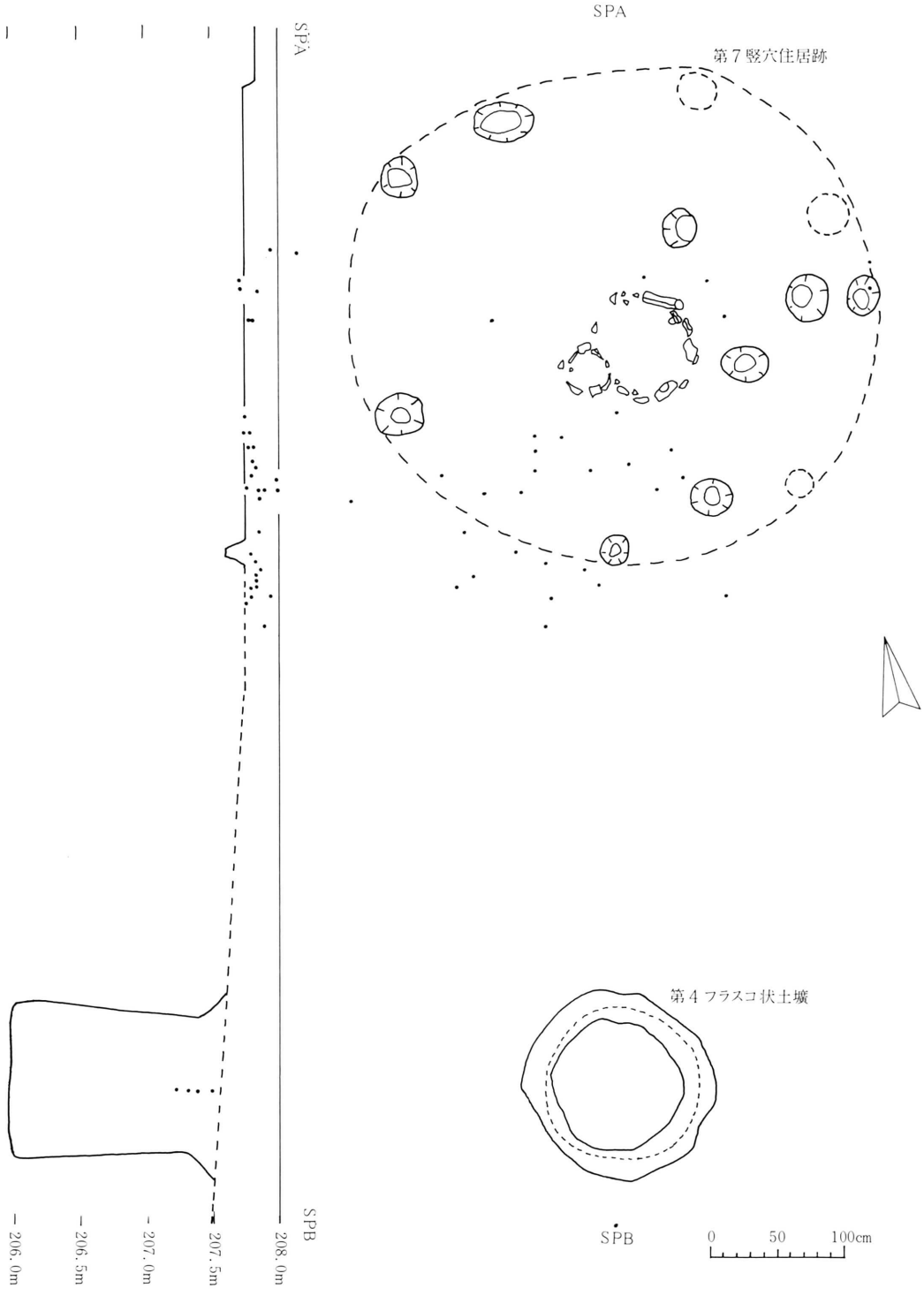
Ⅰ群土壙……遺物包含層によって埋没しているもの。(4・6・8・9土壙)

Ⅱ群土壙……上半が遺物包含層によって埋没しているもの。(3土壙)

Ⅲ群土壙……包含層形成以前に埋没したもの。(5・7土壙)

Ⅱ群土壙は自然堆積による放置期間を考慮しなければならないが、遺物包含層が流入堆積しておりⅠ群土壙と同時存在したとみなすことができる。するとフラスコ状土壙は2グループに分けられる。

また、フラスコ状土壙は土壙間で重複するものはないが、竪穴住居跡と重複するものが2例ある。第5フラスコ状土壙は第9竪穴住居跡の北西にあたり、住居跡に切られている。土壙の埋土には遺物は含まれなく包含層形成以前に埋没したとみられ、一方住居跡は第2竪穴住居跡の埋土遺物と接合するものが入っており包含層形成直前まで使用されていたと見られる。第8フラスコ状土壙は第13竪穴住居跡の南西にあたり、住居跡を切っている。土壙には遺物が含ま



第70図　接合遺物分布図（第32図４土器）

れており遺物包含層の流入と考えられる。住居跡には一次堆積層が認められ既に廃棄されたと推測される。両者を竪穴住居跡と比較すると、前者は竪穴住居跡がＡグループであり、土壙はＢグループになる。後者は竪穴住居跡がＢグループであり、土壙がＡグループとなり矛盾はない。

フラスコ状土壙と竪穴住居跡の同時存在は接合個体によって証明される。第３フラスコ状土壙の埋土土器と第２竪穴住居跡の埋土土器が接合し（第64図)、第４フラスコ状土壙の埋土土器と第９竪穴住居跡の埋土土器が接合する（第70図)。フラスコ状土壙と竪穴住居跡に接合個体が入っているということは同時に空洞になっていたことを示しており、同時存在を証明している。また、第６・第９フラスコ状土壙の埋土土器は包含層遺物と接合し、包含層の形成以前に空洞であったことを示している。Ⅰ・Ⅱ群の土壙のほとんどが空洞であったことを示しており、同時存在であった可能性が大である。

フラスコ状土壙は次のように分けられる。

Ａグループ……埋没直前まで使用されていたもの。(３・４・６・８・９土壙)

Ｂグループ……既に埋没していたもの。(５・７土壙)

(5) 集落の復原３

以上見て来たように竪穴住居跡の中には時間差があり、数時期の集落が重複している。それぞれの遺溝を時期ごとに分離することは困難であり不可能に近いが、幸い最後の段階のものを抽出することができる。それによって復原すると同時存在集落となる。なお、これは竪穴住居跡の確認された二次調査地域に限定したものである。

遺物包含層の形成直前まで使用されていたと見られるものは、竪穴住居跡８棟、フラスコ状土壙５基である。このうちフラスコ状土壙の２基（６・９）は西端・南端に位置しており直接竪穴住居跡との関連をもたない。

竪穴住居跡は南斜面には見られず台地中央に集まる傾向にあると言える。しかもその分布は適当のバラツキをもっている。この住居跡は北半５棟（Ａ群)、南半３棟（Ｂ群）に分けられるようである。Ａ群の竪穴住居跡は入口を北もしくは東に位置し、主柱をもつものが多い。炉跡では石囲い炉のものが多く、側柱柱穴外側に土壙をもつ。これに対しＢ群の竪穴住居跡は入口が南もしくは東に位置し、主柱をもつものは１例のみである。炉跡では地床炉が多く、土壙をもつものがない。Ａ群が集落の中心をなしていると見られる。

Ⅴ　まとめ

卯遠坂遺跡は工事中に発見されたもので発掘調査は東北縦貫自動車道の建設工事に先だって行なう緊急調査であった。遺構確認調査は発見と同時に開始され、本調査は緊急を要する地区が発生したため一次・二次調査に分けて行なわれた。調査地は諸葛川右岸の丘陵先端にあたり既に削平されて遺物が散乱し、焼土・炉跡の中には露出しているものがあった。

調査は遺跡全体が遺物包含層に覆われ、しかも検出面と埋土とが非常に類似しており、炉跡等は容易に発見されたが竪穴住居跡の検証が極めて困難であった。そこで遺物の出土状態（ポイント・レベル）を記録し、できるだけ柱穴の検出・確認に努めた。整理では炉跡等と柱穴の配置、遺物の水平・水直分布等によって図上復原し竪穴住居跡として確認した。その結果、竪穴住居跡17棟、フラスコ状土壙10基、その他の遺構が確認された。

(1)　調査の成果（検出遺構）

今回の調査で得られた成果は多岐にわたるが、検出遺構ではまず竪穴住居跡が確認され、住居跡の全様が明らかになったことが上げられる。当遺跡では炉跡等が浮いた状態で発見され、いわゆる「平地式住居跡」を思わせるものであった。炉跡等は本来的には竪穴住居跡に伴なうと考え竪穴住居跡を想定して調査を進めたが、出土遺物の水平、水直分布によると床面・壁が推測され、柱穴の確認に努力した二次調査地域では18例中16例が住居跡として確認され明らかに竪穴住居跡であることが把握された。住居跡は床面が第Ⅲ層の黄褐色砂質シルトに達しないもので、壁・床面の検証が極めて困難なだけであることが判明した。

今回の調査では17棟の竪穴住居跡が確認され、付属施設では炉跡・入口・貯蔵穴等が検出され、柱穴・壁が把握された。竪穴住居跡は直径約400㎝の円形プランで炉跡が中央に位置し、壁際に柱穴が並び、その一部に入口が取り付く。貯蔵穴は住居跡内にもち、外部にはフラスコ状土壙をもつ形となる。

個々の施設ではまず炉跡が地床炉・石囲い炉・複合炉の3形態に分類される。地床炉は焼土が円形・不正楕円形に広がっているもので窪み等は認められなく、石囲い炉は扁平な川石を円形に配したものである。複式炉の形態をとらない。複合炉は石囲い炉に埋設土器炉が加設されたもので石囲い炉に燃焼部をもつ。埋設土器はすべて口縁部から肩部にかけての甕形土器を用い倒立状態に設置している。入口は側柱柱穴の外側約40㎝に入口柱穴をもつもので「ハ」の字状に内側に開いており先端が55～75㎝と狭くなっている。中には入口柱穴と側柱柱穴とが接しているものがあり、大型の柱穴として検出されるものもある。この類は4例発見された。また、側柱柱穴の中には柱穴間が入口先端と同様55～75㎝と狭くなっているものがあり、やはり入口

と考えられる。この類が8例で全部で12例となるが、入口の位置は北・東・南と一定しない。

貯蔵穴には側柱柱穴の外側にあるもの、柱穴に接しているもの、柱穴の中間にあるものの3形態があり、いずれも入口の奥（左手奥・正面奥）に位置する土壙である。柱穴に接するものには土器を伴なうものがあり口縁部が床面上に出ている。柱穴の外側に位置するものにも土器を伴なうものがあり、土器を利用した貯蔵穴と考えられる。柱穴には壁際に並ぶ側柱柱穴と住居跡の中央に位置する主柱とがある。側柱は8本が基本と考えられ、このうち2本は入口あるいは入口基部を構成している。主柱は確認されたものが6例と少なく、もたないものが多いが、炉跡の北約60cmに位置し他の柱穴より深い。

壁は検証されたものが少なく断言できないが、二段壁の形となるようである。一段壁は側柱をつなぐもので、二段壁はこれより約50cm外側にあり本来の壁を構成すると考えられる。今回の調査で検証されたものは前者で、後者に該当するものはない。ただ、側柱柱穴の外に位置する貯蔵穴から二段壁の存在が推測できる。

以上の中では特に入口の発見、二段壁の推測が特筆に値するものであろう。また、フラスコ状土壙が竪穴住居跡に伴なう付属施設であることが指摘できる。フラスコ状土壙は竪穴住居跡の近くにあり、住居跡埋土土器と土壙埋土土器とが接合し両者の同時存在が考えられる。隣接しており、しかも同時存在しているということになれば互いに相伴なうことになり、竪穴住居跡に伴なう外部施設であると言えるであろう。

次に、出土遺物が遺構の存在を示していることが上げられる。今回の調査は遺物から遺構の復原を試みたものであるが、二次調査地域では1グリット100点以上の出土遺物をもつ11グリットが7棟の竪穴住居跡と結びついており、遺物包含層に覆われていることもあるが遺物数の多い地域が竪穴住居跡等の遺構を示していると言えるであろう。

次に、同時存在の竪穴住居跡等による集合体としての集落が復原されたことが上げられる。集落は同時存在をもって構成されると考えられるが、遺物包含層は短期間に形成されたと見られ包含層の形成直前の姿を復原することによって同時存在が証明されると推測される。遺構には遺物包含層のみによって埋没しているものと、そうでないものとがあり、前者は包含層の形成直前まで空洞になっていたことを示し、現に使用されていたことを意味する。後者は包含層の形成時には埋没していたことを示し、既に廃棄されたことを意味している。後者には重複するものがあり必ずしも同時存在のものばかりとは言えないが、前者には重複するものがなく同時存在であると言える。このことから最終段階の集落を復原すると、竪穴住居跡が8棟、フラスコ状土壙が5基から構成され、台地中央に集まる傾向にある。集落は北側住居跡群（5棟）と南側住居跡群（3棟）に分けられ、前者は台地中央から北斜面に位置し入口が北もしくは東にあり、主柱をもつものが多い。炉跡では石囲い炉のものが多く、複合炉が含まれている。後者

は南斜面にあたり入口が南もしくは東に位置し、主柱をもつものは1例だけである。炉跡では地床炉のものが多い。

さらに、遺物包含層の形成が自然作用によることが指摘できる。遺物包含層は調査地全域を覆って広範囲にわたるが、その成因は短期間に形成されたこともあり自然作用によると見られる。遺物包含層は単なる遺物の散乱ではなく明らかに二次堆積の様相を呈しており、自然作用の中でもとりわけ流水が考えられ、洪水あるいは土石流に求めるのが妥当であろう。そして今回の例は人為的廃棄行為は認められなく、自然作用による竪穴住居跡の埋没パターンとして把らえられる。

(2) 調査の成果（発見遺物）

発見された遺物は約10,000点で、遺構に伴なうと見られるものは竪穴住居跡の貯蔵穴・炉跡に使用されたもののみで大多数は遺物包含層の遺物である。遺物の約90%を占めるのが土器でほとんどが破片である。接合して復原できるものがあり、器種では深鉢・鉢・浅鉢・甕・壺があり深鉢・甕が多い。整理は文様を主体に分類を試みたが、文様モチーフはバラエティーに富んでおり、モチーフと器形との間には一定の規則性のあることが明らかになった。蛇行懸垂文と蛇行懸垂文＋長円文をもつものは内彎の深鉢が多く、蛇行雲形文をもつものは壺に多く、肩の張る甕に若干見られる。蛇行懸垂文は堀之内Ⅰ式土器の特徴となっており、長円文は十腰内Ⅰ式土器に見られるモチーフである。同一個体に両者のモチーフが用いられている例もある。

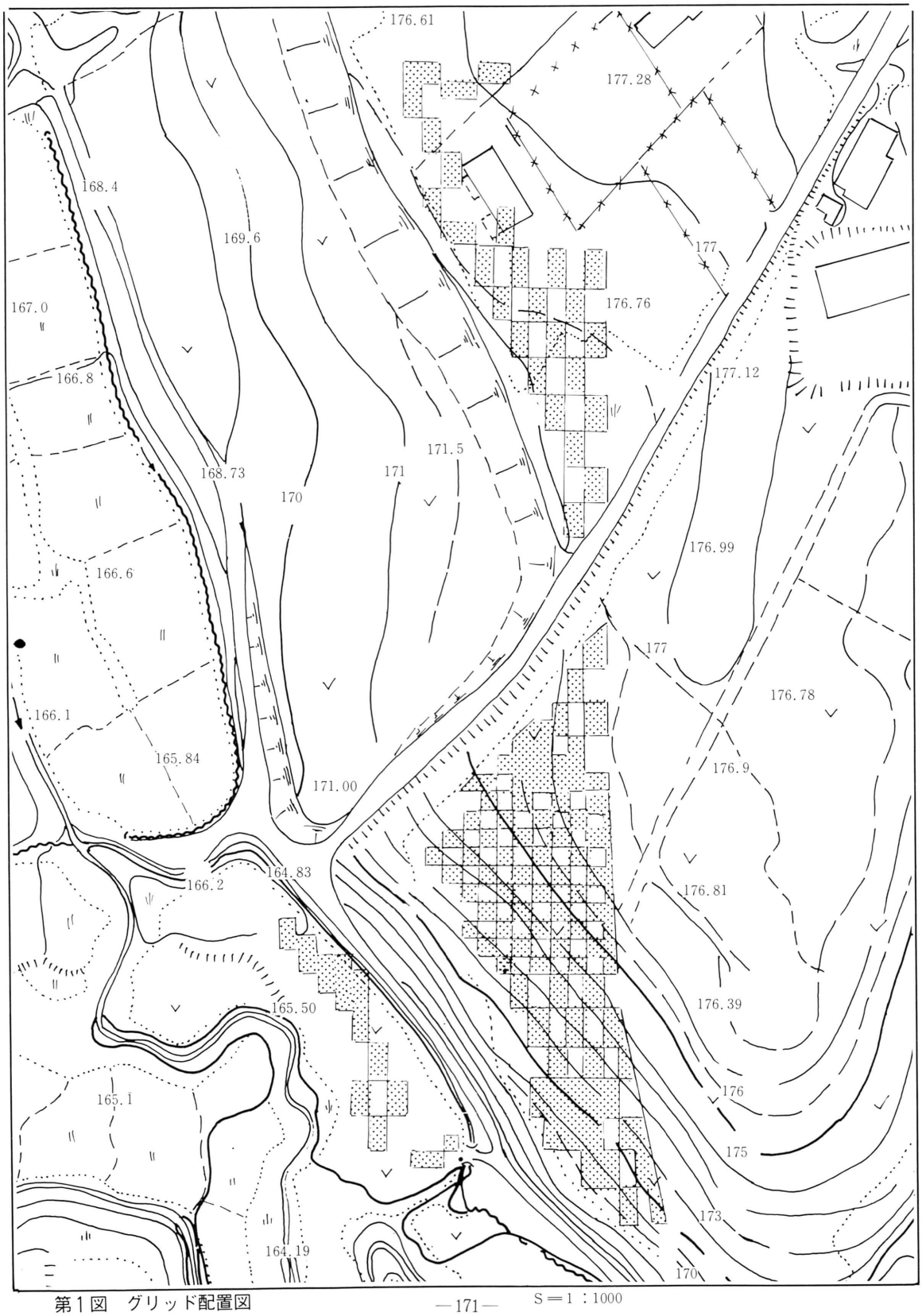
(3) 遺跡の性格

今回の調査は遺跡の東端一部分であり遺跡全体の性格に言及できるものではないが、得られた資料から竪穴住居跡が濃密に分布する集落跡であると言える。期間は縄文時代後期初頭に限定された短いものであるが、竪穴住居跡は数回にわたって建て替えられている。その後洪水か土石流によって一部破壊されると共に遺物包含層が形成堆積し、一機に埋没し観みられることなく現代に至ったものである。これ以前には溝状土壙が構築されているが時代は不明である。

遺跡の年代は土器から縄文時代後期初頭 ── 堀之内Ⅰ式土器・十腰内Ⅰ式土器併行 ── に位置づけられるが、日本アイソトープ協会の^{14}Cの年代測定によると第10竪穴住居跡の炉跡炭化物は2070±90年B・P、第6焼土遺構炭化物は2020±90年B・P、第3フラスコ状土壙の埋土炭化物は3690±100年B・Pの年代が与えられている。なお、years B・Pは西暦1950年よりさかのぼる年数である。

根堀坂遺跡

遺　跡　名：根堀坂(略号 NHS 77)
遺跡所在地：岩手郡滝沢村大字滝沢十地割湯舟沢314-1 他
調査期間：昭和52(1977)年4月4日～6月4日
調査対象面積：6,430㎡
発掘調査面積：1,710㎡



第1図　グリッド配置図

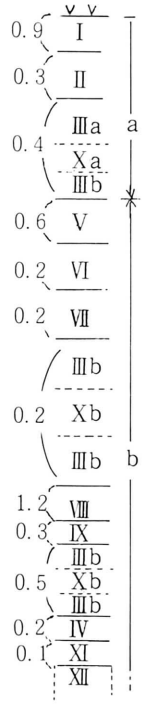
S＝1：1000

Ⅰ　遺跡の位置と立地（第１図、図版１－１）

調査地は岩手郡滝沢村大字滝沢十地割湯舟沢 314 の１他に所在する。滝沢村の中央やや南寄りの県道巣子大釜停車場線の若干西側にあたる。岩手火山の東南方には山地に接続して丘陵性台地群が発達するが、調査地はその一つにのる。これらの台地群は水力により開析をうけ数多くの沢、谷を形成しており、本調査地も西方には市兵衛川の流れる沢をのぞむ。沢をはさんだ西方には石ケ森、谷地山など標高 500 m前後の山々がそびえ、その山麓部には数多くの遺跡群が存在する。同様に丘陵性台地群上にも各期の遺跡が非常に濃密に分布する。調査地の標高は台地頂部で 176 m前後、西方沢地で 165 m前後である。旧地形は既述のように西方への傾斜面（基本的には緩傾斜面）を形成していたはずであるが、最近の各種の土木工事により大きく変形され、急崖などをなしている。

Ⅱ　層序と土質（第２図）

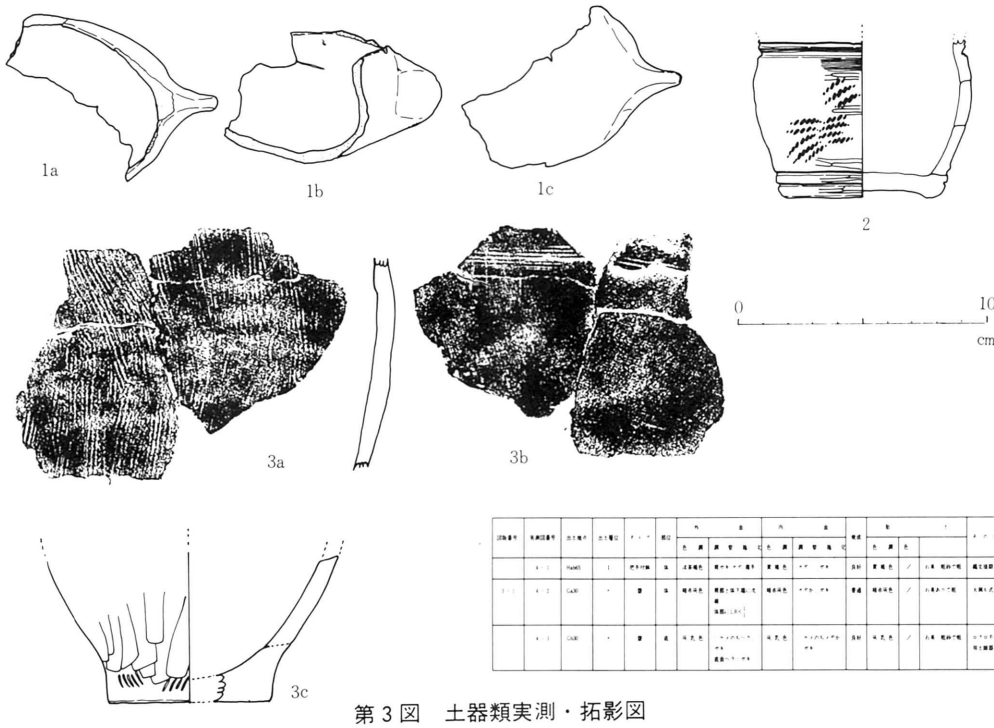
中川久夫氏らによると、雫石川付近より北の丘陵性台地には厚い火山拠出物層が発達し、それらは古期のものから順に①大石渡火山角礫岩、②渋民火山灰、③分火山灰、④一本木火山砂に大別されるとのことである。これらをふまえて調査地の層序と土質を示すと次のようになる。ただし本調査地の大半は削平、客土をうけており、旧地層を残す箇所は一部分しかない。



Ⅰ	10YR 2/3	黒褐色シルト質土、各期の遺物が混在
Ⅱ	7.5YR 4/4	褐色シルト質土、小豆大円礫混入
Ⅲa	10YR 5/6	黄褐色浮石
Ⅲb	〃	〃　若干砂質がかり青灰色砂層になる部分もある。
Ⅳ	5BG 4/1	暗青灰色砂状火山灰
Ⅴ	7.5YR 5/6	明褐色シルト質土
Ⅵ	10YR 5/8	黄褐色粘土質土
Ⅶ	10YR 4/6	褐　色　〃
Ⅷ	10YR 6/6	橙　色　〃
Ⅸ	7.5YR 5/8	明褐色　〃
Xa	2.5YR 4/8	赤褐色浮石
Xb	5YR 4/6	〃　下底にⅢbが伴なう
Ⅺ	10YR 5/6	黄褐色砂山火山灰、非常に硬い
Ⅻ	10YR 5/4	にぶい黄褐色〃

第２図　層序模式図

以上を要約すると、(a)としたものが分火山灰に、(b)が渋民火山灰に相当しよう。遺物はすべ



第３図　土器類実測・拓影図

てＩ層中（と客土中）に分布する。また下方の沢地においてはＩ層中位にいわゆる「粉状パミス」の橙色砂質土が分布し、遺物はその前後（上・下位）から検出される。Ｉ層以下には粘土質土が続き基盤の礫層に達する。沢地にも客土が施こされている。

Ⅲ　検出した遺物

遺構と認定できるものは検出できず、若干の遺物のみを得た。縄文時代・古代のものなどがあり、以下時代順に説明する。(図版１－２)

１　縄文時代の遺物

(1)　**土器**　二時期のものがある。

(a)後期と思われるもの（第５図１～６、11～20、23、図版２－１）。数器種がある。

(ア)粗製深鉢形……平縁で口唇部・器内面をヘラミガキする。外面は無文のままのものと単節斜縄文を付すものがある。

(イ)精製鉢形……小突起を有する波状口縁をもち、口縁に沿って沈線を２条配しその間に施文工具（おそらくは竹などの繊維の強いもの）による刺突文を付すもの、入組文風の磨消縄文を付すもの、刻みのある小突起をもつ波状口縁と、魚目文風の入組文を磨消縄文ではなく爪形の沈線文で表現したものなどがある。

1. 接合した掻器と剥片
2. 用途不明磨製石器
3. 掻器
4. 石核
5. 石鏃

第4図　石器類実測図

石器等一覧表

半欠品の重量は測定しない。

図版番号	実測図番号	出土地点	出土層位	種別	タイプ	概況	最大長 cm			重量 g	材質
							たて	よこ	あつさ		
2－2－3	4－1	Hab 62	Ⅰ	掻器・剥片	接合	完全	5.5	7.2	1.4	59.2	凝灰質泥岩
2－2－4	4－2	Ggh 56	〃	磨製石製品	不明	破損	5.2	6.3	1.8		淡緑色石質凝灰岩
2－2－2	4－3	Hab 65	〃	掻器様	縦長	完全	6.6	2.3	0.7	9.8	珪質頁岩
2－2－5	4－4	Ggh 59	〃	石核		〃	5.6	7.8	4.1	178.8	粘板岩
2－2－1	4－5	Fij 30	〃	石鏃	有茎	破損	3.1	1.3	0.4	参考1.5	珪化した白色細粒凝灰岩
		Ggh 59	ⅡL	剥片			5.7	3.2	1.0	13.4	珪質頁岩
		Hab 65	Ⅰ	自然礫又はハンマーストン		破損	15.2	6.1	1.8		石英安山岩
		〃	〃	剥片		半欠	3.9	4.6	0.8		珪質頁岩
		Hab 68	〃	〃		〃	1.6	2.7	0.6		〃
		Gij 62	〃	〃		完全	4.3	3.7	1.3	15.0	〃
		〃	〃	〃		半欠	5.4	4.2	1.0		〃
		Cef 56	客土	不明	自然石?						石英
		Ff 59	Ⅰ	〃	〃						〃

(ウ)把手付鉢形（第3図1）……内外両面ともに研磨され無文の双耳杯的な浅鉢形で、丸底に近い。

以上三種のものは東北南部の金剛寺式ないし宮戸Ⅲa式相当と考えられる。

(b)晩期と思われるもの（第3図－2、第5図7～10、図版2－1、3－1）。二種ある。

(ア)精製鉢形……直口をなす鉢形であり、口縁端部を無文化するもの、縄文施文のものなどがある。口縁は小波状化される。縄文地の上に沈線を配し施文するが、文様の単位などは不明である。晩期初頭の大洞B式に相当しよう。胎土、焼成ともに良好である。

(イ)精製甕形……口縁部を欠くが、肩部がやや張り出す傾向を看取できるので、甕形とみなした。頸部と体部下端に沈線をめぐらし、体部に疎な感じの単節縄文を付す。おそらくは大洞A～A′式相当の、晩期後葉のものであろう。

(2) 石器類　石鏃1、掻器2、用途不明の磨製石器1、石核1、剥片他若干を得た。

(a)石鏃（第4図5、図版2－1－1）。いわゆる有茎であるが茎部を欠く。両面加工で、断面形態は菱形に近い。剥離は左半部から右半部へと行なわれたらしい。

(b)掻器（第4図1・3、図版2－2－2・3）。二種類ある。

(ア)いわゆるサイドスクレーパー的なもの。縦長剥片を素材とし、片面の全面と背面（主要剥離面側）の基底縁に剥離を加え刃部をつくる。断面形は三角形に近い（3）。

(イ)いわゆるエンドスクレーパー的なもの。長方形に近い剥片の短辺の一側縁にのみ簡単な刃部をつくり出す。それ以外の加工は一切認められない。整理の結果これは他の剥片に接合することが判明したが、その結果正方形に近い剥片が二ケに折れ、その一片を加工していること、刃部は主要剥離面側につくり出されていることが判明した（1）。

(c)用途不明の磨製石器（第４図２・図版２－２－４）。扁平な礫の全面を研磨して平滑にし、隅丸形としている。側面の一部に凹部を形成する加工を行なっている。岩偶あるいは装飾品の一種かとも思われるが、不明としておく。

(d)石核（第４図４、図版２－２－５）。礫の一部に横位の加撃で平担面をつくり調整打面とし、そこから垂直方向に加撃し剥片を割取する。剥離の規則性はあまり看取できない。片面にはコーティングが見られる。

なお剥片の一部に「ルヴァロア型」に類似するものがあるが、偶然の所産であろう。

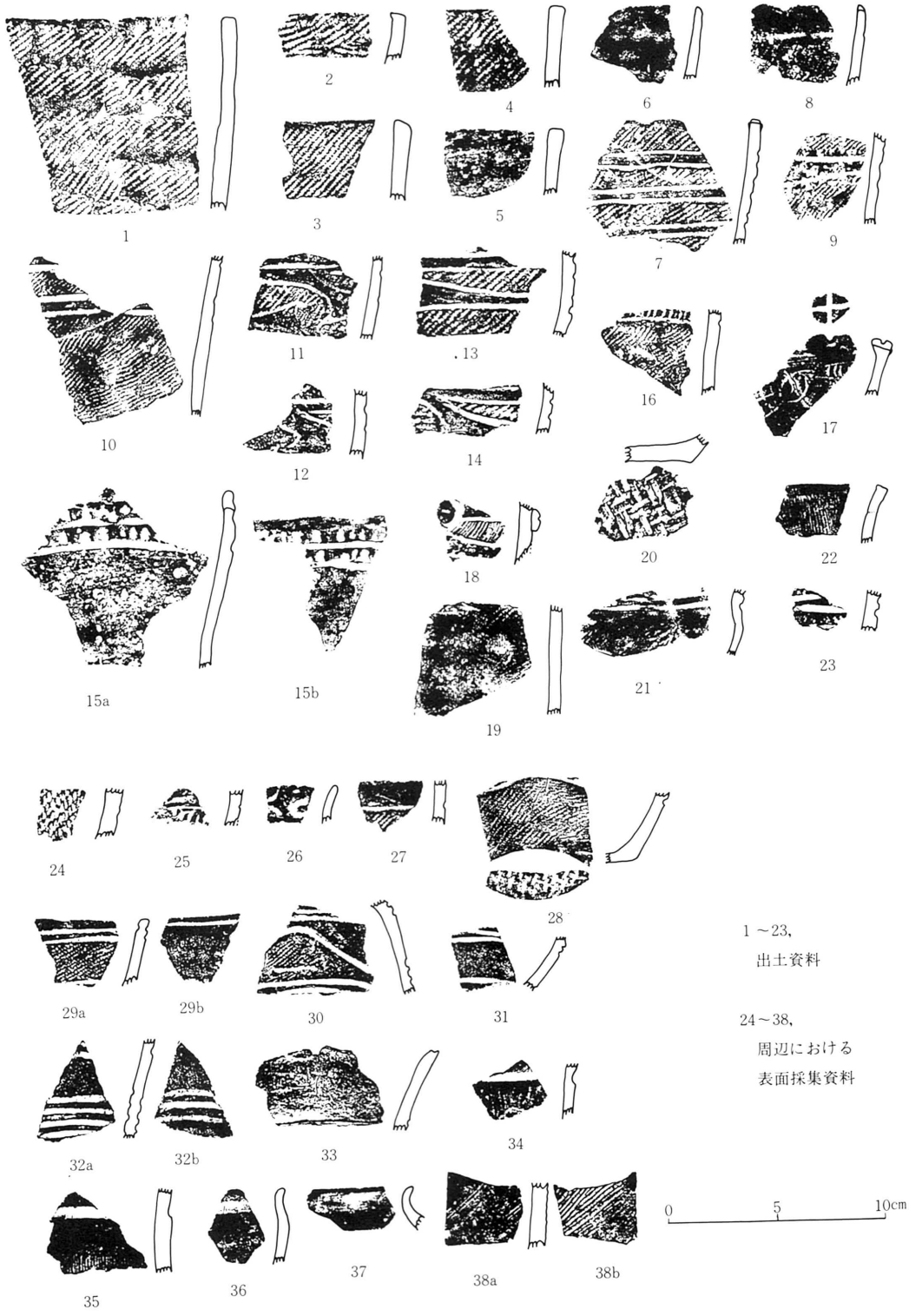
2　古代の遺物（第３図３）。

甕形土師器の体・底部破片である。推定復元によれば器高は30cm前後の中形のものとなろう。巻き上げ成形によるらしい。器外面には縦位のハケメのちヘラミガキ調整が、内面はハケメのちヘラナデ調整が行なわれる。胎土・焼成ともに良好で硬く、外面には光沢がある。この種のヘラミガキが入念で器面に光沢のある甕形土師器は岩手県央から県北に多い傾向があるが、一応東北南半の栗囲式あるいは国分寺下層式なるものの仲間と考えておく。その意味では奈良時代後半から平安時代初頭頃までのものと考えられる。

Ⅳ　まとめ

遺物のみが検出された本調査地の性格の推定には種々の困難が伴う。とりわけ調査地に削平他の人工の手が加えられていることはそれに拍車をかける。遺構の残在状態という要件を捨象した場合の可能性としては、まず縄文時代については「キャンプサイトなどの短期間の労働の場」的な性格があげられよう。地区概観図に示したとおり滝沢村西方の山麓、丘陵性台地群上には多くの遺跡が分布しており、それらと本調査地を総合的に結合させた解釈は十分に根拠のあるものである。今後は周辺の遺物・遺跡の実態を詳細に把握し、集団領域論的観点などのもとに総合的に考えていく必要があろう。本調査例はそのような基礎資料の一つになろう。

上述の意味で、参考までに第５図24以下と図版３の２に調査地周辺の表面採集資料を掲げた。縄文早期末～前期初頭、後・晩期、弥生式、土師器、須恵器などの土器類、剥片類など各種のものがある。とくに弥生式土器の中には大泉式的なものと二枚橋式的なものの両者が見られ、当地域（岩手県央）において各期を通じてみられる「中間地域的性格」の一つの現われとも解釈でき興味深いものがある。土師器などにはロクロ使用以前の技法を示すものも存在する。いずれにせよ前述のように当地域における遺物・遺跡の正確な把握が急務といえよう。



1～23,
出土資料

24～38,
周辺における
表面採集資料

第5図　土器拓影図

NHS77　根堀坂出土土器拓影図説明　No.1

図版番号	実測図番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	5－1	Gij 62	客土	深鉢	口（平）	明茶褐色	口唇ミガキ・体部 LR＜i→。帯状	明茶褐色	ミガキ。光沢	良好	暗茶褐色		石英ありて粗	縄文後期
	〃－2	〃	〃	〃	〃（〃）	極暗褐色	〃。LR＜1/1→↘	灰褐色	ミガキかナデ	〃	灰褐色		粗砂で粗。	〃
	〃－3	Ggh 56	I	〃	〃（〃）	淡褐色	〃。LR＜1/1→	淡茶褐色	ミガキ	〃	淡褐色		白色粒子ありて精	〃
	〃－4	Hab 65	客土	〃	〃（〃）	淡茶褐色	〃。LR＜1/1→	〃	〃	〃	〃		細砂のみで精	〃
	〃－5	〃	〃	〃	〃（〃）	灰褐色	〃。ミガキで無文	灰褐色	〃	普通	灰褐色		粗砂多く粗	〃
	〃－6	Gij 62	〃	〃	〃（〃）	淡茶褐色	〃。〃。	淡茶褐色	〃	良好	〃		〃	〃
	〃－7	Hab 65	〃	鉢	〃（波）	茶褐色	〃。LR＜1/1→ 沈線・ミガキ	黄褐色	〃。多孔質	〃	黄褐色		石英・雲母多く粗	縄文晩期？
	〃－8	Bij 62	〃	〃	〃（〃）	淡茶褐色	〃　〃　〃	淡茶褐色	〃。	〃	灰褐色		〃	〃
	〃－9	Bij 56	〃	〃	体	黄褐色	LR＜1/1→。沈線。ミガキ	黄褐色	ミガキ・多孔質	不良	褐色		粗砂で粗	〃
	〃－10	Gij 62	〃	〃	〃	〃	〃。〃。〃。	〃	〃・〃	良好	〃		石英ありて粗	〃
	〃－11	〃	I	〃	〃	淡茶褐色	〃。〃。〃。入組文	淡褐色	〃・〃	〃	淡茶褐色		〃	縄文後期？
	〃－12	Gij 68	〃	〃	〃	淡乳色	〃。〃。〃。〃。	淡乳色	ナデかミガキ	〃	淡乳色		粗砂ありて粗	〃
	〃－13	Hcd 68	〃	〃	〃	暗褐色	〃。〃。〃。〃。	茶褐色	〃　多孔質	〃	暗褐色		石英・粗砂で粗	〃
	〃－14	Hab 68	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃。〃。〃。〃。	〃	〃。	〃	茶褐色		粗砂多く粗	〃
	〃－15 a	Gef 56	客土	〃	口（突）	淡茶褐色	沈線・ミガキ・刺突	淡茶褐色	ミガキ。多孔質	不良	〃		〃	〃 } 同一
	〃－15 b	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃 } 個体
	〃－16	Hab 68	I	鉢	体	〃	LR＜1/1→沈線・刺突 ミガキ・沈線・爪形	肌色	ミガキ・多孔質	良好	〃		石英粗粒で粗	〃
	〃－17	Hab 65	客土	〃	口（突）	淡茶褐色	沈線・入組文	黄灰褐色	ミガキ	〃	〃		精良	〃
	〃－18	Hcd 68	I	〃	体	暗褐色	同上・瘤状貼付	暗灰褐色	〃。多孔質	不良	外・茶褐色 内・暗灰褐色		粗砂多く粗	〃
	〃－19	Gij 62	客土	深鉢	〃	淡茶褐色	ナデのちLR＜1/1→	淡茶褐色	ミガキ	良好	茶褐色		石英細粒あるも精	〃
	〃－20	Ggh 56	I	鉢	底（揚げ底）	灰褐色	網代痕	茶褐色	多孔質で不明	普通	灰褐色		粗砂まじりで粗	〃 縄文晩期
	〃－21	Ga 30	I	甕	肩	灰色	沈線・ミガキLR＜1/1→	灰色	ミガキ	良好	灰色		〃	4－2に同じ
	〃－22	表面採集		〃	口	肌色	口層ミガキ・ハケメ	肌色	ナデ	〃	灰乳色		石英細粒あるも精	ロクロ不使用土師器
	〃－23	〃		鉢	体	明茶褐色	沈線・ミガキLR＜1/1→	明茶褐色	ナデかミガキ	〃	黄褐色		精良	縄文後期？

NHS77　根堀坂周辺分布調査表採資料拓影図説明

図版番号	実測図番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
3－2－1	5－24	④		深鉢	体	茶褐色	左撚三段原体→	淡茶褐色	ナデかミガキ	良好	茶褐色	有？	粗砂ありて粗	縄文早期末？
3－2－3	〃－25	①		鉢	〃	淡茶褐色	沈線・ミガキ・刺突	灰乳色	〃	普通	灰乳色		〃	宮戸Ⅲａ？
3－2－5	〃－26	⑥		〃	口	明赤褐色	ミガキ三叉状入組文	明赤褐色	ミガキ	良好	明赤褐色		石英細粒のみで精	大洞Ｂ？
3－2－2	〃－27	〃		〃	体	暗褐色	沈線・ミガキ・ＬＲ＜1/1・	茶褐色	ナデかミガキ	〃	茶褐色		粗砂ありて粗	後期？
3－2－4	〃－28	③		鉢？	底（網状）	茶褐色	同上	暗茶褐色	ミガキ	〃	極暗褐色		石英細粒あるも精	晩期
3－2－11	〃－29	〃		鉢又は高坏	口	〃	同上・朱彩	暗灰褐色	〃	〃	灰褐色		砂粒多く粗	大泉式？
3－2－9	〃－30	〃		高坏	脚	暗灰褐色	同上	灰褐色	ナデ？	不良	極暗褐色		粗砂多く粗	〃
3－2－10	〃－31	②		高坏？	体	茶褐色	沈線・ミガキ	〃	ミガキ	良好	灰褐色		白色細粒のみで精	〃
3－2－12	〃－32	③		鉢？	〃	灰褐色	〃　〃	淡茶褐色	〃沈線	普通	〃		粗砂で粗	二枚橋式？
	〃－33	〃		甕	口	暗褐色	ハケメのちナデ沈線	暗褐色	ナデ？	不良	暗灰褐色		同上	ロクロ不使用土師器
3－2－17	〃－34	〃		〃	肩	肌色	有段・ハケメのちナデ	肌色	ミガキ	良好	灰色		石英粒で粗	同上
3－2－14	〃－35	②		〃	〃	淡茶褐色	有段・ハケメのちミガキ	灰乳色	ハケメのちミガキ	〃	肌色		粗砂多く粗	〃
3－2－16	〃－36	③		〃	口	肌色	口縁ナデ・体部ケズリ	肌色	ナデ？	〃	〃		石英粗粒で粗	ロクロ使用土師器？
3－2－15	〃－37	②		〃	〃	淡茶褐色	ロクロナデ？	淡茶褐色	ロクロナデ？	〃	〃		粗砂多く粗	土師器
3－2－18	〃－38	①		〃	体	灰色	ケズリ	灰色	叩き目	〃	外－灰色 内－灰色		石英ありて粗	須恵器

高屋敷（Ⅲ）遺跡

遺　　跡　　名：高屋敷Ⅲ（略号ＴＹⅢ77,78）

所　　在　　地：岩手郡滝沢村大字滝沢第4地割字高屋敷平13-1,13-4

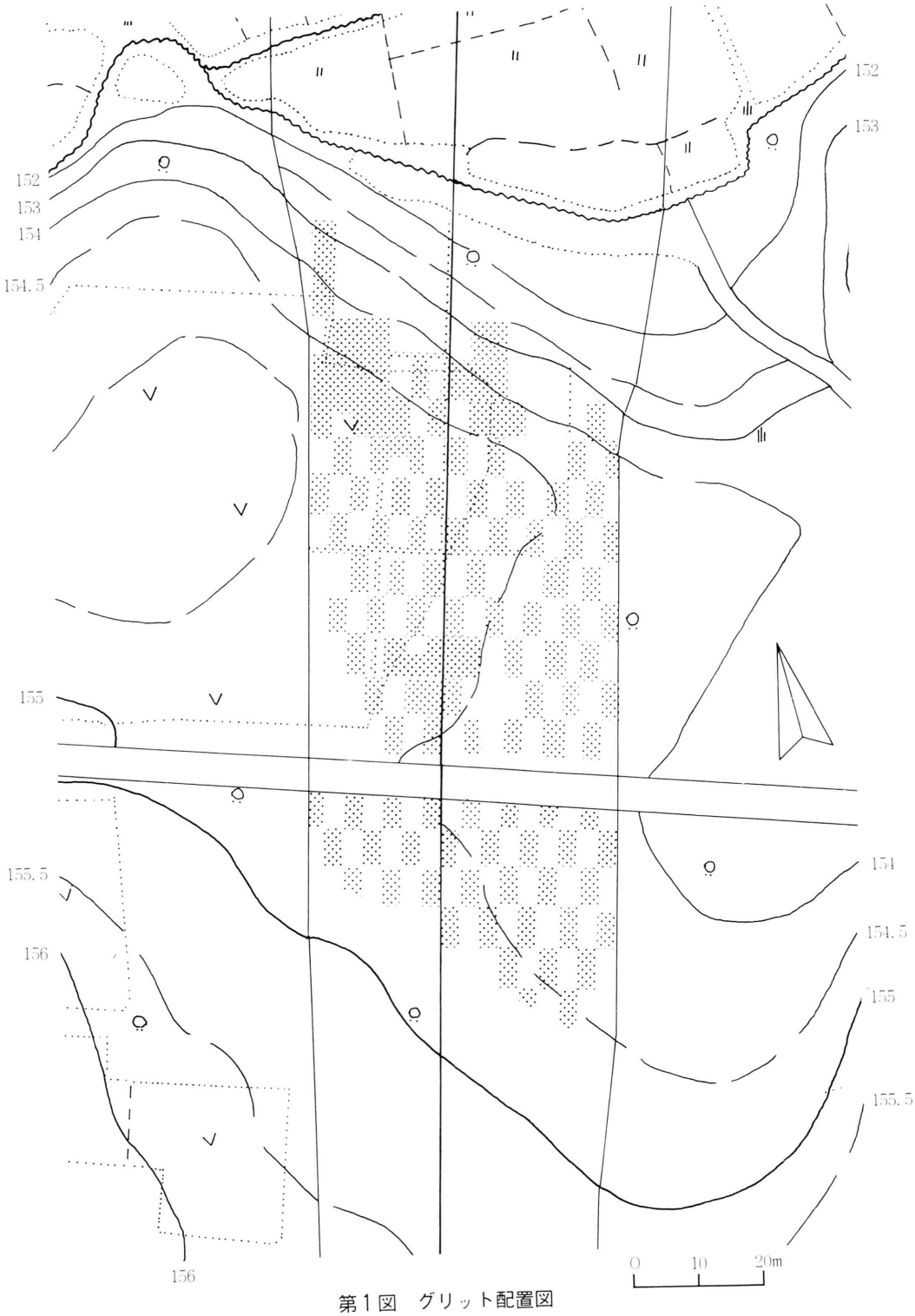
第6地割字土沢87-1,87-4

調　査　期　間：昭和52年4月4日～6月18日

昭和53年4月17日～5月20日

調査対象面積：5,615㎡

発掘調査面積：5,615㎡


152
153
154
154.5
155
155.5
156
152
153
154
154.5
155
155.5
156
0
10
20m

第1図　グリット配置図

Ⅰ　位置と立地（第１図）

高屋敷Ⅲ遺跡は岩手郡滝沢村大字滝沢第４地割字高屋敷平13－１他と第６地割字土沢87－１他にかけてあり、東北本線盛岡駅の北西約６km、滝沢村役場の北東約３kmに所在する。東は北上川が南流し市街で雫石川、中津川を合流して北上平野を形成する。一方、北西には奥羽山脈の主峯岩手山（2,041ｍ）があり、南東に第三紀安山岩類からなる山地が連なる。その山麓には未発達の扇状地が並び、東方に火山放出物（分火山灰相当）に厚く覆われた丘陵性台地が広がる。調査地ののる台地は南北を細谷地、平蔵沢に開析され東西に走る。調査地点の標高は151.5～154.5ｍで、調査地は平坦部と緩く傾斜する北斜面に立地する。北側水田面との比高は約３ｍで、現状は畑地と林野である。

当遺跡周辺には同台地南斜面に高屋敷Ⅱ遺跡、その西に高屋敷Ⅰ遺跡がある。谷ひとつ隔てた南には大久保遺跡がある。山裾の扇状地、広範な丘陵性台地には大畑遺跡（縄文早、後、晩）外久保遺跡（縄文・土師須恵）をはじめとして各種の遺跡が濃密に分布する。当遺跡はこれら遺跡群の中のひとつである。

Ⅱ　調査経過

調査範囲は東北縦貫自動車道が南北に通るため、東西約50ｍ、南北約110ｍの5,615㎡で村道高屋敷平線をはさんでいる。約4,200㎡の平坦部と1,400㎡の斜面からなり、このうち畑地は約2,000㎡である。調査は二次にわたって行ない、第一次調査は昭和52年４月から６月まで、高屋敷Ⅱ遺跡と平行して実施した。畑地と林野の一部が未買収地のため村道の南（Ｄ区）と北側東部約４分の１の調査となった。調査地域を30ｍごとのブロックに区割りし、さらに３ｍを単位とするグリットを設定して実施する。この時道路中心杭ＳＴＡ736＋60とＳＴＡ737＋00を基点とし、一次、二次調査とも同一メッシュとした。ＳＴＡ737＋60以北をＡ区とし、順次南にＢ・Ｃ・Ｄ区とした。Ｄ区がちょうど村道の南にあたる。

調査はまず東西、南北に幅１ｍの深索トレンチを入れ、遺構検出面の確認と土層観察を行なった。検出面まで40～50cmあることが判明したので重機を用いて排土することにした。その後３×６ｍのグリットを１単位とする格子を設定し、全域市松様に掘り進めた。数回にわけて精査したが極く最近の焚火跡以外は検出されず、Ⅱａ層より縄文土器・石器・土師器が数点発見されただけである。なお、北側斜面については平坦部の検出状況を勘案してトレンチ観察にとどめ、グリット調査は行なわなかった。

第二次調査は昭和53年４月から５月まで残った約3,200㎡を対象に行なった。調査は一次調査と同様の順序で進めたが、土層観察の結果削平を受けている部分が認められ、さらに検出面の浅い所が確認された。そこで重機使用は林野の一部にとどめた。なお、北側斜面は一次調査の

成果を勘察し重機を用いることにし、約２ｍ掘り下げたが水が噴出したので土層観察にとどめ平面調査は中止した。以上の結果、Ⅱ層上面より時期不明の焼土が検出され、一次調査同様縄文土器・石器・土師器が発見された。

Ⅲ　基本層序（第２図）

調査地は平坦部と北斜面からなり堆積層に違いがあるが、基本的には次のようになる。

Ⅰ層　黒色有機質腐植土。砂質を帯びサラサラしている。表土及び耕作土である。

Ⅱa 層　黒褐色シルト質土。赤褐色パミス、炭化物を若干含む。遺物包含層である。

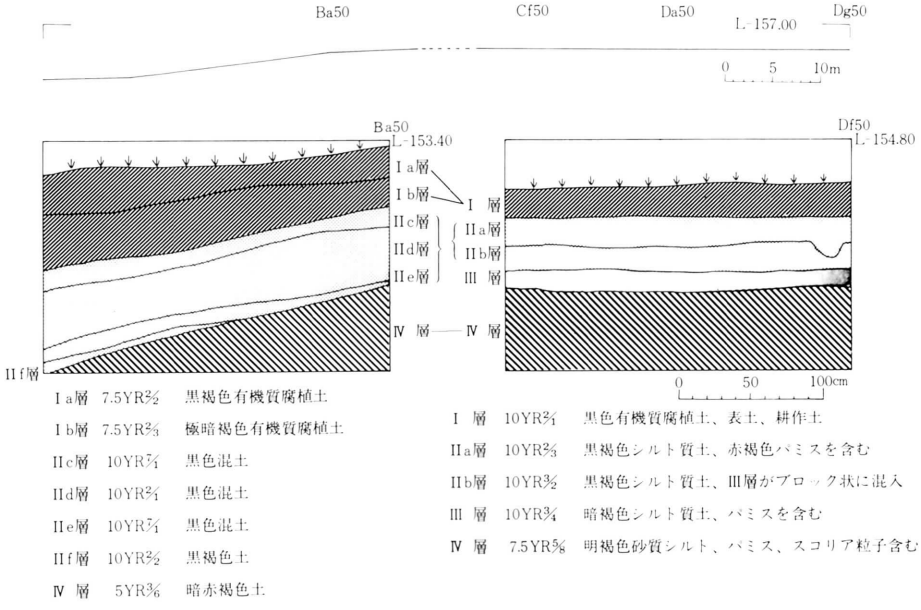
Ⅱb 層　黒褐色シルト質土。Ⅱa 層より褐色が強くⅢ層より黒く汚れている。褐色シルト質土がブロック状に混入する。遺構検出面である。

Ⅲ層　暗褐色・褐色シルト質土。パミスを含む。粒子が細かく砂のようである。

Ⅳ層　橙色砂質シルト。赤褐色パミス粗粒、スコリア粒子を含む。

以上の層はいずれも火山放出物で分火山灰に相当するものと思われる。(注1) この下には青灰色砂層、黄褐色シルト質土（粘性若干あり）、褐色粘土、灰色粘土と続くようである。

北側斜面はⅠ層が厚く堆積し草根の入り方によりⅠa、Ⅰb 層に分類でき、Ⅰa 層が若干砂質が強い。Ⅱ層は色調等により４層に細分できるが、二次堆積土であり Ⅰb 層に類似する。このうちⅡc、Ⅱe 層は黒色が強く粘性が加わる。Ⅱf 層は下層との関係か褐色が強いようである。Ⅱa Ⅱb 層に対応するものであろうが、成因が異なるため対応関係は不明である。Ⅲ層は見られず



第２図　基本層序

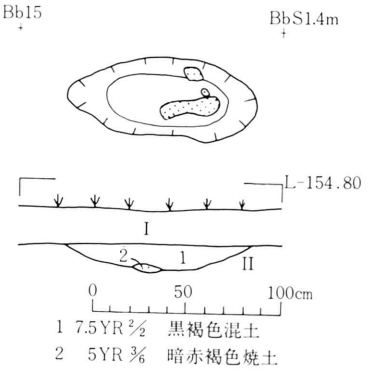
Ⅳ層となる。

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

調査は二次にわたって行なったが、検出された遺構は焼土遺構のみである。

焼土遺構（第３図）

Bb 15 グリットのⅡ層上面から発見されたもので上部はすでに削平されていた。焼土は長円形の掘り込みにブロック状にはいり、ボソボソしている。近くに柱穴が発見されなく、焼土下の掘り込みもはっきりしない。現地性の焼土とは見られなく竪穴住居跡に伴う炉跡とは考えられない。時期性格等の詳細は不明である。



第３図　焼土遺構

出土遺物（第３～７図）

出土遺物は各時期の縄文土器・石器、弥生式土器、土師器、陶磁器等である。以下石器を除き時代順に説明する。

(1)　縄文土器

縄文土器は早期から晩期まで含まれるが次の３群に大別される。

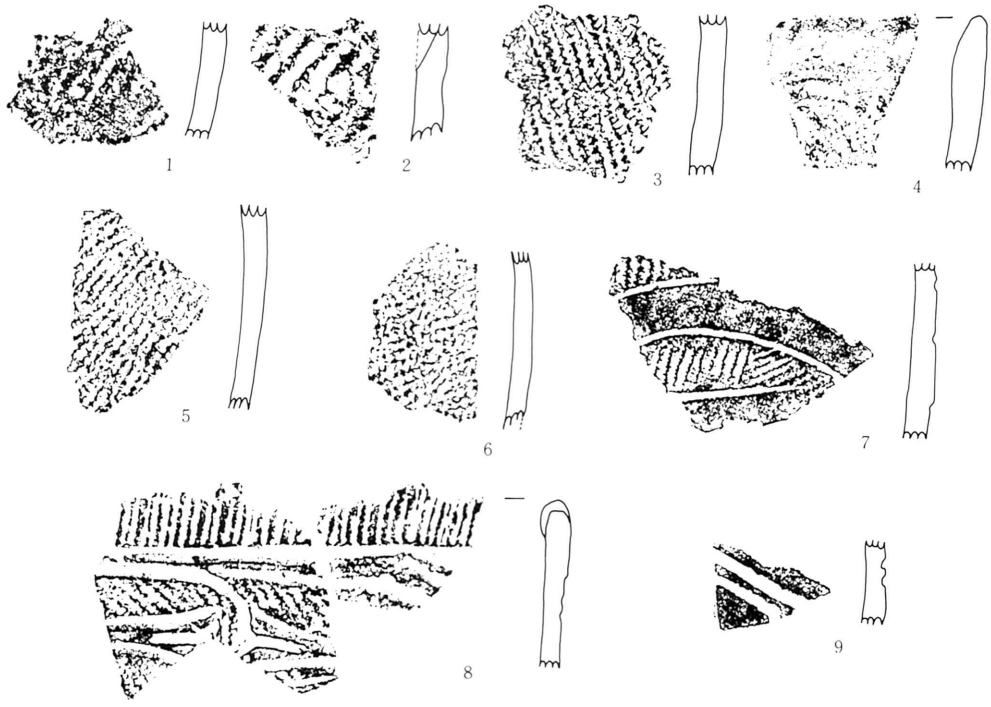
第１群土器……早期から前期初頭のもの（第４図１～４、14点）

第２群土器……後期後葉のもの（第４図５～７、第５図１・２、25点）

第３群土器……晩期初頭のもの（第５図３～５、48点）

第１群土器はＢ、Ｃ区の平坦地に１点ずつ散在し、斜面には見られない。第４図１は底部を欠くが尖底土器と思われるもので弱い縄文が施文される。色調は赤褐色で胎土に石英を含む。第４図２は結束ある羽状縄文で胎土に植物性繊維を含む。大木Ⅱ式に相当するものであろう。第４図３は単節斜縄文（Ｒ－Ｌ）を付す胴部破片である。第４図４は鉢形土器の口縁部破片で、口縁部に無文帯を配し下半に単節斜縄文が施文される。本群土器は尖底土器と思われるものと胎土に植物性繊維を含むものであり早期から前期初頭に位置ずけられるであろう。盛岡市一本松熊の沢遺跡[注2]、大館町遺跡[注3]に類例があり、高屋敷Ⅱ遺跡[注4]ではまとまって出土している。

第２群土器は平坦地にまとまって個体別に散在する。第５図１は注口土器であるが上半が欠損している。器形は底部から丸味をもって立ち上がり、球を押しつぶした形で、それに底部と注口部が付く。底部は直径2.5 cmと極端に小さく、しかも上げ底ぎみで非常に不安定である。注口部は体部と一体となり約70度の傾きをもって上向きに取り付く。現存部は壺でいうなら肩部までにあたり10cmで、6.5 cmの高さが最大胴部となり直径15cmを計測する。文様は最大胴部を



第４図　土器拓影図　½

境に上半の文様帯と下半の無文帯に分けられる。２条あるいは３条の平行沈線間に爪状の刺突をもつものが文様構成要素となる。これを二重同心円と逆の連孤文を交互に用い５単位配置する。そのひとつに注口部が取り付く形となる。最大胴部には瘤状貼付の痕跡が見られるが全て剝落している。それによると平行沈線を引いた後、爪状刺突の施文前に貼付されていた。器壁内面には注口部成形の刺突痕が観察される。器壁は0.5㎝と薄いが焼成は良好で堅緻である。色調は淡黄褐色で胎土に石英を含む。

第４図７は瘤状突起を有する口縁部破片で突起部が若干肥厚する。直口ぎみに立ち上がる平口縁で鉢形土器と思われる。文様は口縁部の刺突線刻文とその下の磨消手法による入組文からなる。地文は単節斜縄文（Ｒ－Ｌ）で鮮明に施文され、色調は赤褐色で胎土に石英等小石を含む。脆弱である。大畑遺跡に極めて類似したものが出土している。第５図２は底部の造り出しが認められる鉢形土器で内彎ぎみに立ち上がる。底は上げ底気味に削られている。文様は斜縄文（Ｌ－Ｒ）が底近くまで施文され、節があまりはっきりしない。赤褐色で胎土に石英を含む。第４図５・６は同一個体の拓影である。

後藤勝彦氏によると宮戸Ⅲa式は疣状小突起をもつものを特徴としているが、これとは別に供伴するものとして「口縁部に一条か二条の点刻（刺突）目が紐状にめぐ」るものを上げている。(注5)第４図７はこれに該当するものと思われる。また、第５図２は上げ底で底部の造り出しの顕著

な所が西の浜貝塚出土の宮戸Ⅲａ式土器に類似している。(注6) 注口土器はその類例が認められないが、沈線間に爪状刺突を付すことは刺突線刻の一種と見られ宮古Ⅲ式に該当すると考えられる。以上のことからこの種の土器は宮戸Ⅲａ式に比定され、後期後葉に位置付けられるであろう。滝沢村では根掘坂、大久保、大緩(注7)、大畑遺跡(注8)で発見されている。

第3群土器は2群土器と同様に個体別にまとまって散在する。第5図3は底部から内彎しながら立ち上がり安定感のある鉢形土器である。口縁は直に立ち上がる平口縁で、底部は若干上げ底風である。最大径が口縁部にあり、約20cmで、底径が6cmである。文様は口縁部文様帯のみで三叉状文と平行沈線からなる。平行沈線は3条で三叉状文の下にあり地文の後に引かれている。地文は細かい斜縄文（L－R）で底近くまで施文される。色調は褐色か青灰色で胎土に石英、雲母を含む。焼成は良好で堅いが脆い。

第5図4は口唇部が対になる突起をもつ台付鉢形土器である。口縁は平口縁であるが刻みを入れ波状口縁の形をとる。図上復原すると口径18cm、最大胴部は口縁から7cm下がった所にあり18.5cmを測る。鉢部底径が7.2cmで、高さが15cmである。器形は口縁部より胴部の張る鉢形で、頸部が若干くびれる。口縁部は直行か外傾ぎみに立ち上がる。高台部は破損して不明である。文様は口縁部から頸部にかけての口縁部文様帯と高台部にある。前者は三叉状文と平行沈線からなり繰り返し2段になっている。後者も三叉状文を配したものと思われる。これには透しの技法が取り入れられている。地文は細かい単節斜縄文（L－R）で右上から斜に施文される。胎土は精製されたものを用い堅緻に焼成されている。内外面ともよく研磨され、体部下半に煤状の炭化物が付着している。

第5図5は底部破片で低い高台が付く。内外両面共にミガキが施され、高台部に1条の沈線がめぐる。胎土は精製されたものを用い、焼成は良好である。

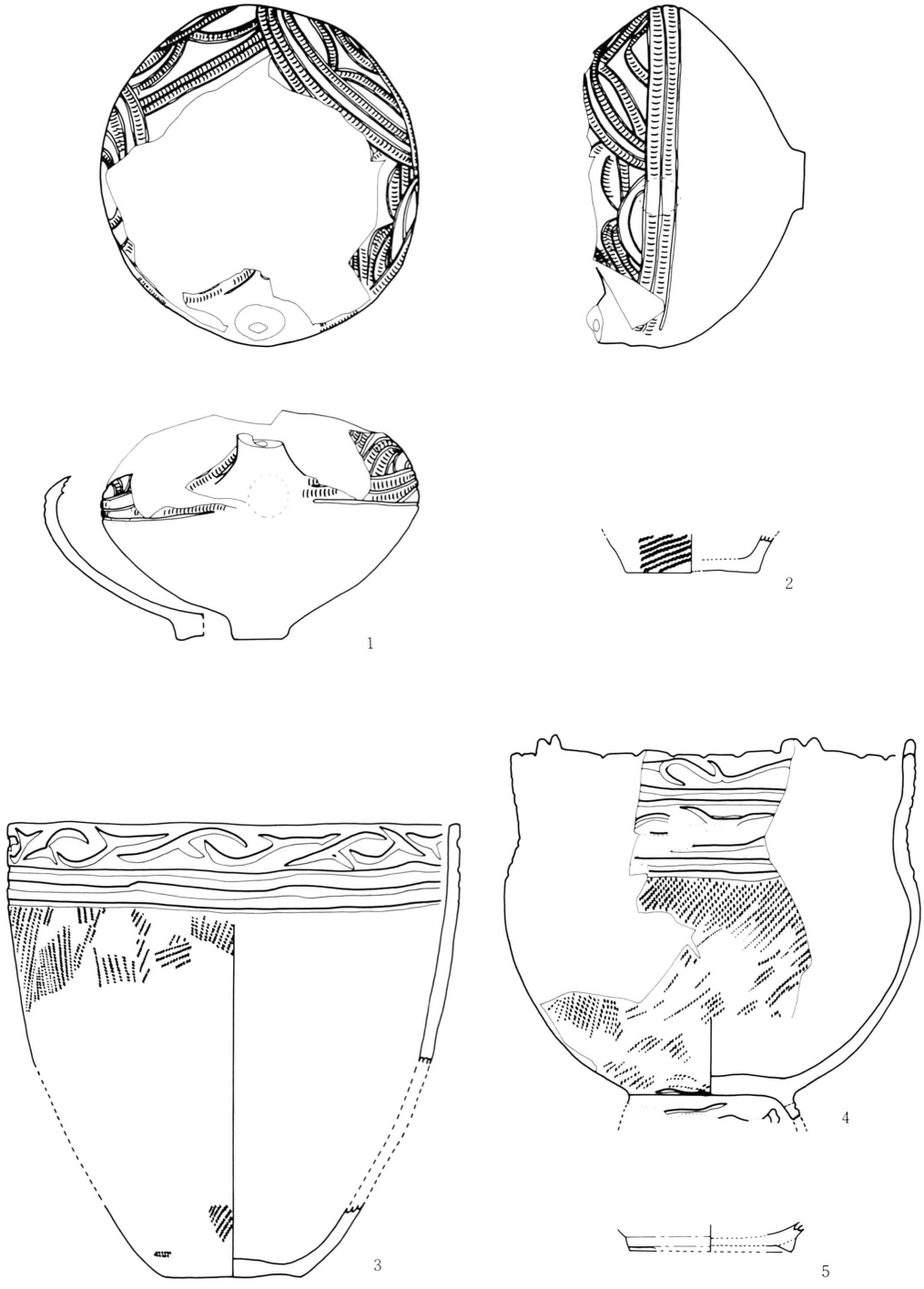
この種の土器は三叉状文で代表される大洞Ｂ式に比定され晩期初頭に位置付けられる。滝沢村では大畑遺跡に類例がある。

⑵ **弥生式土器**（第4図8・9）

胴部破片2片のみで器種、器形は不明である。調査地北西部の斜面際から出土したもので、文様は沈線の深い磨消縄文で細かい単節斜縄文（L－R）が施文されている。磨消縄文は器表面を研磨した後に沈線で区画し、縄文を充塡するものである。色調は黒色で光沢があり、器表面には赤色顔料が塗布されている。胎土には小石等を含み、焼成は良好である。桝形囲式土器に相当するものと考えられ、弥生中期に位置づけられるであろう。近くでは大釜遺跡(注9)に類例がある。

⑶ **土師器**（第6図）

北側斜面際に多く見られ、平坦部では少なくなる。坏形、甕形ともに混在して分布する。す



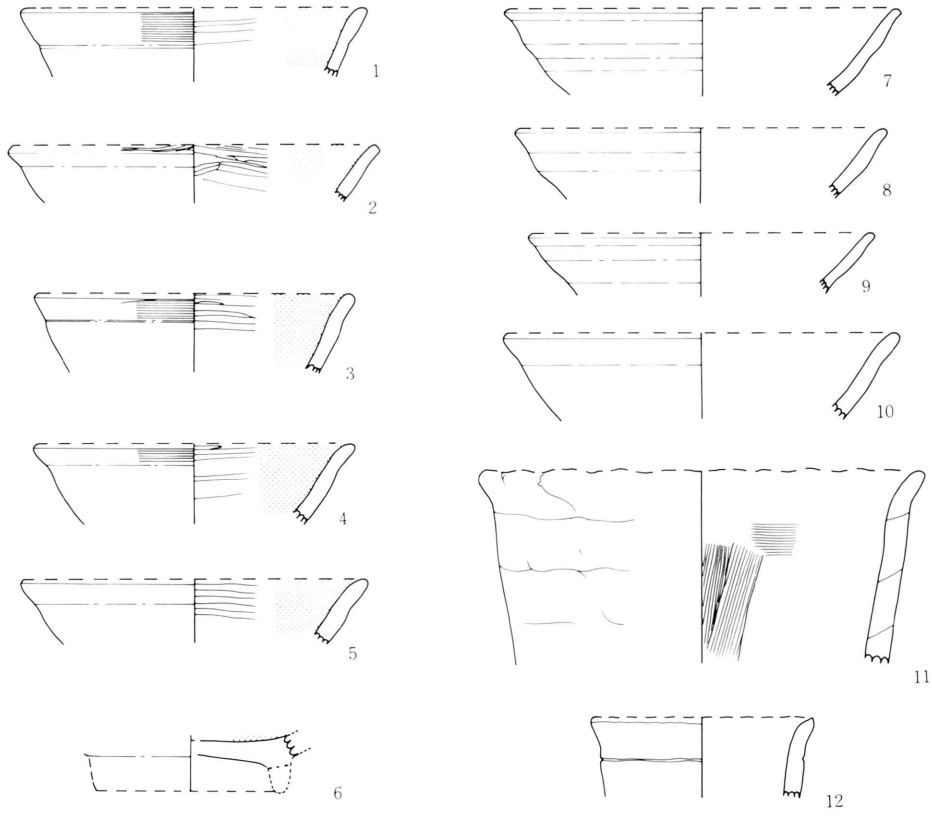
第５図　土器実測図　1/3

べて破片であるが坏形と甕形に分けられる。

(i)坏形……内面黒色処理しているものと、そうでないものに分類される。黒色処理しているものには高台の付くものが含まれている。

(a)内面黒色処理を施しているもの（1～6）。1～5は口縁部破片で口唇部が角ばるものと丸味をもつものとがある。いずれもロクロ成形されている。前者は内面にヘラミガキを施し、胎土に石英、雲母等を含む。後者はヘラミガキであるがロクロ回転を利用し、胎土に小石等は含まない。器形は両者とも内彎しながら斜上方に立ち上がり、口縁直下に僅かなくびれをもつ。体部外面には凹凸がほとんどない。6は高台付の底部破片であるが高台部が剝落している。ロクロ成形後、回転糸切手法で切離し、調整を行なわない。そのまま高台部を貼り付けている。色調は褐色、橙色で内面は黒色、黒青色を呈す。胎土に石英、雲母等を含むものもあるが、b類ほどではなく、精製されたものを使用している。焼成は良好であるが柔らかい感がある。この中にはロクロを用いないものが含まれるようである。

(b)内面黒色処理を行なわないもの（7～10）。全てロクロで成形され、その後の器面調整は



第6図　土師器実測図　1/3

施されない。10は丁寧に仕上げられており体部に凹凸がなく、a類の4・5に類似する。これに対し7～9は体部の凹凸が著しくa類とは明らかに区別される。凹凸は内面には及ばない。器形は内彎しながら斜上方に立ち上がり、口唇部外側に稜が付くものが多い。胎土に石英・雲母を含み、特に黒雲母がめだつ。色調は橙色ないし赤褐色をなす。焼成は良好で堅い。

(ii)甕形……ロクロ形成したものはなく全て手捏ねである。12は口径9cmの小型甕の口縁部破片で、僅かに外反する。口唇部は外側に向かって薄くなり尖っている。肩部に一条の沈線がめぐる。11は僅かに外反する口縁部破片で短く厚味がある。体部は円筒形となるようである。器面にはブロック状の継ぎ目が残り、口唇部はその単位ごとに厚さが異なる。内面は縦、横方向のハケ目が施され継ぎ目を残さない。色調は褐色、淡橙色で胎土に石英を多く含む。焼成が良好で堅く締まっている。この他に外面縦方向のヘラケズリ、内面ハケ目の胴部破片がある。

今回の調査では①須恵器が発見されなく、②ロクロ成形された坏がほとんどであり、③内面黒色処理を行なったものが多く見られ、④ロクロ成形の甕はない。などが判明し、これらのことから9～10世紀ごろに位置付けられるであろう。都南村下羽場遺跡(注10)に類例がある。当遺跡の西方には10世紀から11世紀にかけての遺跡が分布している(注11)。

⑷**石製品**（第7図、図版4下）

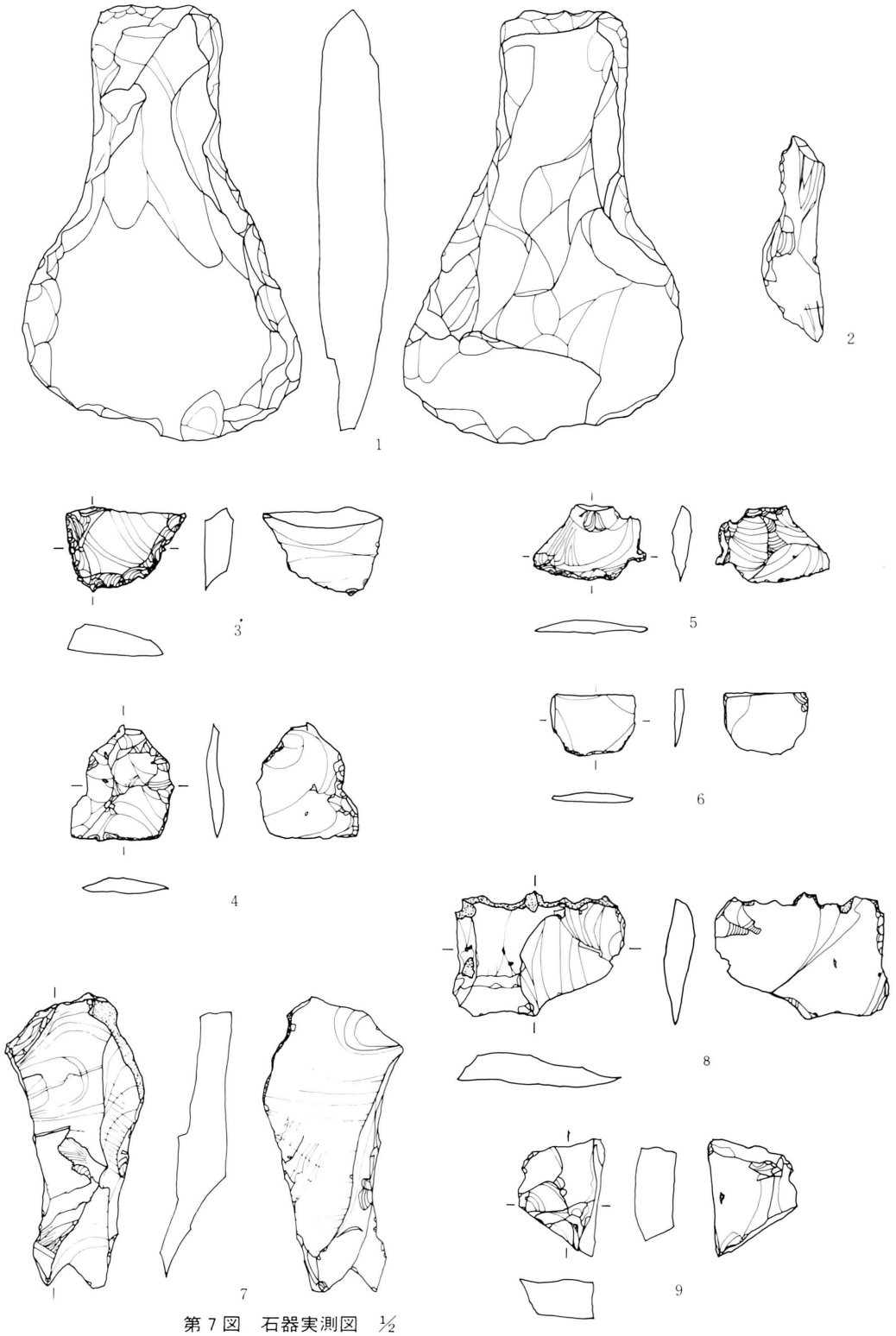
石製品は全て15点である。この中にはフレーク（剝片）チップ（砕片）も含まれる。いわゆる石器と言われるものは打製石斧、磨石、スクレパー（掻器）、剝片利用の不定形石器である。

打製石斧（第7図1）　いわゆる撥形をなすもので基部は単冊形を呈し、側縁の一方は直線的に、他方はふくらみをもつ弧状に、刃部は蛤のような弧状に成形されている。基部表面は薄く剝離され、側縁は敲打によって調整されている。基部側縁では磨滅が観察され柄の装着が予想される。刃部は裏面からのみ剝離され、表面には基部に平行する直線的な擦痕が観察され鍬状に使用されたことを意味する。石材は硬砂岩で磨耗痕は風化したような丸味を帯びるもので、それほど堅いものによって生じたものとは見られない。大山迫氏以来一般に言われてきた「土掘具」と考えられる(注12)。

磨石（第7図2）　磨石の一部と見られる。扁平な石材の平坦部を使用したもので長軸方向に細かい擦痕が認められる。石質は輝石安山岩である。

スクレパー（第7図3）　断面台形の剝片を利用した掻器である。中ほどで折損しており形態は不明であるが、破損以外の3辺に刃部が形成されている。右側縁は規則性のある押圧剝離によって形成され、他の2辺は打ち欠きによるそれである。後者は細かい刃こぼれが観察され二次使用されたものと考えられる。硬質頁岩である。

剝片利用の不定形石器（第7図4～6）　いわゆる使用痕を有する剝片で肉薄な剝片の1辺あるいは2辺に刃部を付すものである。5は打撃面をもつ横長の剝片を利用し、打撃点と反



第７図　石器実測図　½

対側に刃部をもつ。石材はいずれも硬質頁岩である。

フレーク（第７図７～９）　石材には硬質頁岩、珪質頁岩、玉髄が利用されている。打面を形成するものがほとんどで、自然面をもつもの（７・８）ともたないもの（９）とがある。７は主要剥離面の反対方向から加撃される面と、ほぼ横方向から加撃される面とがある。８は任意の異方向加撃であり、９は不明である。

チップは調整痕をもたない小剥片のみである。

この他に第Ⅰ層耕作土から近世以降のものと思われる陶磁器が出土している。

Ⅴ　まとめ

１　検出遺構

高屋敷Ⅲ遺跡の調査は二次にわたって行なったが 検出されたものは極く最近の焚火跡と時期不明の焼土遺構のみである。最近の焚火跡とは調査前に雑木を焼却した跡で中央に焼土、灰、炭化材が堆積し、そのまわりに小さな溝状のものがめぐるものである。溝状のものは消火のための土取穴である。検出された焼土遺構はボソボソした焼土が認められたもので、柱穴等は発見されず竪穴住居跡とは見られない。上面が削平されて伴なう遺物が判然としないが、比較的多くの遺物が集中しており、遺物と関連ある一時的な火気施設と考えられる。ただ、遺物が混在の状態であり、前述の焚火跡の可能性が全くないわけではない。

２　出土遺物

出土した遺物は縄文時代から古代にわたるが、数はそれほど多くなく、ほとんどがⅡａ層から出土している。各時代の遺物が混在し、縄文土器は３群に分類される。１群土器は胎土に繊維を含むもので早期から前期初頭に相当するもので、数が少なく全て破片である。平坦地全域にまばらに分布している。２群土器は刺突線刻を特徴とする宮古Ⅲａ式に該当するもので個体ごとにまとまって出土する。数は多くないが復原可能土器が含まれている。３群土器は三叉状文で代表される大洞Ｂ式で晩期初頭に位置付けられる。２群同様数は多くないが復原可能土器が含まれ、個体ごとにまとまって分布する。

弥生式土器は縄文が充塡される磨消縄文である。色調は黒色で光沢があり、器表面に赤色顔料が塗布されている。磨消縄文が主体となる桝形囲式に類似するもので弥生中期に位置付けられよう。２点のみであるが北側斜面に限られるようである。

土師器は坏形、甕形に分けられるが全て破片である。坏形は内面黒色処理しているものが多いがそうでないものもある。いずれもロクロ成形している。甕形にはロクロ成形したものは見られない。また、須恵器は伴わないようである。おおよそ9～10世紀頃と考えられる。北側斜面際に集中して分布する。

石製品は打製石斧、スクレパーなど完成品もあるが、フレーク、チップ等も含まれている。全域にまばらに分布する。時期は不明である。

3　遺跡の性格

今回の調査では竪穴住居跡等が発見されず集落跡（居住地）とは見られない。縄文時代早期から古代にかけての遺物が出土しており、生活の痕跡は推測される。当遺跡の遺物は①古いものは少なく新しいものほど多くなり、②各時期の遺物が混在し、③斜面に集中する等から二次堆積と考えられる。二次堆積とは言っても遠くのものが運搬堆積したものではなく、その原位置は土師器のように坏形、甕形がそろっており隣接地域にもとめるのが妥当であろう。また、石製品の中にはフレーク、チップ等居住地の遺物が混入しており、極めて近くに集落の存在が推測される。あるいは調査地が集落の一部、末端なのかもしれない。

一方、個体ごとにまとまって出土する2群、3群土器は異なる出土状況にあるという意味で人為的な廃棄行為を示していると言える。しかも確たる遺構の発見されない当遺跡では遺構との関連でとらえることができず、短期間の滞在における破損遺物の廃棄が想定される。すなわちキャンプサイト的な一時的滞在地が考えられるのである。

この種の遺跡の性格は単独では解決されない部分が多く、二次堆積、短期間の滞在地は生活根拠があってのそれであり、周辺遺跡との関連の中でとらえなければならない。生活根拠地は総合的に検討しなければならず、資料の増加をまたなければならない。今回の調査は調査範囲が限定され、推定の域を出ないが確たる遺構のない遺跡の一例として提示するものである。

注　1　中川久夫他　「北上川上流沿岸の第四系および地形」　地質学雑誌811
　　2　草間俊一他　「盛岡市一本松熊の沢遺跡調査報告書」
　　3　岩手大学考古学研究会編　「大館町遺跡」
　　4　本報告書収録
　　5　後藤勝彦　「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」　考古学雑誌48－1
　　6　斉藤良治　「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について」
　　仙台湾周辺の考古学的研究
　　7　本報告書収録
　　8　滝沢村教育委員会　「大畑遺跡」
　　9　武田良夫　「岩手県における弥生式土器について」　考古風土器3
　　10　八重樫良宏　「下羽場遺跡」　東北自動車道関連遺跡調査報告書Ⅱ
　　11　本報告書高屋敷Ⅱ遺跡　第7図遺跡分布図参照
　　12　大山　迫　「打製石斧」　日本考古学辞典

高屋敷（Ⅱ）遺跡

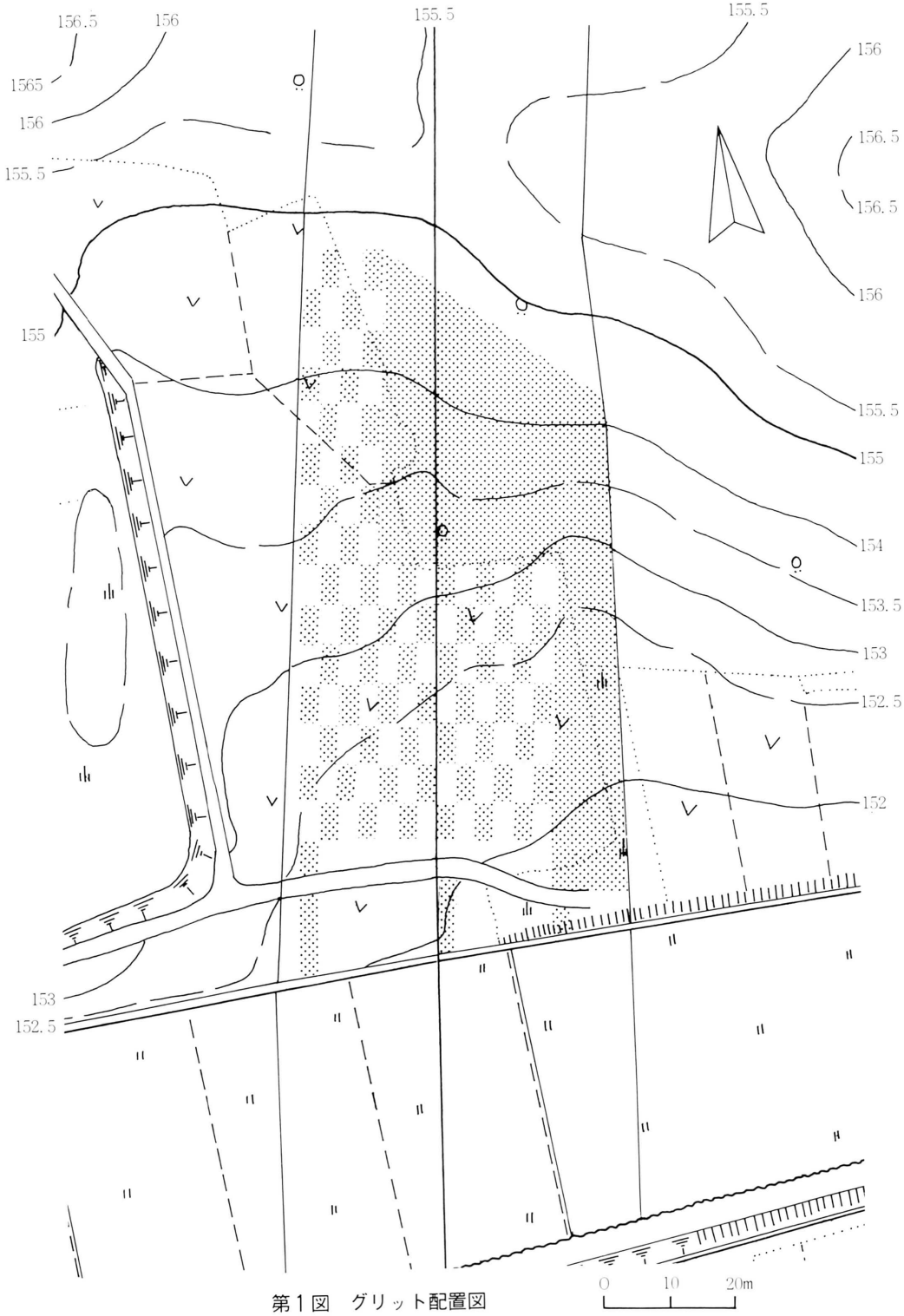
遺　跡　名：高屋敷Ⅱ（略号ＴＹⅡ77）

所　在　地：岩手郡滝沢村大字滝沢第4地割字高屋敷平3-1
3-2,4-1,8-2,13-1,13-4

調 査 期 間：昭和52年4月4日～6月18日

調査対象面積：4,743㎡

発掘調査面積：4,743㎡


156.5
156
155.5
155.5
156
1565
156
156.5
155.5
156.5
156
155
155.5
155
154
153.5
153
152.5
152
153
152.5
0
10
20m

第1図　グリット配置図

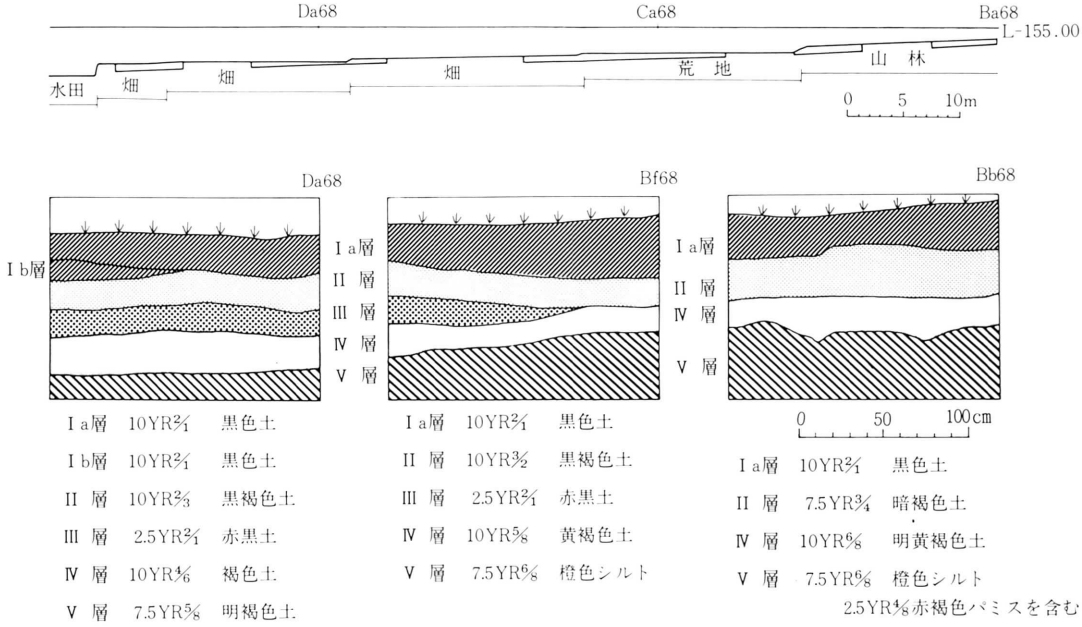
Ⅰ　位置と立地

高屋敷Ⅱ遺跡は岩手郡滝沢村大字滝沢第4地割字高屋敷平3－1他にあり、盛岡駅の北西約6㎞、滝沢村役場の北東約2.5㎞に所在する。西方には400ｍ以上の第三系からなる山地が南北に連なり、山麓に小規模な扇状地が並んでいる。その東には樹枝状に残された丘陵性台地が広く分布し、火山放出物に厚く覆われている。調査地は南北がそれぞれ細谷地・平蔵沢に開析された東西に走る丘陵性台地に立地する。調査地点の標高は152～154ｍで水田面との比高は約1ｍである。さらに低い水田面とは約3ｍを測る。現状は山林・荒地・畑地で、荒地は旧耕作地である。

山裾の扇状地、広範な丘陵性台地には大畑遺跡（縄文早・後・晩期）、外久保遺跡（縄文・土師器・須恵器）をはじめとして数多くの遺跡が分布している。当遺跡周辺では西に高屋敷Ⅰ遺跡が隣接し、同台地北斜面には高屋敷Ⅲ遺跡がある。また、細谷地を隔てた南には大久保遺跡、大緩遺跡がある。当遺跡はこれら遺跡群の中のひとつである。

Ⅱ　調査経過

本調査は昭和52年4月から6月にかけて高屋敷Ⅲ遺跡と平行して実施した。調査範囲は東北縦貫自動車道が丘陵性台地を横断して通るため東西約50ｍ、南北約90ｍの　4743　㎡である。地



第2図　基本層序

区割は道路中心杭ＳＴＡ 375 ＋00とＳＴＡ 375 ＋60を基点として30ｍごとのブロックを、さらに３ｍを単位とするグリットを設定し、375 ＋00以北をＡ区とし順次南にＢ・Ｃ・Ｄ区とした。

調査はまず各地区ごとに土層観察と遺構検出面の確認のため７個所（14グリット）を試掘した。その結果、北半では幾分傾斜し遺構検出面まで50～60cmあり、南半ではほとんど水平で遺物が第Ｉ層から発見されることが判明した。そこで北半については重機を用いて排土することにし、基本的には３×６ｍの２グリットを遺構検出の単位とした。全域市松様に掘り進め、遺構の検出をもって拡張精査することにした。その結果、第Ⅱ層から溝状土壙と焼土遺構が検出され、表土及び第Ⅱ層から縄文土器と石器が発見された。

Ⅲ　基本層序

調査地は南緩斜面（山林）と平坦地（荒地・畑地）からなり堆積層に若干の相違が見られる。基本的には次のようになる。

Ｉａ 層　黒色有機質腐植土。表土及び耕作土。遺物を若干含む。

Ｉｂ 層　黒色有機質腐植土。畑地南端縁辺部にのみ存在しＩａ層と大差ない。畑地造成の際の盛土と考えられる。遺物は含まない。

Ⅱ　層　黒褐色・暗褐色シルト質土。褐色の強い所があるがＩ層に類似する。本来の遺構検出面で遺物包含層である。

Ⅲ　層　赤黒シルト質土。平坦地に見られ斜面には存在しない。湧水の多い所から検証され湿地に関連あるものと考えられる。赤褐色パミスを含む。

Ⅳ　層　明黄褐色・黄褐色・褐色砂質シルト。砂質が強くサラサラしている。本来の３層で遺構確認面である。

Ⅴ　層　橙色・明褐色シルト質土。赤褐色パミスを含む。パミスだけの層がある。

以上の層はいずれも火山放出物で分火山灰に相当するものと思われる。(注1) この下には青灰色砂層、黄褐色シルト質土（粘性あり）、黄色・灰色粘土層と続くようであり、南方約100ｍでは粘土層に礫・木片が混入している。

Ⅳ　検出遺構

溝状土壙（第３図、図版４の下）

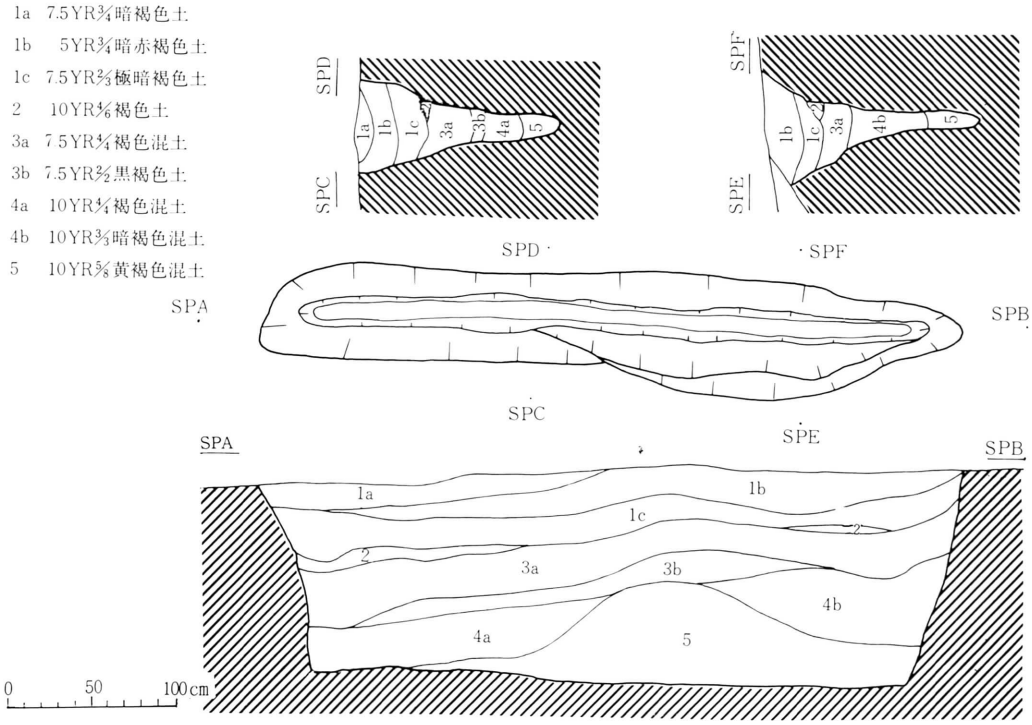
本土壙は調査区の南東部にあり南緩斜面の下位に位置する。斜面から平坦部に移行する部分にあたる。平面形は細長い溝状を呈し、長軸方向が南東を向き等高線にほぼ平行する。断面形は長軸方向で開口部が若干開く方形を成し、短軸方向では開口部が大きく開くＹ字状を呈す。底部から中項までが狭い筒形で、それより上が大きく開く。壁は崩壊している所もあるが両端

は原形をとどめ直に立ち上がる。特に東端は保存状態が良好で壁面は刃物で切り取られた如く真平である。底は平坦でほぼ水平であり、底面にはピット等の施設は認められなかった。規模は開口部が 370 × 50cm、底部が 318 × 10cmで深さが検出面から 115 cmである。原形をとどめていると見られる東端では上幅で約30cm、下幅で10cmを計測する。

埋土は(1)暗褐色土、(2)褐色砂質シルト、(3)褐色混土、(4)暗褐色混土、(5)黄褐色混土に細分される。(1)・(3)はほとんど同質の汚れた火山放出物で基本層序のⅡ層（暗褐色シルト質土）に類似する。前者はⅡ層そのもので、後者はそれに壁面のⅣ層（明黄褐色砂質シルト）・ Ⅴ層（橙色シルト質土）が混入したものである。(2)はⅣ層の崩壊堆積土であり、(5)は赤褐色パミスがブロック状に見られⅣ・Ⅴ層の崩壊土である。(4)は(3)・(5)の混土で崩壊土の二次堆積したものである。流入堆積土・崩壊土いずれにしても自然堆積土で、遺物は全く発見されなかった。

この種の土壙は高柳遺跡、大緩遺跡、大久保遺跡(注2)で多数発見されており詳しいことはそれらに譲ることにして、ここでは本来の形状と使用法について若干考えてみることにする。

検出された形は前述した如く下半が筒形をなし上半が大きく開いてＹ字状を呈す。壁面を構成しているものは基本層序のⅡ・Ⅳ・Ⅴ層であり、大きく開くのはⅣ層から上の部分である。Ⅴ層は赤褐色パミスで固く締まっており、Ⅳ層は明黄褐色シルトで非常に崩れやすい。開口部が大きく開くのは壁（Ⅳ層以上）の崩落によるものであり、本来の形を伝えるものではない。本



第３図　溝状土壙

来の形は崩壊以前の姿で、下半の幅の狭いことと開口部東端が直に立ち上がることから遺構全体が下半同様直に立ち上がると類推される。極めて幅の狭い溝状の土壙と理解される。

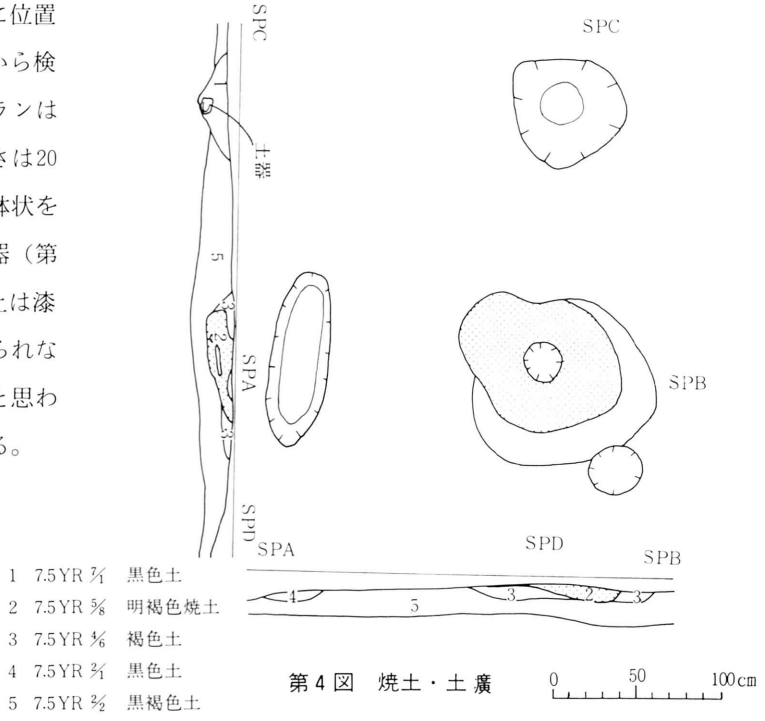
次に使用法であるが、埋土は(1)、(3)がⅡ層の流入堆積であり、(2)・(5)が壁の崩壊土である。土壙が流入堆積土・崩壊土で充満していたということは空洞であったことになり、また、自然堆積に委ねられていたということは放置されたことを意味する。すなわち、空洞のまま放置されたことになる。「空洞のまま放置」とは、中に充塡して用いるものであれば抜き取られた後に放置されたことになるし、空洞のまま使用するものであればそのまま放置されたことになる。極めて幅の狭い構状の土壙であり後者を想定するのが妥当であろう。

焼土遺構（第４図）

この遺構は平坦な畑地にあり、調査区の南東部に位置する。Ⅱ層上面で検出された焼土で、既に上半は耕作のため削平されており、炉縁石等の施設は確認されなかった。焼土は不整楕円形（110×85cm）を呈す現地性の焼土で、火熱を強く受けて固くなり厚さ17cmに達する。その中ごろに褐色土が薄く層をなしており上下に分かれる。焼土の下には掘り込みが認められる。焼土の周辺から柱穴が発見されなく、竪穴住居跡に伴う炉跡とする確証はない。全く竪穴住居跡と考えられなくもないが性格不明の火気施設としておく。

小土壙（第４図）

焼土遺構の北方160cmに位置し、焼土と同様Ⅱ層上面から検出されたものである。プランは70×70cmの不整円形で深さは20cmである。中央が凹む擂鉢状をなし底部近くから縄文土器（第５図14）が出土した。埋土は漆黒土の単層で柱穴とは見られない。焼土遺構に伴うものと思われるが性格等は不明である。



第４図　焼土・土廣

Ⅴ　出土遺物

遺物は緩斜面のⅡ層上面から発見された石鏃2点を除いて平坦地のⅠ・Ⅱ層から出土している。縄文土器が約200点、石製品が9点、陶磁器が6点である。土器はいずれも破片で器形の復原できるものはない。

1　縄文土器（第5図）

縄文土器は早期から晩期まで含まれるが3群に大別される。

第1群土器（第5図1～13、図版2・3の1）

早期貝殻文と早期末葉から前期初頭に位置付けられる繊維土器を本群とする。文様等から5類に分けられる。

(a)　**貝殻腹縁文をもつもの（1）。**　器表面はアカガイかサルボウの腹縁を圧痕したもので、間隔をもつ左下がりの斜位とその下の横位のものからなる。内面は丁寧に横ナデされている。口唇部は尖り気味の平口縁である。色調は暗赤褐色で器壁は厚く、焼成は良好で堅緻である。

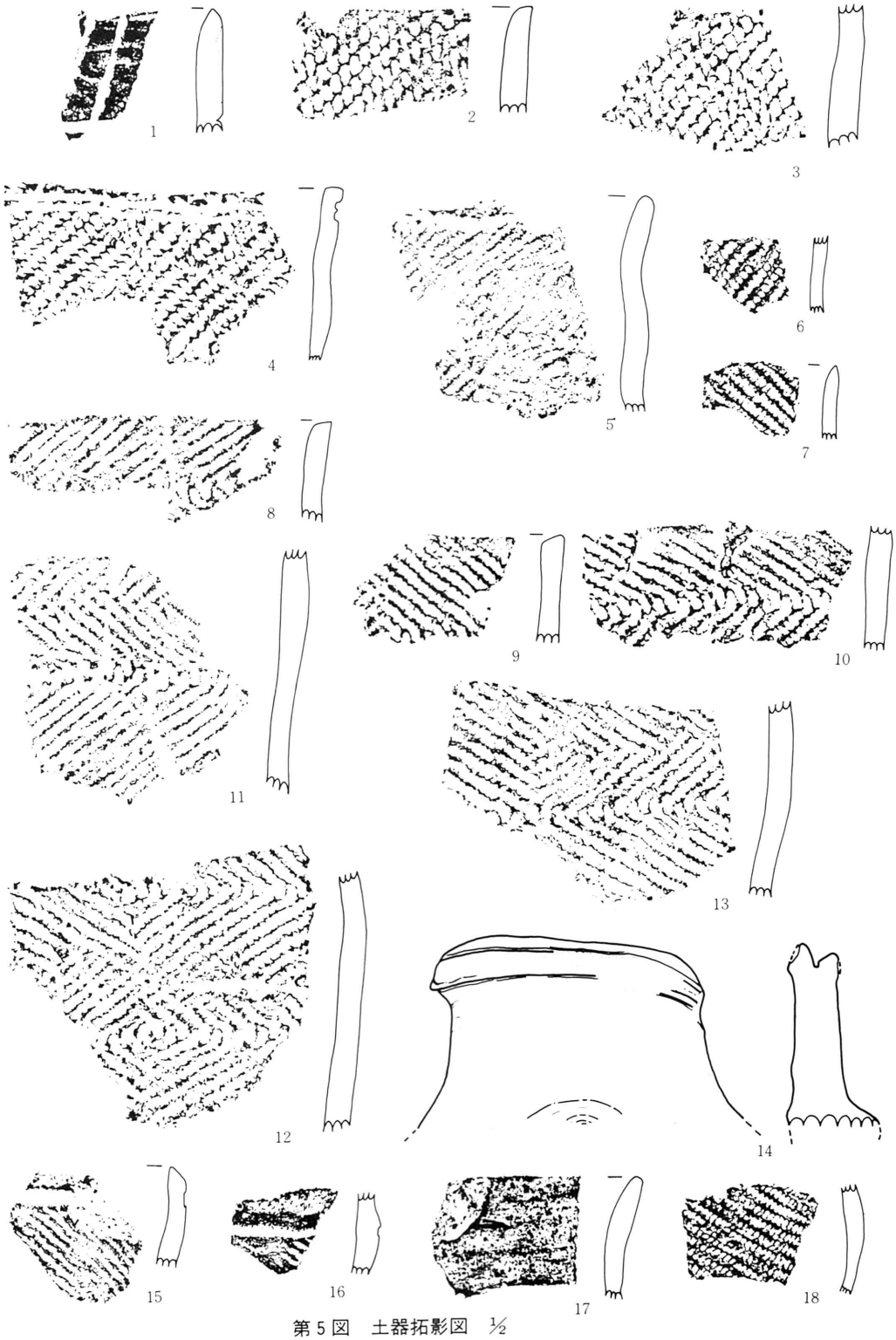
(b)　**大き目の節をもつ斜縄文のもの（2・3）。**　器表面に太めの単節斜縄文（L－R）をもつもので縄文は鮮明である。器壁は厚手で色調は灰褐色か青褐色である。胎土に繊維・石英を含み焼成は良好で堅い。2は外傾ぎみに立ち上がる平口縁である。

(c)　**2条の沈線がめぐるもの（4）。**　口縁直下に2条の平行沈線がめぐるもので、地文は鮮明な複節斜縄文（L－R－L）である。平口縁に近い波状口縁で外傾ぎみに立ち上がる。器壁は薄く凹凸がある。焼成は良好で色調は灰褐色か青褐色である。繊維を含む。

(d)　**ループ文に類するもの（5）。**　不鮮明であるが2段のループ文が見られる。原体は単節斜縄文（L－R）で横方向に回転施文している。口縁部近くで一度くびれ外反する器形で、ゆるやかな波状口縁をなす。器壁は薄く脆弱である。繊維を含む。

(e)　**羽状縄文で結束のあるもの（6～13）。**　結束のある羽状縄文であるが、その一部分と考えられる斜縄文（6・7）、羽状縄文を含むものとする。この類の上器が大半を占める。口縁部は角形の口唇部をなし、直行するかやや外傾ぎみに立ち上がる（8・9）。底部は平底で無文であり、縄文が底近くまで施文されている（図版2の13・14）。原体は単節の羽状縄文で節が大き目であり横方向に回転施文される。中には2度・3度重ねて施文されるものがある。胎土に繊維を多量に含み石英が目につく。色調は灰褐色・青褐色・赤褐色で焼成は良好で堅緻である。赤褐色のものには脆いものが多い。

(a)は貝殻腹縁文であり大寺Ⅱ式[注3]に比定され早期中葉に位置づけられるであろう。(d)はループ文と見られるもので大木Ⅰ式に比定され、(c)は平行沈線をもつものであり、(e)は結束を有する羽状縄文であり大木Ⅱa式に比定されるであろう。(b)(c)(d)(e)はいずれも胎土に繊維を大



第5図　土器拓影図　½

量に含むものであり早期末葉から前期初頭に位置づけると考えられる。

第2群土器（第5図14～16）

中期前葉と思われるものを本群とした。数はそれほど多くない。

14は小土壙から出土したもので深鉢形土器の六型突起部分である。器表面は無文で本体接合部の突起中央に瘤状の突出が見られ、先端には隆帯による装飾文が付く。内面は渦巻文のくずれた形が隆帯によって表現され、一端が突起先端の突出部に取り付く。突起先端部は2つに割れ左端が内側に突出し、表面には隆帯装飾文が取り付き、内面には渦巻文の一端が取り付く。色調は灰褐色か青褐色で胎土に小石等を含む。焼成は良好で堅い。大木7b式に相当すると考えられる。

15は内彎しながら立ち上がる口縁部破片で口唇部が内側に向って薄くなる。口縁直下に幅広い沈線がめぐり、下半は無節の斜縄文を地文とする。小破片のため磨消手法は認められなく沈線のみの装飾文と見られる。沈線は直線的である。16は口縁部近くの胴部破片で隆帯と沈線がめぐる。下半は無節斜縄文を地文とし沈線が装飾文となる。いずれも胎土に石英等の小石を含み色調は暗赤褐色で、焼成は良好で堅緻である。15は外面に炭化物が付着している。

第3群土器（第5図17・18）

後期前葉と思われるものを本群とした。D区南西端からまとまって出土したもので全て70点余の小破片（細片）である。同一個体と見られる。

17・18は同一個体と思われるものである。17は平口縁で大きく外反し、頸部下端に1条の沈線がめぐる。その沈線は口縁部無文帯と下半の地文とを区画している。地文は単節の細かい斜縄文（L－R）である。胎土に石英等の小石を含み灰褐色で堅緻である。器表面に炭化物が付着している。細かい縄文と無文の口縁部から後期と思われる。

この他に縄文晩期と思われる無文で薄い小破片が1点出土している。

2　石製品（第6図）

発見された石製品は9点である。このうち石器と言われる人為的加工の施されたものは石鏃2点、石匙2点、尖頭器1点、円盤状石製器1点である。

石　鏃（第6図1・2）

両者ともいわゆる有柄式の石鏃で硬質頁岩を素材としている。1は側縁が直線的な二等辺三角形で基部がY字状に取り付く。断面は菱形を呈し、全面押圧剥離による両面加工が施されている。形の整ったものであるが基部の一部が欠損している。2は若干ふくらみをもつ側縁をなし基部はT字状に付く。断面は薄い菱形を呈す。背腹両面に一次剥離面を残し、刃部の鋭利な部分には調整を施していない。1に比較して粗雑な造りである。先端が僅かに破損している。

石　匙（第6図3・4）

両者ともいわゆる縦型の石匙である。縦長の剝片を素材とし、打瘤部分をつまみとしている。3は縦型であるが両刃部は逆三日月をなし、つまみがほぼ直線上に付く。断面は三角形を呈し稜線に向って全面押圧剝離が施され、一部背面に及ぶ。背面には一次剝離面を残しほとんど二次加工されない。先端部を欠損している。石材は石質凝灰岩である。4は刃部に差がある。一方が直線的であり、他方は内彎し大きく彎曲する。方形に近い逆三日月をなし、つまみが延長線上にはない。断面は三角形を呈し直線的刃部は稜線に向って調整され、他方は細かく剝離され刃部先端背面に及ぶ。背腹両面に一次剝離面を残し背面はほとんど加工されない。つまみは小さく一部破損している。石質は硬質頁岩である。

尖頭器（第6図5）

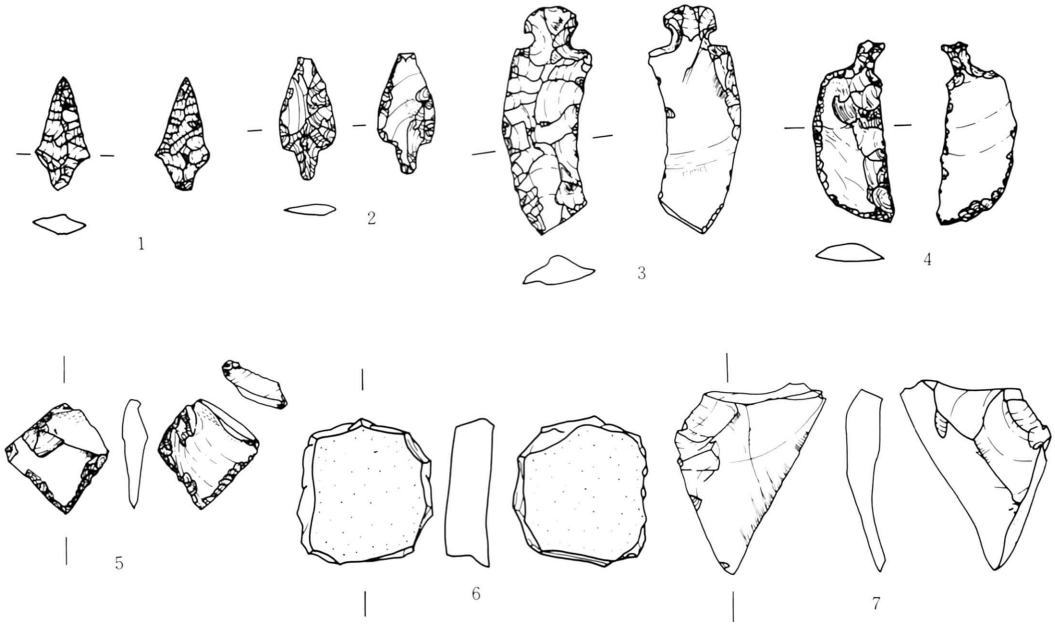
方形を呈し、隣り合う二辺に表裏両面から細かい剝離を施し、ピック状に成形したものである。二辺のなす角度は90度近くあり、特に先端を細長く成形したものではない。石錐とは見られないので尖頭器としておく。背腹両面に一次剝離面を残している。石材は硬質頁岩である。

円盤状石製品（第6図6）

厚さ1㎝ほどの板状の石材を表裏両面から加撃して直径3㎝の円形に近い方形に成形したものである。

フレーク（第6図7）

三角形を呈す剝片で調整打面をもつが、打撃方向は一定ではない。断面台形に近い剝片に成



第6図　石器実測図　½

形している。一部自然面を残す。石材は石質凝灰岩である。この他に加工痕の不明な剝片が2点出土している。それらは硬質頁岩である。

3　陶磁器

近世以降のものと思われる陶磁器が6点出土している。すべてⅠ層の耕作土から発見されたものである。中には明治時代以降の銅版絵付のものが含まれている。

Ⅵ　まとめ

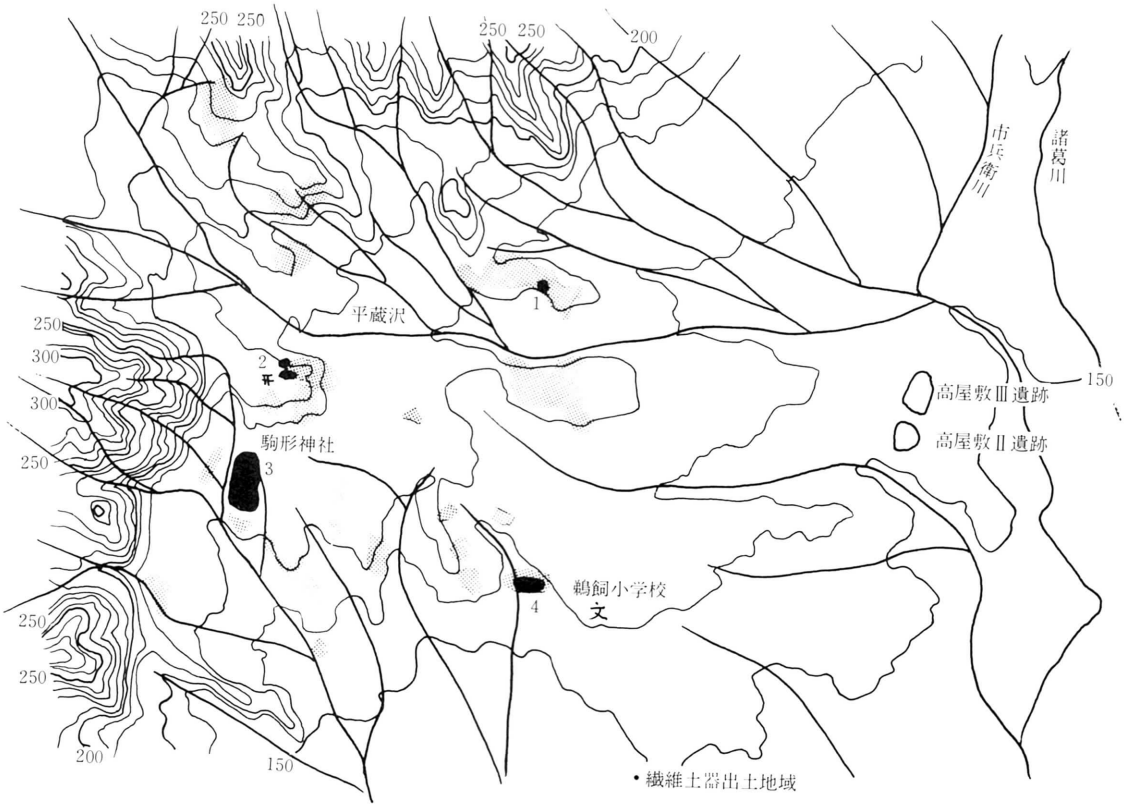
1　検出遺構

今回の調査で検出された主な遺構は溝状土壙と焼土遺構である。溝状土壙は細長い溝状を呈し、開口部が大きく開いている。それは崩れやすい砂質シルトのためで、その形が本来の形をそのまま伝えるものではない。形態の把握はその機能・性格等を考える上で重要な指標となるものであり、本来の形を把握しなければならないと考える。残されたものから復原することは難かしいことであるが、今回の場合は①下半が幅狭くなっていること。②開口部の一部が原形をとどめていることなどにより、推定復原することが可能となった。①②から本来の形は土壙全体が下半同様直に立ち上がると推測され、極めて幅の狭い溝状の土壙と理解される。この種の土壙は「落し穴」と考えられているが、当遺跡の場合は底部にピット等の施設が発見されず、それを証明する積極的な根拠に欠ける。ただ、土壙は自然堆積に委ねられており空洞のまま放置されたと考えられ、「落し穴」としても矛盾はない。

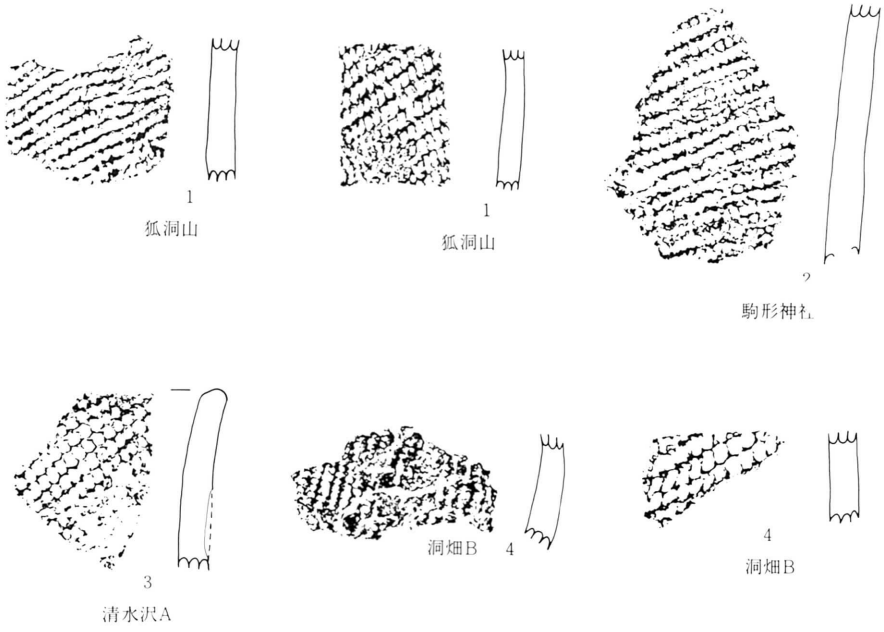
焼土遺構は柱穴が発見されず竪穴住居跡と見られないが、現地性の焼土であり、第2群土器が集中していることから住居跡でないとしても、キャンプサイト的な短期間の火気施設と推測される。

2　出土遺物

出土した遺物は縄文時代早期から後期にわたるが、数はそれほど多くない。ほとんどがⅡ層からの出土で平坦地に限られる。縄文土器は3群に分類される。1群土器は貝殻文土器と胎土に繊維を含むもので早期中葉と早期末葉から前期初頭に相当するものである。Ｄｄ71付近に集中しまとまって出土するが、全て破片で接合するものは7例にすぎない。その出土状況は直立・倒立・表面・裏面と種々の様相を呈し、二次堆積の遺物包含層と考えられる。2群土器は大型突起に代表される大木7ｂ式に該当するもので数は非常に少ない。焼土遺構のまわりに比較的多くみられ、その遺構に伴う遺物と考えられる。焼土遺構が南東隅で発見されたものであり調査区域外に続くものと思われる。第3群土器は縄文後期前葉の粗製土器と考えられるものである。全て小破片であるが同一個体と見られ、範囲が限定されており人為的廃棄が考えられる。遺物の出土状況は直立・倒立・表面・裏面とさまざまであり二次堆積の可能性がないわけではない。



第7図　遺跡分布図　　1：25.000



第8図　土器拓影図　½

石製品は数が少ない。石匙・刺突具・フレークは第1群土器と共に出土しており、縄文早期末から前期初頭に位置づけられる。石鏃は単独で出土し、円盤状石製品は表土から発見されたものである。

3　遺跡の性格

今回の調査では溝状土壙、焼土遺構が検出され、縄文土器等が発見され、生活の痕跡が類推された。しかし、竪穴住居跡等が発見されず集落跡（居住地）とは見られない。

斜面では溝状土壙が検出され、石鏃が単独で発見された。溝状土壙が「落し穴」と考えられており、もしこれを狩猟に用いられたものと仮定し、石鏃を狩猟の際の未回収と見るならば、この台地は「狩猟の場」ということになる。石鏃と溝状土壙を短絡的に結びつけたきらいがないわけではないが、考えられないことではない。

一方、平坦地では焼土遺構が検出され、遺物が各時期ごとにまとまって出土している。1群土器は関連する遺構が検出されず、二次堆積の様相を呈しており運搬堆積が考えられる。遺物がまとまって出土しており隣接地域のものが堆積したと見られる。あるいは調査地がその一部なのかもしれない。2群土器は焼土遺構に集中し発見され、遺構に伴うものと推測される。焼土は竪穴住居跡の炉跡とは見られなく、キャンプサイト的な焼土と考えられる。3群土器は同一個体がまとまって出土し、全て小破片で復原可能とはならない。しかし、高屋敷Ⅲ遺跡の2群・3群土器の出土状態に類似しており人為的廃棄が推測される。調査地域内では該時期の確たる遺構が発見されず、短期間の滞在における破損遺物の廃棄と考えられる。すなわち、キャンプサイト的な一時的滞在地が想定される。

この種の確たる遺構の伴わない遺跡は単独では解決しえない部分がある。特に二次堆積、短期間の滞在地などは生活根拠（居住地）があってのそれであり、周辺遺跡との関連でとらえなければならない。そこで調査中に判明した遺跡を第7図に示しておく。それによると当遺跡の西方には数多くの遺跡が濃密に分布しており、これらの中に関連ある遺跡が含まれていると考えられる。しかし、生活根拠地は総合的に把握されねばならず、調査されない現段階ではそれを指摘することができない。

ちなみに、当遺跡は縄文早期から前期初頭にかけての繊維土器が主体をなしており、繊維土器の出土地点を抽出すると狐洞山・駒形神社・清水沢A・洞畑Bである。なお、この遺跡名は仮称である。

注　1　中川久夫他　「北上川上流沿岸の第四系および地形」　地質学雑誌811
　　2　本報告書収録
　　3　林　謙作　「縄文文化の発展と地域性　東北」　日本の考古学Ⅱ

大久保遺跡

遺　跡　名：大久保（略号ＯＫＢ76）
遺跡所在地：岩手郡滝沢村大字滝沢第4地割大久保
調査期間：昭和51年9月20日～12月4日
調査対象面積：約11,000㎡
発掘対象面積：約3,311㎡

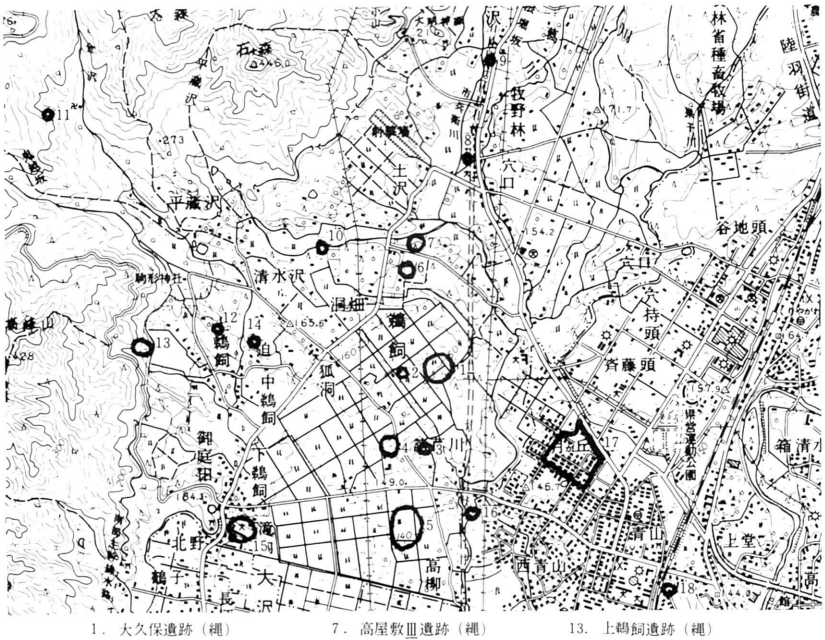
Ⅰ　遺跡の位置と立地（第１図）

本遺跡は岩手郡滝沢村大字滝沢第４地割字大久保にあり、滝沢村の南東部で盛岡市に隣接する地域に位置する。

奥羽山脈東麓の鬼越丘陵より東へ伸びる丘陵性台地の東緩傾斜地に立地する。当遺跡の北側は東流する平蔵沢、谷地にて比高は約４ｍ位であり、東方は緩傾斜にて水田へと下がり、南方西方共に台地が続く。この台地の大部分は分れ火山灰その他の火山拠出物等で覆われている。

標高約157.５ｍ内外で、現状は畑地となっているが、昭和41年に耕地整理が行われた際に削平や盛土等の工事により地形がいく分か変わり、又撹乱をうけている。

この付近には多数の遺跡が散在する。東方の低地には平安時代の遺跡があり、南北の台地続きには溝状土壙が検出されている遺跡がある。西方鬼越丘陵の裾部には数多くの縄文時代の遺跡がある。

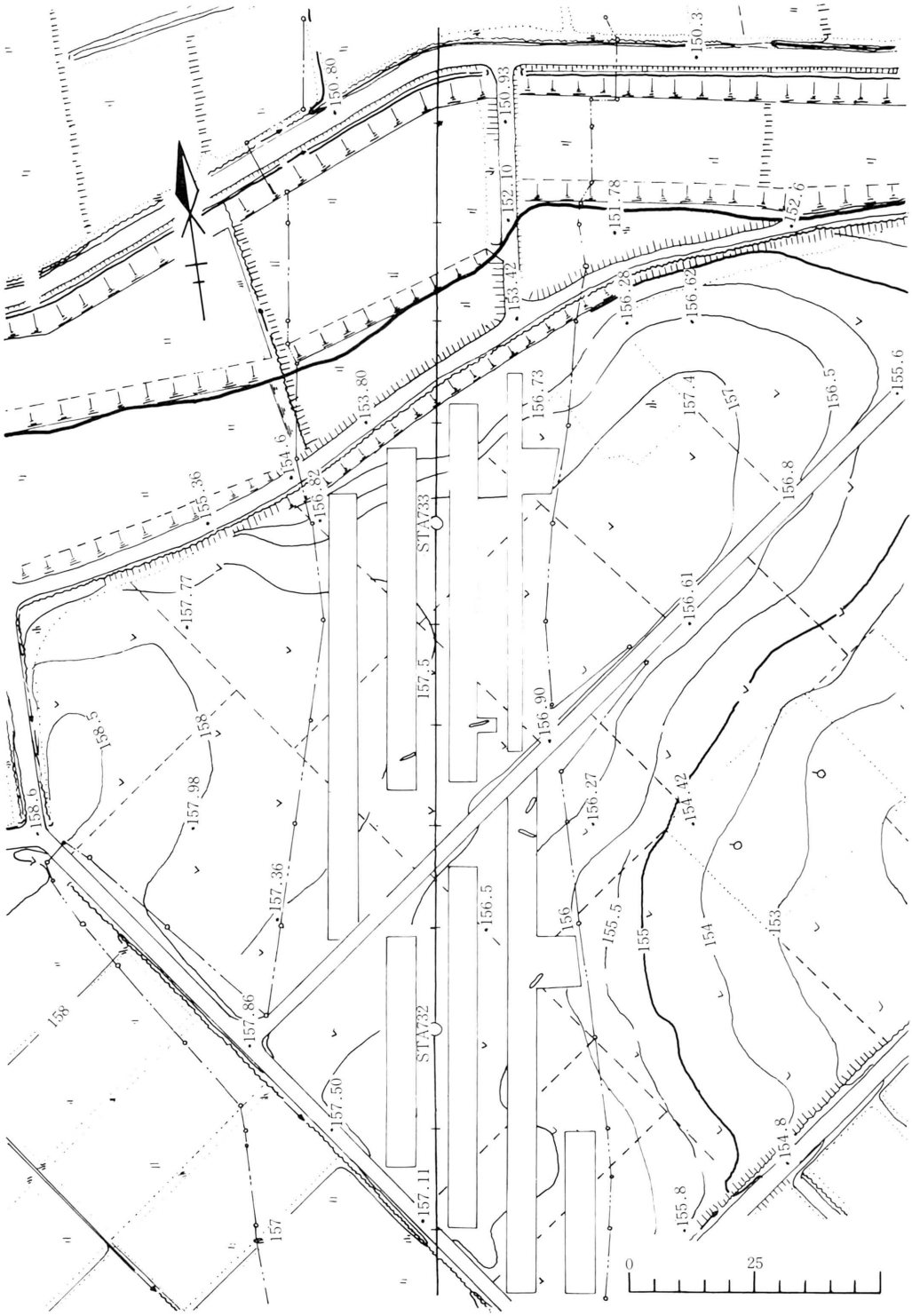


1．大久保遺跡（縄）
2．白石遺跡（縄）
3．大緩遺跡（縄）
4．滝沢笹森遺跡（縄）
5．高柳遺跡（縄）
6．高屋敷Ⅱ遺跡（縄）
7．高屋敷Ⅲ遺跡（縄）
8．中村遺跡（縄）
9．根堀坂遺跡（縄）
10．清水原遺跡（縄）
11．仏沢遺跡（縄）
12．大畑遺跡（縄）
13．上鶏飼遺跡（縄）
14．外久保遺跡（縄・平）
15．滝向遺跡（縄）
16．境橋遺跡（平）
17．観武町遺跡（平）
18．長畑遺跡（平）

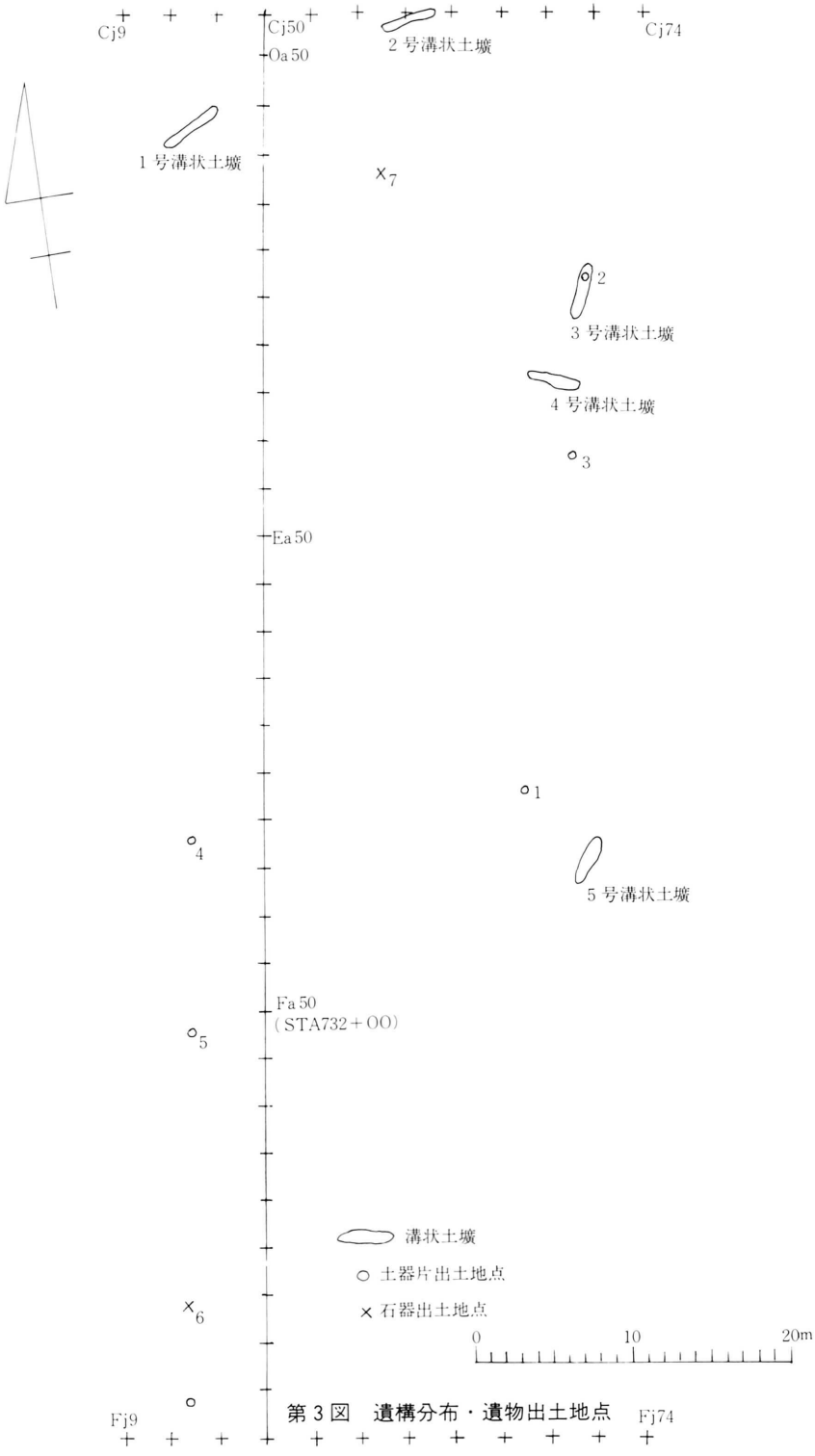
第１図　遺跡の位置と主要遺跡（盛岡５万）

Ⅱ　調査の経過（第２図）

大久保遺跡は昭和47年の遺跡分布調査の際に発見された遺跡で、畑地内に縄文時代中期の土器片が若干散布し、キャンプ地と推定されていた。遺跡の一部が東北縦貫自動車道の敷地内となるため、敷地内の発掘調査を実施する事になった。



第２図　地形図と調査区域



第 3 図　遺構分布・遺物出土地点

路線中心杭 732＋00と 732＋80を結ぶ線を基準とし、それに直交する線を設け、3ｍグリッドを組んだ。中心杭 732＋00の地点をＦａ50グリッドとし、東西南北に夫々延長してグリッド名を付した。各グリッドに合わせて、東西幅６ｍで南北に長いトレンチを一列おきに設定し、遺跡における遺構の分布状況を検討した。第Ⅰ層黒色腐植土（表土）除去を行うが、縄文土器細片が数点出土し、遺構は検出されなかった。第Ⅱ層極暗褐色シルト質土の上部より除去していく過程で溝状土壙５基が次々と検出され、又この層中より遺物が数点出土した。遺構検出面は第Ⅱ層の中位又は下位であり、発掘調査は第２図のトレンチ内だけを行った。

Ⅲ　遺跡立地面の基本的層序（第４図）

調査区域内における層序の調査は、Ｇａ71の南１ｍ地点よりＧｃ71地点の南北４ｍ間、深さ1.５ｍについて実施した。(第４図）その他各溝状土壙の壁面観察をも合わせて行った。

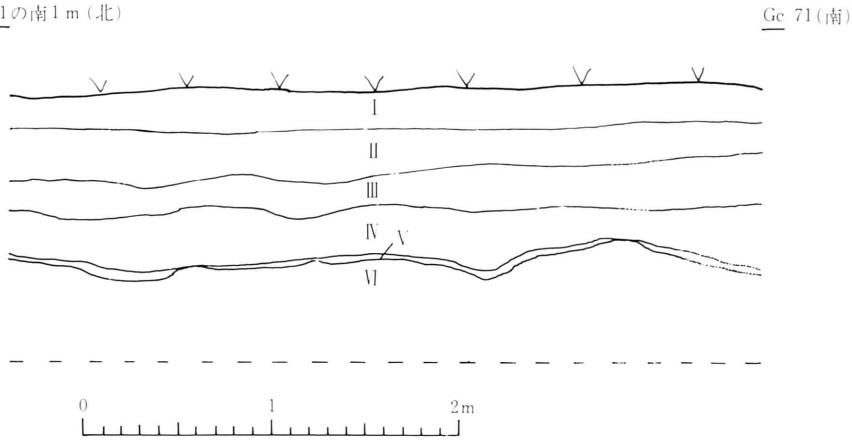
調査区域が比較的平坦な台地上に位置しているため、深掘断面及び各溝状土壙壁面観察の結果、それ等各地点において層序に大差は認められなかった。調査区域内における一般的な層序は６層に区分された。

第Ⅰ層：黒色腐植土（Ｈｕｅ 7.５ＹＲ2/1）表土の耕作土である。遺物包含層である。

第Ⅱ層：極暗褐色シルト質土（Ｈｕｅ 7.５ＹＲ2/3）さらさらして固くしまっており、炭化物や小礫を少量含み、上部は黒褐色腐植土が少量混入する。この層迄が遺物包含層であり、又遺構検出面でもある。

第Ⅲ層：明褐色シルト質土（Ｈｕｅ 7.５ＹＲ5/6）細かいシルトでやや粘性があり、固くしまっている。小礫多く混入し、炭化物も微量ながら含まれる。

「第Ⅳ層：明褐色礫土（Ｈｕｅ 7.５ＹＲ5/8）固くしまっているがざらざらしている。いわゆ



第４図　遺跡立地面の基本的層序

るパミスといわれているものである。

第Ⅴ層：暗青灰色砂質土（Hue10ＢＧ）薄い層である。

第Ⅲ層から第Ⅴ層迄の３層が分れ火山灰といわれる降下火山灰層がある。

第Ⅵ層：橙色シルト質土（Hue 7.5ＹＲ⅝）非常に細かなシルトで、小炭化物を微量含む。溝状土壙はこの層迄掘り込まれている。

Ⅳ　発見された遺構（第２・３・５図、図版１・２）

本遺跡調査地点からの検出遺構は、溝状土壙５基である。北西から南東にかけて遺構番号を順に付し、更にグリット名も付した。これらの遺構は、全て平坦面に位置し、基本層序の第Ⅱ層下部で確認され、それ以下を基本層序の第Ⅵ層迄掘り込んで構築されているものである。

第１号溝状土　（Ｄｂ６溝状土壙）

検出面での平面形は溝状であり、底部平面形は更に狭小の溝状を呈し平坦である。短軸方向の断面は上半やや傾斜をもつ外開きで、下半は狭くなり垂直に近く、撓状を呈す。長軸方向の断面は垂直に近い立ち上がりを呈すが、西側壁面中位付近は壁面崩落によって生じたと思われる入り込みになっている。

埋土状態は自然堆積で出土遺物はない。１層は開口部よりの流れ込みで、２層～３層は壁部崩落土と流れ込み土の混合と思われる。

開口部(cm)	底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
403 × 47	402 × 11	127	N－60°－E	無し	第５図・図版１

第２号溝状土壙（Ｃｊ56溝状土壙）

上縁平面形は溝状を呈し、底面は平坦にして狭小の溝状を呈す。短軸方向の断面は、上半やや外開きになるが垂直に近く、中位に段がついて狭まり、下半も垂直に近い立ち上がりで、柱状を呈す。長軸方向の断面は東西両壁共下位にて袋状に入り込んでいる。尚東壁の中位が入り込んでいるのは基本層序第Ⅳ層と第Ⅴ層の壁部崩落によって生じたものと思われる。

埋土は自然堆積によるものである。１層４層は腐植性の黒褐色土で流れ込みによるものと考えられる。底部の４層は最も初期的な堆積層である。２層は流れ込みと壁部崩落との繰り返しによる堆積であり、３層は壁部の明褐色シルト質土と明褐色礫土の崩落による堆積層である。

開口部(cm)	底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
376 × 40	385 × 13	110	N－82°－E	無し	第５図・図版１

第3号溝状土壙（Ｄｅ68溝状土壙）

上縁における平面形は、幅広の溝状を呈す。当遺跡内の溝状土壙中最も幅広であるが、北部はやや狭まる。底面は狭まった溝状を呈し、長軸方向の両端部が少し上がる浅皿状を呈する。短軸方向断面は上半がやや広がるクサビ状を呈すが、中位壁部に入り込みが見られる。これは壁部の明褐色礫土やシルト等の崩落により生じたものと考えられる。長軸方向断面は上半やや垂直に立ち上がり、下半が入り込んで袋状を呈す。北部壁中位の段状部分も壁部の崩落により生じたものと思われる。底部長軸の長さが当遺跡内で最も長い。

埋土は自然堆積であり、埋土上部の流れ込みの黒褐色腐植土２ａ層中より縄文片１点が出土した。堆積状況では流れ込みと考えられる１層４層等の腐植性の黒褐色土、流れ込みと壁部崩落の混合と考えられる２層、壁部崩落土が大半をしめる３層等がある。

開口部(cm)	底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
393 × 76	436 × 20	129	N－22°－E	縄文片１点	第５図・図版１

第4号溝状土壙（Ｄｇ65溝状土壙）

開口部は幅広の溝状を呈し、底部は狭小な溝状を呈し平坦である。短軸方向の断面は、上半やや傾斜をもって開き、下半は垂直ぎみな立ち上がりで柱状を呈す。下半より上半へと開いて移行する付近の壁部が基本的層序第Ⅳ層礫土になっており、埋土に礫土が多く入っている事よりこの部分の壁面が担当崩落したものと思われる。長軸方向は底部付近が袋状に入り込み、中間部がやや狭まり開口部が又広がる。

埋土状態は底部に５層の腐植性の黒色土が堆積し、その上に壁部崩落土の３・４層が、更に流れ込みと肩部壁部の崩落土の混じった２層が、最上部に流れ込みの１層が夫々自然堆積したものと考えられる。混入物無し、下位の堆積層程しまりなく、やわらかである。

開口部(cm)	底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
348 × 69	340 × 18	120	N－69°－W	無し	第５図・図版１

第5号溝状土壙（Ｅｇ68溝状土壙）

開口部平面形は幅広の溝状を呈す。底部は非常に狭小な溝状を呈し、比較的平坦であるが、南方がいく分か掘り下げられている。短軸方向断面は、上半がやや傾斜をもって外開きし、下半がほとんど垂直な立ち上がりを呈す柱状になっている。長軸方向は両壁共に垂直に近い立ち上がりをするが、北壁中位がやや入り込んでおる。この部分の壁部が第４層礫土になっており、崩落により生じたものと思われる。検出面よりの深さが当遺跡内では最も深い143㎝である。

埋土は自然堆積であり、出土遺物はない。流れ込みは１・２ａ・４の各層で、壁部崩落によ

る堆積3b層、流れ込みと肩部壁部崩落との混合による2b・3a層等よりなる。底部における初期的堆積土の腐植性の黒褐色土、その上部に肩部壁部等の崩落土、最上部に流れ込み土という一般的に見られる堆積層序を示している。

開口部(cm)	底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
333 × 75	296 × 12	143	N－33°－E	無し	第5図・図版2

V　出土遺物（第7図・図版2）

発掘面積3311㎡よりの出土遺物は縄文土器（片）5点、石器2点である。出土状態は第3図に見られる如く非常にまばらで、溝状土壙埋土上部より土器片1点、遺物包含層第Ⅰ層より土器片3点（中期・後期）第Ⅱ層より土器片1点（前期）と石器2点の出土である。

土　器

第7図1：Ｅｆ65グリッドの表土最下部に破片が散乱した状態で出土したもので、全体の¾程度が復原できた。口径21cm、底径10.7cm、高さ27.7cm、器厚約0.7cmある。口縁部が外反し、4個の大突起を有する深鉢である。口縁部突器は三分され、口唇部は内側に肥厚する。胎土には石英粒等の細かい砂粒が多く混入する。色調は浅黄橙色を呈し、二次的加熱により体部上半には煤が付着、下半は赤変している。器面の風化も著しい。底部には網代の圧痕が見られる。口縁部には地文として単節縄文ＬＲを横方向に廻転させた斜行縄文、体部は縦方向に廻転させた斜行縄文が施される。体部下半は横方向に磨かれている。文様は口縁部のみにあり、竹管様工具による太い沈線で、大突起の下に三角状文を左右対称に描き、中を刺突列一条が走るものを1つの単位として4区画に描かれている。大木7ｂ式に類似するものと思われる。

第7図2：土器の体部破片である。地文は単節ＬＲの斜行縄文で、胎土は石英粒その他の砂粒が多く混じる。第3号溝状土壙の埋土2ａ層中より出土する。

第7図3：幾分締まった頸部と体部上半よりなる土器破片である。頸部には一条の沈線がめぐり、その下には沈線渦巻文がある。頸部の締まり、沈線等前期大木6式に類似する。Ｄｉ68グリッドの第Ⅱ層より出土する。

第7図4：口縁に突起を有する土器破片である。器形は口縁直立の深鉢形土器と推定される。口縁突起頂部に二個一対の刻目が入り三分させる。口縁端沿いに縦位に平行な条線状の沈線がめぐらされ、その下に口縁に平行な三条の沈線が施文される。突起の下方には沈線の入組状文が施文される。沈線に囲まれた部分に擦消縄文手法が施される。体部には単節ＬＲの斜縄文が地文として施される。突起部分は内側に肥厚する。器形・文様の特徴が後期の宮戸Ⅲ式ａ類に類似するものと思われる。Ｅｇ6グリッドの第1層表土中より出土する。

第7図5：土器の底部破片である。網代の圧痕があり、褐灰色をしている。Ｆｉ6グリッドの第

Ⅰ層黒褐色腐植土中より出土する。

石　　器

第7図6：完形品の無茎石鏃である。基部の抉りが浅い凹基で、尖頭部両側縁は直線的で、両面共に丁寧に調整剥離され、二等辺三角形状である。Fgグリッドの第Ⅱ層より出土する。

第7図7：縦長の剥片のa面両側辺を調整剥離して刃縁を作り出した削器である。左側辺刃部はかなり破損した使用痕が認められる。b面上縁には打面が残る。b面は第1次剥離面が調整されずに残り、ポジティブバルブも見られる。Dc 56グリッド第Ⅱ層中より出土する。

石　器　計　測　表

挿　図	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	不　材	完・不完	出土地	備　考
第7図－6	石鏃	29	13.5	3	1	硬質頁岩	完形	Fg 6 第Ⅱ層	無　茎
第7図－7	削器	50	19.0	9	7	硬質頁岩	完形	Dc 56 第Ⅱ層	b面に第1次剥離面

Ⅵ　まとめ

遺跡内での表採遺物は縄文土器片だけで非常に少ない。遺構確認の為のトレンチ掘りをした部分の遺物包含層より出土した遺物は縄文土器（片）5点、石器2点と稀薄な散布状態である。縄文土器（片）は前期から後期にかけてのものと思われ、これ等遺物に結びつく遺構も検出されなかった。未掘部分又は西方の縄文時代遺跡との関連が考えられる。

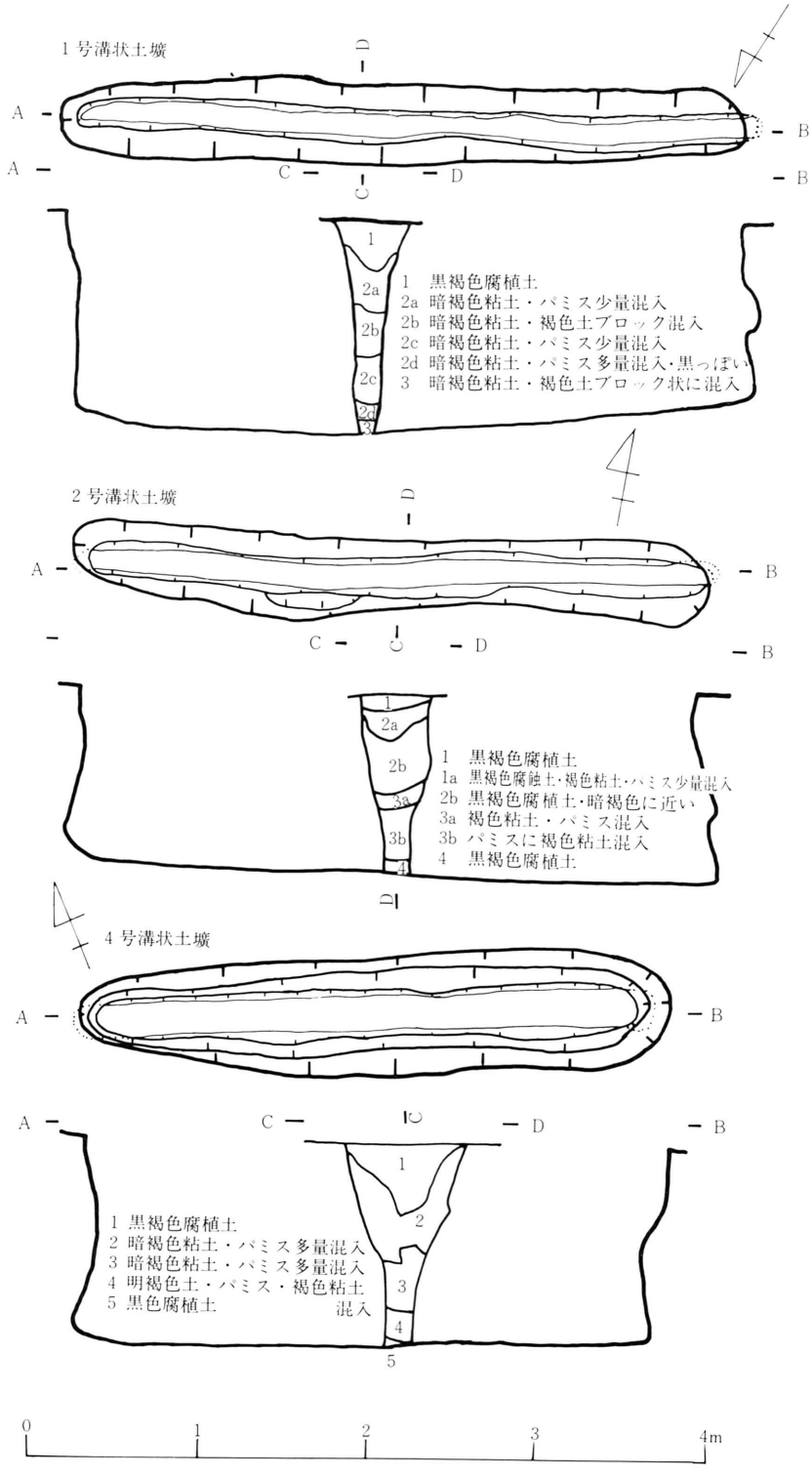
検出遺構は溝状土壙5基だけで、いずれも規模において多少の差はあるが似かよった形態をしている。平面形は開口部にて溝状を呈し、底部は更に狭小の溝状である。断面形は長軸方向で長方形又は袋状、短軸方向では上半外開き、下半垂直気味の立ち上がりで、内部には施設をつくった形跡は認められない。土壙内埋土状態は開口部よりの流れ込みや壁部崩落等の自然堆積による埋没で、件出遺物は皆無に等しい。3号溝状土壙埋土の上部より縄文細片1点が出土した。

この溝状土壙の性格については種々の説があるが、これ等の形状の特徴、埋土状況等より狩猟施設としての落し穴であったろうと推定される。時期については自然堆積による埋没後に上部に縄文土器細片1点があった事より、これ以前か同じ時期（縄文時代）に構築されたものと思われる。これ等と類似した土壙は県内はもとより他県においても数多く確認されており、今村啓爾氏の土壙形態分類ではE型に[1]、宮沢寛氏の分類ではⅠ型に[2]相当するものと思われる。

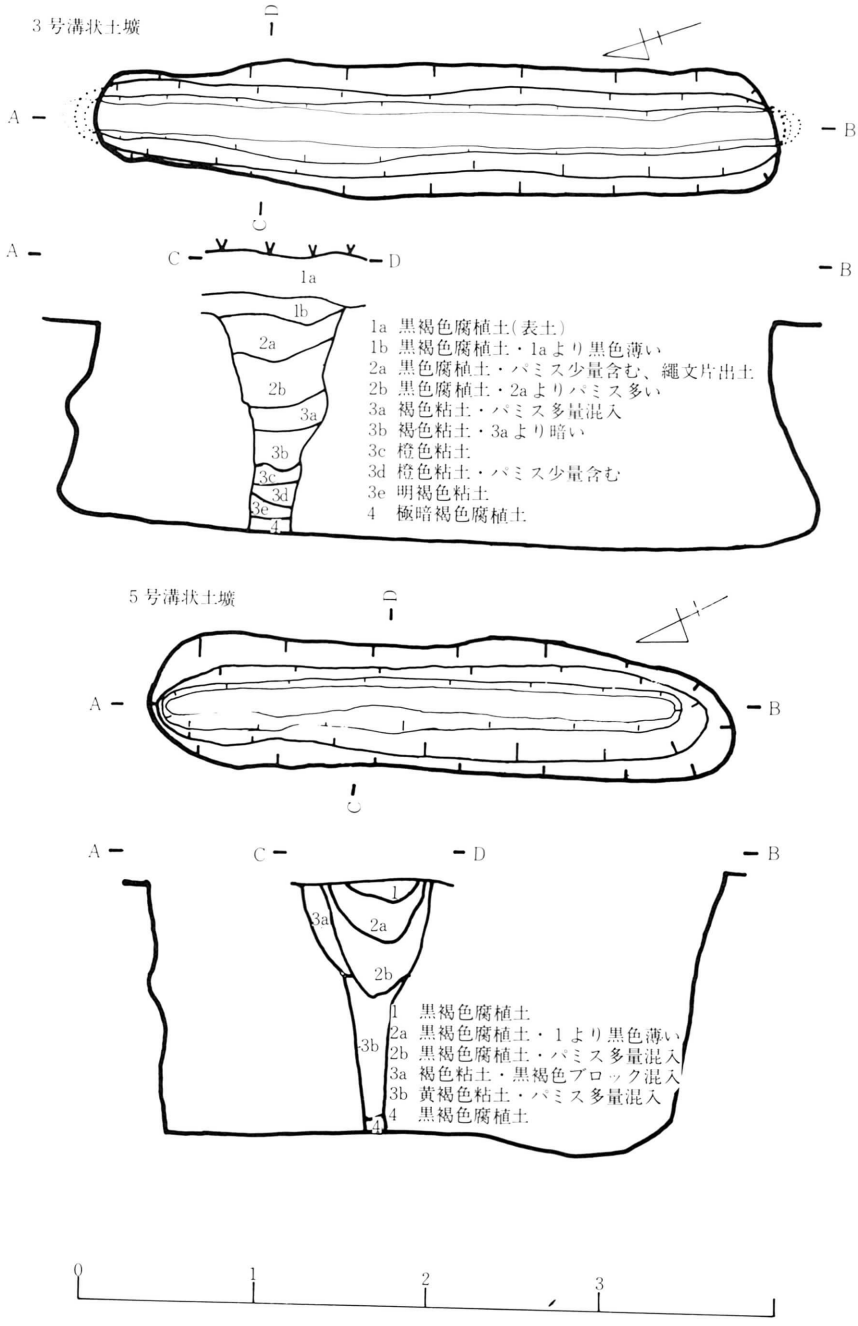
遺跡内全面の遺構検出を行っていないので、構状土壙の分布範囲や配列等は不明であるが、当遺跡は縄文時代の狩猟施設としての落し穴が多数構築された狩場ではなかっただろうか。

注(1)　今村啓爾 1976「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」物質文化No.27

(2)　宮沢寛・今井康博「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題―いわゆる落し穴について―1976調査研究集録第1冊港北ニュータウン


1号溝状土壙
A
B
C
D
1
2a
2b
2c
2d
3
1 黒褐色腐植土
2a 暗褐色粘土・パミス少量混入
2b 暗褐色粘土・褐色土ブロック混入
2c 暗褐色粘土・パミス少量混入
2d 暗褐色粘土・パミス多量混入・黒っぽい
3 暗褐色粘土・褐色土ブロック状に混入
2号溝状土壙
1
2a
2b
3a
3b
4
1 黒褐色腐植土
1a 黒褐色腐蝕土・褐色粘土・パミス少量混入
2b 黒褐色腐植土・暗褐色に近い
3a 褐色粘土・パミス混入
3b パミスに褐色粘土混入
4 黒褐色腐植土
4号溝状土壙
1
2
3
4
5
1 黒褐色腐植土
2 暗褐色粘土・パミス多量混入
3 暗褐色粘土・パミス多量混入
4 明褐色土・パミス・褐色粘土混入
5 黒色腐植土
0
1
2
3
4m

第5図　溝状土壙実測図


3 号溝状土壙
A
B
C
D
1a
1b
2a
2b
3a
3b
3c
3d
3e
4
1a 黒褐色腐植土(表土)
1b 黒褐色腐植土・1aより黒色薄い
2a 黒色腐植土・パミス少量含む、縄文片出土
2b 黒色腐植土・2aよりパミス多い
3a 褐色粘土・パミス多量混入
3b 褐色粘土・3aより暗い
3c 橙色粘土
3d 橙色粘土・パミス少量含む
3e 明褐色粘土
4 極暗褐色腐植土
5 号溝状土壙
A
B
C
D
1
2a
2b
3a
3b
4
1 黒褐色腐植土
2a 黒褐色腐植土・1より黒色薄い
2b 黒褐色腐植土・パミス多量混入
3a 褐色粘土・黒褐色ブロック混入
3b 黄褐色粘土・パミス多量混入
4 黒褐色腐植土
0
1
2
3

第 6 図　溝状土壙実測図

第７図　出土遺物(土器・石器)

大緩（おおだるみ）遺跡

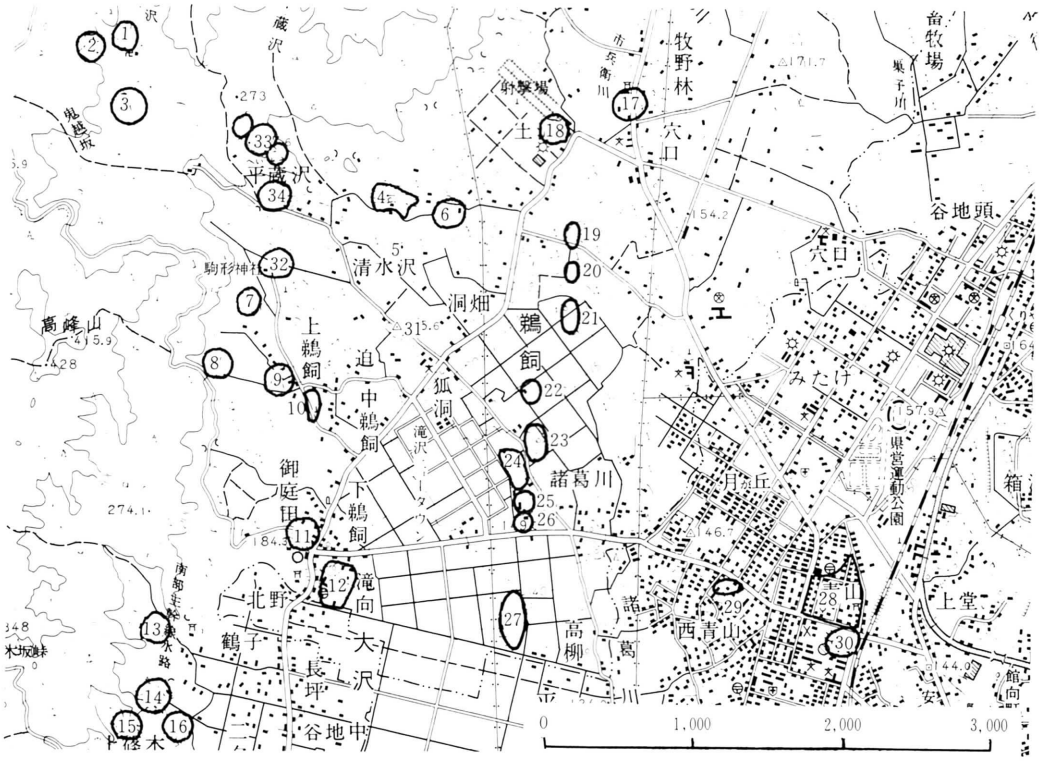
遺　跡　名：大緩（略号ＯＤＺ76，77）
所　在　地：岩手郡滝沢村大字鵜飼第29地割字大緩
調 査 期 間：昭和51年10月4日～12月4日（第1次）
　　昭和52年4月4日～5月23日（第2次）
調査対象面積：約13，400㎡
発掘調査面積：第1次　4，860㎡
　　第2次　3，590㎡　計8，450㎡

Ⅰ　遺跡の位置と立地

大緩（おおだるみ）遺跡は、岩手県滝沢村鵜飼第29地割字大緩にあり、東北本線厨川駅の南西約３㎞のところに位置する。県道鵜飼盛岡線を盛岡市青山から西え進むと滝沢村の境界に至る。それより北西に約１㎞入った場所にある。（第１図）

滝沢村の北西には岩手山（２,041ｍ）がそびえ、それから続く茄子焼山丘陵、沼森山、谷地山高峰山等の標高500ｍ前後の第三系からなる山地、丘陵等が、ほぼ南北に走っている。

これらの山麓部には小規模な扇状地が分布し、その東には厚い火山拠出物でおおわれた高さ150ｍ～300ｍ前後の丘陵性台地がある。



1．仏沢観音堂遺跡	2．仏沢遺跡〔Ⅰ〕	3．仏沢遺跡〔Ⅱ〕	4．狐洞山遺跡	5．高屋敷遺跡
6．清水原遺跡	7．外久保遺跡	8．大畑遺跡	9．三明神社遺跡	10．上山遺跡
11．御仮山館跡	12．越前堰	13．大沢館古堰	14．篠ノ木エゾ館遺跡	15．上篠ノ木遺跡
16．エゾ館遺跡	17．中村遺跡	18．土沢遺跡	19．高屋敷Ⅲ遺跡	20．高屋敷Ⅱ遺跡
21．大久保遺跡	22．白石遺跡	23．大緩遺跡	24．滝沢笹森遺跡	25．別当森遺跡
26．笹森遺跡	27．高柳遺跡	28．観武町遺跡	29．境橋遺跡	30．青山遺跡
31．洞畑A.B.C.遺跡	32．駒形神社遺跡	33．平藤沢A.B遺跡	34．ドロノキ窪遺跡	

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（盛岡５万）

大緩遺跡は、西部山地の平藤沢附近より南東に扇状地状に広がっている丘陵性台地にあり、標高148ｍ前後の南東に緩かに傾斜する緩傾斜地になっている。周辺は既に開田が行なわれ一段低い水田となっているが、その中で宅地、畑地、果樹園等として利用されている微高地として残っているところで、水田との比高は、0.5ｍ～1.5ｍである。

当遺跡の周辺には多くの遺跡が分布し、同じ東北縦貫自動車道関連のものだけでも、南約2㎞のところに高柳、北約2㎞に大久保、そして高屋敷Ⅱ、Ⅲ等の遺跡がある。又、西方の山麓部、丘陵性台地の南、東に面した緩斜面には、孤洞山、清水原、大畑、上篠木、白石等縄文時代から奈良、平安時代にかけての遺跡が数多く分布している。又、低地をはさんだ東方の丘陵性台地には、大舘、境橋、青山、観武町等の縄文時代から奈良、平安時代にかけての遺跡が存在する。

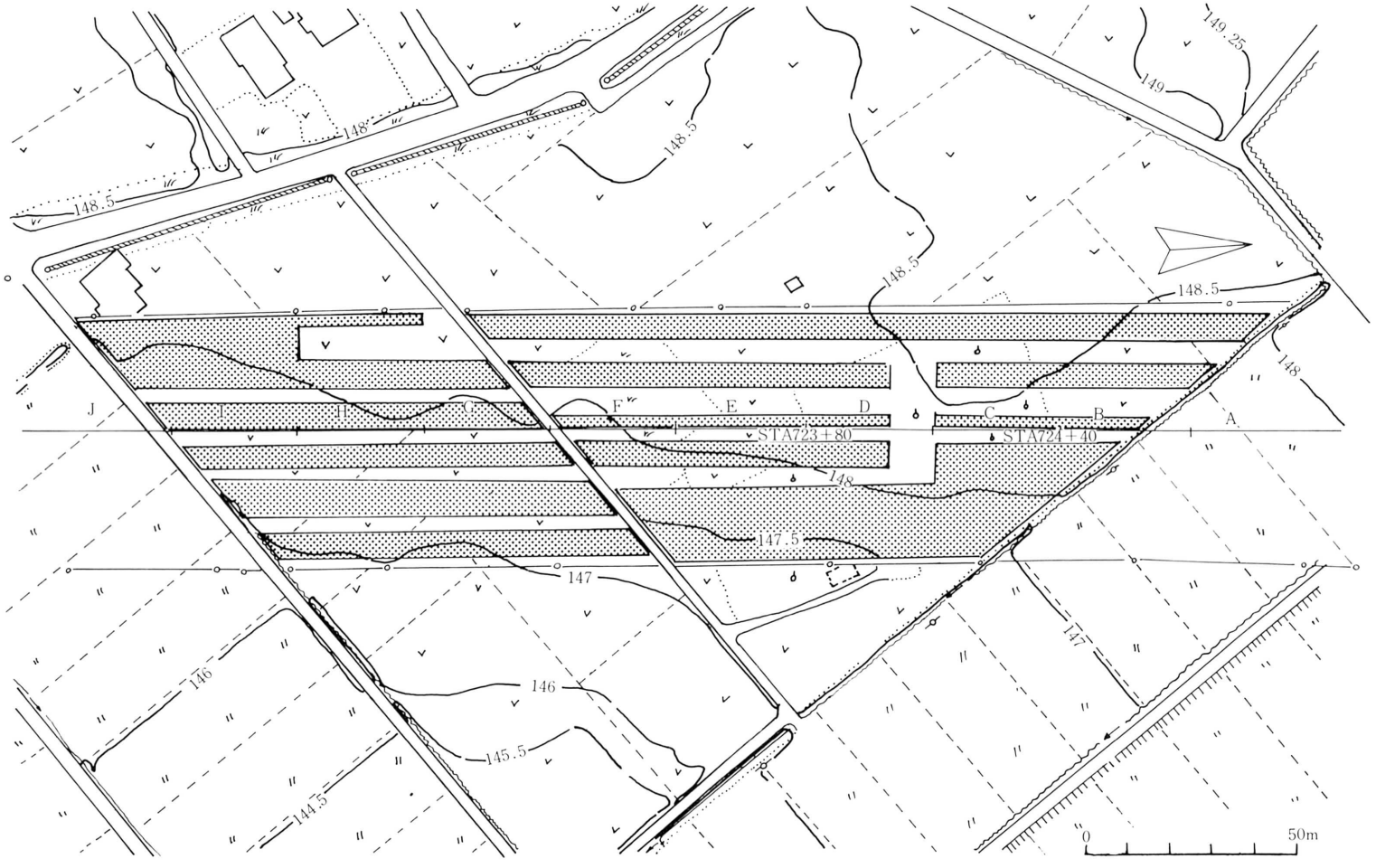
Ⅱ　調査の経過と方法

分布調査当時、遺跡の大半は畑地、果樹園、牧草地等に利用されており、北半の畑地より少量の土器片を採集したのみであった。しかし、地形的にみて南半を含めて水田より一段高い畑地、牧草地等東北縦貫自動車道にかかる路線全体に遺構の存在が予想されたため、路線内約13,000㎡を調査対象として調査をすすめることとした。

調査を実施するにあたり路線中心杭ＳＴＡ723＋80（原点Ａ）と、ＳＴＡ724＋40（原点Ｂ）の二点を基準として中心軸線を設定し、それに直交する線を設けて3ｍ×6ｍのグリッドを組んだ。そして、原点Ａを基準として30ｍを一単位として北にＡ～Ｄ区、南にＥ～Ｊ区を設定した。(第2図)

発掘の方法としては、まず、調査区内の基本的な層位を確認し遺構の分布状況を調べるために南北にトレンチを入れ遺構検出面を確認した。その後、全面発掘を原則として東西幅6ｍ、南北30ｍのトレンチを入れ、遺構、遺物の発見により、その地区を拡張する方法で行った。これは面積の割には作業員の確保が難かしいことなどから粗堀の段階では表土の除去にあたって重機を使用することになったためである。重機の使用にあたってはできるだけ表土中層までの除去に心がけ、その後の検出は作業員の手で行い、できるだけ遺構の検出を上層で行うように努めた。

第1次調査は、Ａ区からＦ区、及びＧ、Ｈ、Ｉ区の東端の一部の遺構検出及び精査を行い、溝状土壙11基が確認された。これらの検出面は3層の暗褐色土の上面である。又、Ｃ区東端の地点では、1層の黒褐色土の下層、及び、2層の黒褐色土の上面より比較的多くの縄文土器片が出土したが、その他の地区からは数片出土したのみであった。調査は溝状土壙9基の精査を行い他の精査は次年度に持ちこした。



第２図　大緩遺跡地形、グリット配置図

第２次調査においては、Ｇ～Ｊ区の遺構検出及び精査、Ｃ区東端地区の拡張、精査を実施した。その結果、新たに２基の溝状土壙を検出し、Ｃ区東端からは、焼土及び縄文土器片、磨石等が発見されたが、これらの遺物に関連する明確な遺構は検出されなかった。

Ⅲ　遺跡の層序

遺跡立地面は、全体として南東に向って緩かに傾斜しているが、ほとんど平担である。発掘地点の層序は、第１層、第２層の黒色土、黒褐色土が南東にいくにしたがって厚くなっている他は、ほぼ傾斜と平行な層をなしていることが認められ、層序はほぼ均一であるといえる。これらの層序の概要を示すと次の通りである。(第３図)

第Ⅰ層の黒色土（Hue7.5YR2／1）は、腐植質の耕作土であり、草木根が多く耕作による撹乱が著るしい。下位より遺物が出土している。

第Ⅱ層、黒褐色土（Hue7.5YR2／2）は、第１層の漸移層的なもので、１層に比べて撹乱が少なく、黄褐色シルトがわずかに混じっており炭化物を微量に含む。遺物を一番多く含む層である。

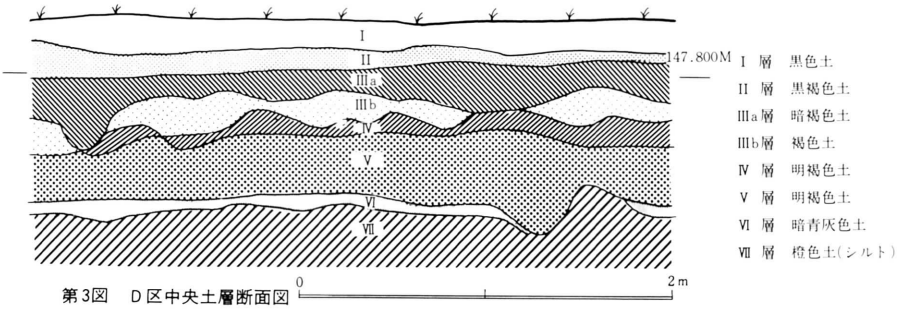
第Ⅲａ層、暗褐色土（Hue7.5YR3／3）は、シルト質の土で粘性があり、小礫をわずかに含む。Ⅱ層に比べて黄褐色シルトの含有が多くなる。遺構検出面である。

第Ⅲｂ層、褐色土（Hue 7.5 YR 4/4）は、Ⅲａ層と同じシルト質の土で、粘性及び小礫のまじり具合は、ほとんど同じである。ただ、黄褐色シルトの含有の割合が更に多くなりⅡａ層の漸移した層とみられるものである。

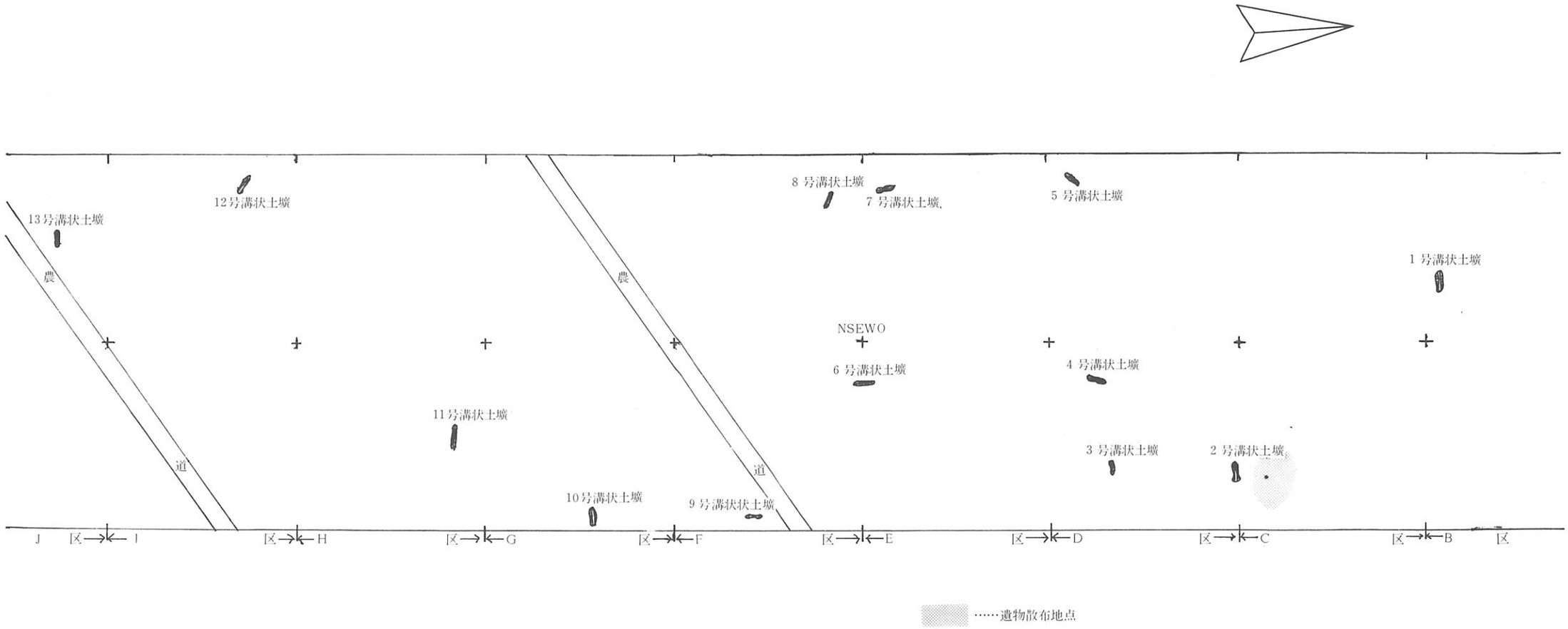
第Ⅳ層、明褐色土（Hue7.5YR5／6）は、シルト質の土で固くしまっている。粘性は、ややある程度であり、わずかながら軽石を含んでいる。

第Ⅴ層、明褐色土（Hue7.5YR5／8）は、いわゆるパミスといわれるもので、軽石、石英、長石等を含み固くしまっている。

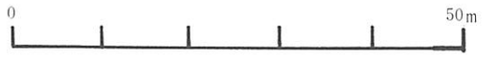
第Ⅵ層、暗青灰色土（Hue10BG4／1）は、石英、長石等を含む砂のようにざらざらしているもので層としては非常に薄く固くしまっている。



第3図　Ｄ区中央土層断面図


13号溝状土壙
12号溝状土壙
11号溝状土壙
10号溝状土壙
9号溝状状土壙
8号溝状土壙
7号溝状土壙
6号溝状土壙
5号溝状土壙
4号溝状土壙
3号溝状土壙
2号溝状土壙
1号溝状土壙
農
道
NSEWO
J 区 I
区 H
区 G
区 F
区 E
区 D
区 C
区 B
区
……遺物散布地点

第4図　遺構配置図


0
50m

第Ⅶ層、橙色シルト（Hue7.5YR6/8）は、固くしまっており粘性はある。微量の炭化物及び小礫を含むもので、溝状土壙はこの層まで堀り込まれている。

Ⅳ　発見された遺構と遺物

調査の結果発見された遺構は溝状土壙13基であり、その他に焼土が6個所発見された。溝状土壙は、C区より南の地域、特に、E、F区周辺に割合まとまって検出され、焼土は、H、I区に多い。なお、溝状土壙については北より遺構番号を付した。(第4図) これらの検出面は、第3層上面であり、焼土は、それよりやや上面の第2層からの検出がほとんどである。

又、遺物はC区東端地区からの出土がほとんどで、その他、H、I区の南西地区よりわずかに出土している。これらはほとんど第1層の下位及び2層中である。

1　遺　構

a　溝状土壙

土　壙	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
1	367 × 28	335 × 11	79	N－86°40′－E	第5図，図版 2/5

層　位

1　黒褐色土層　　2　明黄褐色土層　　3　暗赤褐色土層　　4　黒褐色土層

概　要

壙口部及び底部の平面形は、ともに溝状を呈しており、底部は、ほぼ平担である。長軸断面は、底部よりやや斜め上方に開き気味に立ち上る形をしめしている。短軸断面は、下位はほぼ垂直に近い立ち上りを示し、上方にいくに従ってわずかに開いている形を呈している。中位には、壁の崩落によって出来たとみられる抉りこみがみられる。

埋土は、上部から黒褐色の腐植土層、径が3㎜内外の小礫及びパミスを含む明褐色土層、パミスがわずかに混じった黒褐色土層、そして、パミスと小礫が含まれ、ザラザラしている暗赤褐色土層の4層からなり、これらは、一部、壁の崩落と自然流入による黒褐色土の推積によるものである。遺物は、出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
2	323 × 48	332 × 11	90	N－74°－E	第5図，図版 2/5

層　位

1　黒褐色土層　　3　黒褐色土層　　5　黒色土層

2　明黄褐色土層　　4　暗赤褐色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形はともに溝状を呈しているが、壙口部の東半分は崩落により幅広となっている。底部は、中央部がややへこみ浅い皿状になっている。

長軸断面は、底部の両端にわずかに袋状の抉りこみがみられ、それから上はほぼ垂直に近い立ち上りを示している。短軸断面は、上方に向ってわずかに開き、V字状を呈している。

埋土は、上部より黒褐色土、明黄褐色土、黒褐色土、暗赤褐色土の各層が推積し下部には腐植質の黒色土がわずかに推積している。明黄褐色土層の中にパミスの大きなブロックが含まれているのが特徴的である。これらは、いずれも自然推積であり、遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長 軸 方 向	挿 図 ・ 図 版
3	245 × 50	223 × 12	59	N −80°50′− E	第5図，図版 $\frac{2}{5}$

層　位

1　黒褐色土層　　2　黒褐色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形は溝状を呈している。底部は平担である。長軸断面は、両端ともに底部よりほぼ垂直に近い立ち上りを示している。また、短軸断面は底部にくらべて上方に大きく開き、V字状を呈している。本遺跡の遺構の中で一番浅い土壙である。

埋土は、下部はパミスをわずかに含む黒褐色土であり、上部は腐植土質の黒褐色土層である。いずれも流れこみにより推積されたものとみられるものであり、遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長 軸 方 向	挿 図 ・ 図 版
4	375 × 45	323 × 13	91	N −14°15′− E	第6図，図版2

層　位

1　黒褐色土層　　2　明黄褐色土層　　3　黒褐色土層

概　要

開壙部の南壁の隅は四角ばったプランを呈しているが底部とともに形状は溝状を呈している。底部は平担である。長軸断面は、下位はほぼ垂直な立ち上りを示しているが、開壙部近くは外側にやや開き気味に広くなっている。短軸断面は、下位から中位にかけてほぼ垂直に立ち上り、上位近くでやや袋状に抉れて開壙部に向って開く形を示している。

埋土は、上部からパミスをわずかに含んだ黒褐色土、両壁の崩落とみられるパミスの多く含んだ明黄褐色土、そして底部にわずかに黒褐色土の推積がみられる。他の土壙に比べて下部の黒褐色土の推積が少ないことが目立つ。遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
5	318 × 56	290 × 11	113	N－37°20′－E	第6図，図版3

層　位

1　黒褐色土層　　3　黒褐色土層　　5　橙色土層（ブロック状）

2　黄褐色土層　　4　暗褐色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形はともに溝状を呈している。底部は平担である。長軸断面は、中位にわずかに段がついているが開壙部までほぼ垂直に立ち上っている。短軸断面は、中位まで垂直に立ち上り、上位でやや広く開き細いV字状を呈している。

埋土は、上部の黒褐色土及び黄褐色土にパミスが大きなブロックになって入りこんでおり、下部は、他の土壙とほぼ同じ推積を示しており、やはり遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
6	330 × 50	322 × 14	77	N－1°15′－W	第6図，図版3

層　位

1　黒褐色土層　　2　黄褐色土層　　3　暗褐色土層　　4　橙色土層（ブロック状）

概　要

開壙部及び底部は、南北両壁の四隅がともにやや四角ばったプランをもち平面形は溝状を呈している。底部は平担である。長軸断面は、中位にわずかに抉りこみが認められるが、両壁ともに底部より開壙部に向ってほぼ垂直に立ち上っている。

短軸断面は、下位より中位にかけてほぼ垂直に立ち上り、開壙部に向って広く開きY字状の形状を呈している。

埋土は上部の黒褐色土層が4号土壙と同じようにやや厚い推積を示している他は、ほぼ他の土壙と同じような推積状態であり、遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
7	361 × 23	336 × 10	78	N－11°－W	第7図，図版3

層　位

1　黒褐色土層　　2　明黄褐色土層　　3　暗赤褐色土層　　4　黒色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形はともに溝状を呈しているが、開壙部の南側は崩落により幅広く不

整形になっている。底部は比較的平担である。長軸断面は、北壁側は、中位近くでわずかに段を形成しているがほぼ垂直な立ち上りを示しているのに対して、南壁側は、底部にわずかに抉りこみがみられ、内側に傾斜したかたちで立ち上っている。短軸断面は、底部より中位まではほぼ垂直に立ち上り、それより上部にかけては抉りこみがみられ開壙部に向って広く開いている。他の土壙に比べて壁面の崩落が著るしい。

埋土は、下部に腐植土質の黒色土層の推積がみられる他は、他の土壙と同じような推積のしかたである。遺物は、出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	押図・図版
8	349 × 56	301 × 10	108	N−115°30′−E	第7図，図版3

層　位

1　黒褐色土層　　3　黒褐色土層　　5　極暗赤褐色土層

2　明黄褐色土層　　4　暗赤褐色土層　　6　黒褐色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形はともに溝状を呈している。底部は平担である。長軸断面は、中位にわずかな抉りこみがみられるが、底部よりほぼ垂直に立ち上り、開壙部近くで外反する形状を呈している。短軸断面は、底部から中位まではほぼ垂直に立ち上り、それより開壙部に向って緩かに開き、ロート状の形状を呈している。

埋土は、上部から七層に分けられほぼ他の土拡と同じような推積状況であるが、暗赤褐色土層をはさんで上下に黒褐色土層、極暗赤褐色土層がレンズ状に推積しているのが特徴的である。遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
9	229 × 36	267 × 7	84	N − 25′− E	第7図，図版4

層　位

1　黒褐色土層　　2　明黄褐色土層　　3　暗赤褐色土層　　4　黒褐色土層

概　要

開壙部は、南北両端が丸くふくらみ中央部が少し細く溝状になり底部においても両端がシャモジ状にふくらみ中央部が細い溝状を呈し、バーベルのような形状になっている。底部はほぼ平担である。長軸断面は、両壁ともに底部より中位まで大きく袋状にオーバーハングし、それより上位は開壙部に向ってほぼ垂直に立ち上っている。短軸断面は、中央部でみるかぎり底部よりほぼ垂直に立ち上り開壙部でわずかに開き、柱状に近い形状を呈している。底部の幅は7cm

と本遺跡の遺構の中で最も狭く、又、形状の上でもこれのみ特殊な形をしているといえる。

埋土は、上部の黒褐色土層から底部の黒褐色土層まで4層にわたって他の土壙と同じような推積状態であり、遺物は、出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
10	319 × 26	303 × 10	73	N − 80°− E	第8図，図版3

層　位

1　黒褐色土層　　2　明黄褐色土層　　3　暗赤褐色土層　　4　黒色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形は、いずれも溝状を呈している。底部は、ややおうとつがある。長軸断面は、両端ともに開壙部に向ってほぼ垂直に立ち上っている。短軸断面は、底部よりほぼ垂直な立ち上りで開壙部で、わずかに開くだけでほぼ柱状に近い形状を呈している。

埋土は、上部の黒褐色土層から底部の黒色土層まで4層にわたって7号土壙と同じような推積状態である。遺物は、出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
11	403 × 35	381 × 13	82	N −94°30′− E	第8図，図版4

層　位

1　黒褐色土層　　2　明黄褐色土層　　3　黒褐色土層　　4　黒色土層

概　要

開壙部及び底部の平面形は、ともに溝状を呈している。底部は、中央部分がやや高く、両端に向って低くなっている。長軸断面は、両端ともに開壙部に向ってほぼ垂直な立ち上りを示しており、短軸断面は、開壙部で極わずかに開くがほぼ垂直な立ち上りを示し柱状に近い形状を呈している。この土壙は、本遺跡中の遺構の中で長軸が一番長い土壙である。

埋土は、上部の黒褐色土層から底部の黒色土層まで4層にわたって推積し、特に2層の明黄褐色土層の推積が厚いのが目立つ。いずれも流れこみ、崩落等による自然推積であり、遺物は、出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
12	324 × 25	260 × 15	139	N − 123°5′− E	第8図，図版4

層　位

1　黒褐色土層　　3　黒褐色土層　　5　暗赤褐色土層　7　暗褐色土層

2　黒褐色土層　　4　黄褐色土層　　6　明褐色土層　　8　黒色土層

概　要

開壙部は、やや隅丸方形的なプランを有しているが、底部とともに平面形は溝状である。底部はほぼ平担である。長軸断面は、底部近くは、やや垂直な立ち上りを示しているが、中位から上部にかけては崩落のためやや外側に開き途中に段がついているところもある。短軸断面は、底部よりほぼ垂直に立ち上り開壙部近くで、わずかに開いているが、ほぼ柱状を示している。この土壙は、本遺跡中で一番深いものである。

埋土は、上部に腐植土及びパミスをわずかに含む黒褐色土、中間に、黄褐色土をはさんで下位には、側壁の崩落による大きなブロック状の明褐色土、最下部に薄い黒色土の推積がみられる。いずれも自然推積で遺物は出土していない。

土壙番号	開　壙　部(cm)	底　部(cm)	深　さ(cm)	長軸方向	挿図・図版
13	354 × 53	309 × 11	141	N−69°15′−E	第9図，図版5

層　位

1　黒褐色土層　　2　褐色土層　　3　黒色土層

概　要

開壙部及び底面の平面形はいずれも溝状を呈している。底部はほぼ平担である。長軸断面は両端とも底部よりやや外反気味に開壙部に向って立ち上っている。短軸断面は、底部は、やや丸味をおび、わずかに外に開きながら開壙部に達しV字の形状に近い形を示している。中位に崩落による抉りこみがみられる。

埋土は、上部に腐植土質の黒褐色土、中位に、側壁の崩落によるパミスを多く含んだ褐色土、そして下部には、植物の茎状の炭化物を含んだ黒色土が認められた。遺物は、出土していない。

以上が溝状土拡の概要である。

b　焼　土

1号焼土はCi71グリットの第2層下面で確認されたものである。平面形は直径約40cmのほぼ円形で、深さは約18cmである。埋土は、焼土及び炭化物を多く含んだ黒色土であり、特に掘り込んだ様子はみられない。この周辺から比較的多くの縄文土器片、磨石等が出土したが、精査の結果、小ピットが3個検出された他は、これに関連すると考えられる遺構は検出されなかった。

2号焼土は、Gho 9グリッドの第2層下面で確認されたものである。平面形は、隅丸方形に近い不整形である。東側約$\frac{1}{3}$は後の掘り込みにより上面が5cmほど削られている。幅は約60cm×60cm、深さは、深いところで約43cmある。埋土はほとんど焼土であるが底面近くには暗褐色

土が推積しており、壁面及び底面には熱を受けた様子はみられない。また、周辺より遺物は出土していない。

その他の焼土は、いずれも2層中位から下位にかけて検出されたが、平面形は、いずれも不定形で厚さが2～5㎝と浅いものであった。

これらの焼土を観察すると、いずれも特別な掘り込みがみられず、又特に周囲が強く熱をうけて固くなっているということもなく、焚火のように短時間に熱をうけて形成されたものとみられる。特に、1号焼土の場合土器出土のレベルとほぼ同じ面における検出から住居址等も想定されたが、前述の如く小ピットのみで、明確なものは発見されず、従って、焼土の形成時期と出土遺物についての関係については不明である。その他の焼土についてもその性格等については不明である。

2　出土遺物

本遺跡から出土した遺物は90点余りの数量であり、既述したようにこれらはいずれもⅠ層の下位及び2層中より出土したものである。特に遺構中より出土したものはない。地域的にみると調査区の北東端Ｃｉ71グリット周辺が最も出土量が多く、あとは南西端Ｈｇ～Ｉｂ区に集中し、他の地域からは、ほとんど出土せず少ないなかにも片寄りがみられた。

ａ　土　器

出土した土器片の総数は88点で、そのほとんどは破片であった。内訳は口縁部破片22点体部破片65点、底部破片4点である。そのうち、口縁部は8個体からなる破片と推定され、体部19個体、底部2個体に区別された。口縁部より底部まで復元できたもの、胴部より底部まで復元できたものが各一個体あった。

本遺跡から出土している土器は成形及び文様等からみて3群に分けることができる。以下、その概略を述べることにする。

第1群土器（第10図1～6図版6・7）

本土器群は、Ｇ、Ｉ区の南西端のグリッド第1層の下位より出土したものがほとんどであり縄文時代中期の土器を主体とするもので、いずれも大木7ｂに相当すると思われるもので、大きく分けて2つに分けられる。

第1類土器（第10図1～2図版6－6～7）

いずれも厚手の深鉢の大突起部分とみられるもので、口縁部上面に内外より渦巻状、Ｃ字状に粘土紐を貼付し鶏頭状の隆起文をつくり出しているもの、及び、口縁よりやや外傾した立ち上りを見せる大突起で、内外よりＣ字状に粘土紐を貼付した隆起文をもつものである。いずれもこれらの下には、沈線による文様が施されていることがわずかながらわかる。

第2類土器（第10図4～6図版7－1～4）

深鉢形土器の破片とみられるもので、上からみると勾玉状にひねり出した突起のもの及び、小山形状の突起をもつもので、沈線及び粘土紐を貼付した隆帯によって縄文帯を区別しているものである。これらの土器と同じ群と見られるものに、地文の単節斜縄文に隆帯をはりつけ両側に刺突により列点文を施したものがあり一応この中に入れておく。

第２群土器（第９図３，第10図７～13，図版６－１，５，図版７－６～９）

本土器群は、Ｃ区の東南端Ｃｉ71グリッド周辺第１層、第２層中より出土したものが大部分を占めており、縄文時代後期の土器を主体とするもので、大きくは宮戸Ⅲａ相当と思われるものである。

第１類土器（第９図３、第10図７、図版６－１、５）

口縁がやや内傾し口唇部が平坦な胴張りの壺形土器及びその口縁部とみられるもので、これらは、いずれもコブ状の小突起が器面に施されているものである。文様についてみると、第９図３は、口縁部に幅1.2㎝の平行帯縄文をほどこし頸部にかけて幅広くすり消している。頸部には竹管状工具で横に引いたとみられる鎖状の隆起文を施し、胴部上半部は、沈線で区画した平行帯縄文を区画文とし、その間に４この変形入縄文を擦消手法で配し、入組文間には楕円形の沈線文、四方にクサビ状の刺突を施している。それぞれの沈線の接するところに一対の薄いボタン状の貼コブを行い、その上から縄文を施している。下半から底部にかけては研磨された無文である。

第10図７は、擦消手法によって弧状沈線を口縁部に配し、頸部には、口縁にそって二条の沈線を施した後、刻目の入ったブリッチ状の突起を貼付しているもので、小さなコブ状突起が対になって口縁部や沈線間に貼付されている。肩部から下半にかけては破片のため不明である。

第３類土器（第９図５，第10図８～13，図版７－５～９）

口縁がやや内湾気味、及び直行気味でそのまゝ底部に向うものと２種類あり、いずれも深鉢形土器である。これらは、いずれも口唇部に山形の小突起を有しているもので、この突起は、先端を押捺して扁平にしているもの、細い棒状の工具で上より刺突をしているものとがある。文様についてみると、縄文の地文の上に数条の横位の沈線、三叉文を施したもの、刻目の入組帯状文をはさんで上下に一条の刻目文を施したもの、同じく、すり消し縄文による入組帯状文を施しているもの、縄文のみのもの等がある。

その他に、口縁部が平担な深鉢形土器で、口縁部が直立し口唇部より横位主体のミガキが施され無文のものがある。

第３群土器（第10図14～17図版７－10～14）

鉢形土器の破片で晩期前葉（Ｂ－Ｃ～C_1式）に相当するものと思われるものである。口縁部に沈線による文様が施されているが小片のため詳細は不明である。地文は、ＬＲ単節斜縄文のも

の、及び羽状縄文のもの等があり比較的薄いものである。

b　石　器（第9図1、2図版6－2、3）

本調査によって発見された石器は非常に少なく、石鏃、磨石が各1点出土したのみである。

石鏃は、Iab09グリッド2層中より出土したもので、最大長、3.3㎝、最大幅1.6㎝、最大厚0.5㎝、重量は1.68ｇである。なお、材質は、硬質頁岩である。長さに対して身の幅がせまく中央部がややふくらみをもっていて、二等辺三角形状を呈している。基部の抉りは、比較的浅く、両面ともに入念な調整剥離を施している。

磨石は、Ci71グリッド2層の下位より出土したもので、最大長10.1㎝、最大幅7.8㎝最大厚5.8㎝、重量は、620ｇである。材質は花コウ岩である。形状は、楕円形で厚みのある礫で、自然石をそのまま使用したもので表面が滑かに磨かれており、両面に使用痕が認められる。

Ⅴ　考察とまとめ

本遺跡で検出された溝状土壙は、関東以北、特に、東北、北海道地方において数多くの発見例があり、本県においても東北自動車道及び新幹線関連遺跡、その他、数多くの遺跡で単独、或は数十基というように群在する形で発見されている。(第1表)

これらについては、今までその形状より「V字状溝状遺構」「溝状遺構」等とよばれ、本書においても形状及び遺構そのものが「土壙である」ということから「溝状土壙」と呼称し、その性格を表わした名称には至っていない。しかし、これらに対する検討が以前から各地で試みられている。その中でも主なものは、今村啓爾氏の論考や「霧が丘」「港北ニュータウン」等の調査会の調査を基とした考察等がある。又、北海道函館空港関連遺跡、札幌市文化財調査等の報告書では「T（トラップ）ピット」、岩手県「湯沢遺跡」では「陥し穴状遺構」というように、その性格を規定した名称を使用し、又、実際としても「陥し穴」とする意見が大勢を占めてきていると思われる。

そうした中で、道路敷内という限られた範囲で検出した13基の溝状土壙について検討を加えてみることにする。

まず、形態的にみた場合、平面形がバーベル状に近い形を呈するもの1基を除いては、全て溝状或は、それに近い形状のもので楕円形に近いものは存在しない。横断面についてみると、底幅が開壙部に比べて狭く、「V字型」のもの、開壙部が開き、中位から下位にかけてほぼ真直に底部におりる「Y字型」のもの、開壙部と底部との開きが少なく「柱状に近い型」ものがある。底部はいずれもほぼ平担で杭跡状の小ピット等の施設痕とみられるものはない。

これらの立地及び配列についてみると、南東に緩かに傾斜する台地上にあり、等高線の関係

でみるとほぼ直交しているもの6基、平行しているものが7基ある。北側は約30m～40mにわたって遺構が発見されず、南側は定かでないが、全体としては平担に近い緩い傾斜地ではあるけれども、低い方に集中している分布形態を示しているとみることができるのではないか。

次に、埋土の状態についてみると、いずれも人為的に埋め戻した推積の状態を示しておらず上部からの流れ込み、側壁の崩落等による自然推積である。これらのうち、2、7、10、11、12、13号土壙は底部に黒色土が推積しており、特に、13号土壙は植物の茎状のものが含まれた粘性の強い黒色土が推積していた。又、1、4、5、6、8、9号土壙には、この黒色土の推積がみられず、3号土壙は黒褐色土層のみである。従って、これらの推積の違いからみると、これらの土壙について多少の時期差（時間差）というものが考えられる。特に、7号と8号、9号と10号土壙は、それぞれ一番近接している土壙であるが、推積に違いがあり、少くとも同時期には完全な形で存在していなかったものと考えることも可能であり、土壙間にある程度の距離間があったのではないかと考える。

土壙の構築時期については、土壙内からの遺物が皆無ということから正確な時期については不明であるが、周辺より出土した遺物から可能性についてみてみると、当遺跡においては、既述のように第1層下位及び2層中より、中期後半、後期末、晩期前葉の遺物が出土していること、埋土の状態、これらの遺物が土壙内に全然入りこんでおらないということ等から、土壙はこれらの土器の使用された時期と同時期の古い時期か、或は、これらの土器の使用された時期よりあまり遠くない古い時期に構築されたものと考えたい。

最後に、確たる証拠がなく即断は許されないが、今までの諸先学の論証をもとにしてこれらの土壙の性格を考えてみることにする。

まず、これらの土拡の埋土状態からみて、土壙が空洞のままで使用されたことを示していること、そして、その形状は幅がせまい割には深いものが多いこと等からみて「陥し穴」として使用したと考えると、上部施設は、小枝や雑草などで簡単にカモフラージュが出来るし、或は全くなくとも機能的には差しつかえなく、特に、四肢の長い動物は、このような狭い穴に陥ちた場合、体の自由を奪われやすい形状を示しており、機能を充分に備えたものといえる。又、土壙の上部の崩落による形状の変化や土拡内に自然推積物以外何もないということなどは、これらの土拡が何度か使用され、そのたびに土拡内をある程度きれいにして使用していたと考えると解決できそうである。

次に、当遺跡をはじめとして南の高柳遺跡から北の高屋敷Ⅱ、Ⅲの遺跡に至る約2.5kmにわたって溝状土壙のみが発見されているということや、これらが低地や小沢等に面した台地に散在していること等は、動物の習性と無関係ではなく、住居と相当離れた位置に設けられたものとみられ陥し穴の立地としても条件を備えているといえる。

以上、「陥し穴」として都合の良い条件のみを列記したが、穴を掘る道具の不備な時代に、長期間にわたって数多くのこれらの土壙を構築したことは、単純だけれども、必要だからこそつくったものでありそれは「食生活につながるものである」と考えたい。
従って、やはりこれらの土拡は、「陥し穴」としての機能をもったものであると考えるのが妥当ではないか。しかし、都合の良い条件のみを独断でとりあげたものであり、まだまだこれから多方面にわたる検討を必要とすることは言うまでもない。

おわりに路線敷内における調査区は、丘陵性台地の平担に近い緩斜面に存在する。この地区からは、住居址貯蔵用のピット等日常生活に結びつく遺構が検出されず溝状土壙のみが検出されたことと、遺物の出土量が少なかったことは、この地区が定住生活的な「場」というよりは、キャンプサイト的性格をもった地域であり溝状土壙を主とした狩猟の「場」としての生活領域と考えることができる。

西部の一段高い山麓部緩斜地には縄文時代前期～晩期にかけての遺物が多量に散布している地域がかなりあり、それらが、定住生活の「場」としての集落を構成している地域であるということも想定される。

今後は遺物や遺構が少ないからといって遺跡を軽視することなく、縄文時代における生活領域の問題としてこれらの類例を多方面から検討を加えながら解明していかなければならないものと思う。

第１表　溝状土壙検出遺跡＜東北自動車道関係＞

昭和47～53年度

	遺跡名	所在地	立地	主な遺溝と時期	溝状土壙数
1	袖谷地	水沢市	福原段丘上の自然提防微高地（4,000 ㎡）	・竪穴住居 (6)……（平安） ・円形土壙、溝状土壙	4
2	南矢中	水沢市	福原段丘の北線（4,800 ㎡）	・竪穴住居址(7)……（平安） ・方形周溝 ・円形土壙、溝状土拡	29
3	西大畑	水沢市	水沢段丘の南斜面及び平担面（2,970 ㎡）	・竪穴住居址(6)……（奈平） ・掘立柱建物(4) ・溝，溝状土壙	4
4	梅ノ木Ⅰ・Ⅱ	和賀町	河岸段丘平担面（14,720 ㎡）	・掘立柱建物(3)……中世 ・窯業跡(3)…うち一つは平安 ・土壙、溝状土壙	5
5	猫谷地	江釣子村	河岸段丘平担面（12,960 ㎡）	・竪穴住居址(28)縄奈平 ・小竪穴遺構（200） ・方形周溝、溝状土壙	3
6	藤沢	北上市	村崎野段丘西緩斜面と平担地（1,000 ㎡）	・竪穴住居址(3)……平安 ・土壙……縄文早期 ・焼土ピット、溝状土壙	10
7	大瀬川C	石鳥谷町	西部後背山地が続く東麓の丘陵上（21,340 ㎡）	・館跡（堀立建物60、空堀５井戸２、焼土ピット ・溝状土壙	6
8	墳館	紫波町	西部後背山地が続く東麓の丘陵上（11,520 ㎡）	・墳墓(9)、土塁、ピット（館） ・竪穴住居址(2)……平安 ・溝状土壙	4
9	上平沢新田	紫波町	段丘南周縁部平担面（9,800 ㎡）	・竪穴住居址、堀立柱建物……平安、方形周溝土壙、溝状土壙	13
10	宮手	紫波町	段丘北周縁部平担部（3,410 ㎡）	・竪穴住居址(13)……縄文 ・方形周溝、土壙 ・溝状土壙	29
11	大渡野	矢巾町	河岸段丘平担面（1,400 ㎡）	・竪穴住居址(2)……縄文 ・遺物包含層……縄文、弥生 ・溝状土壙	1
12	一本松	矢巾町	段丘北周縁部平担部（2,000 ㎡）	・竪穴住居址(8)……平安 ・土壙 ・溝状土壙	2

	遺跡名	所在地	立地	主な遺構と時期	溝状土壙数
13	稲荷	都南村	段丘南周縁緩斜地 (5,400 ㎡)	・竪穴住居址(8)……平安 ・土壙 ・溝状土壙	10
14	湯沢A	都南村	段丘南周縁平担部 (5,300 ㎡)	・竪穴住居址(6)……平安 ・溝状土壙	1
15	湯沢B	都南村	段丘東周縁平担地 (2,000 ㎡)	・周溝状遺構(11)……平安 ・大形ピット ・溝状土壙	4
16	高柳	滝沢村	丘陵性台地南緩斜面と平担地 (8,600 ㎡)	・溝状土壙 ・ビーカー型土拡(5)	32
17	大緩	滝沢村	丘陵性台地 (6,200 ㎡)	・溝状土壙 ・焼土ピット	13
18	大久保	滝沢村	丘陵性台地 (3,311 ㎡)	・溝状土壙	5
19	高屋敷Ⅱ	滝沢村	丘陵性台地の南緩斜面	・溝状土壙	1
20	卯遠坂	滝沢村	東面丘陵緩斜地	・住居址17 ・石組炉跡2 焼土8 ・フラスコ状土壙(10)土壙(4)	1
21	栗田Ⅲ	紫波町	二枚橋段丘の東緩斜面	・住居址1……縄文 ・フラスコ状土壙11 ・堀立柱建物……江戸中期	56
	計				227

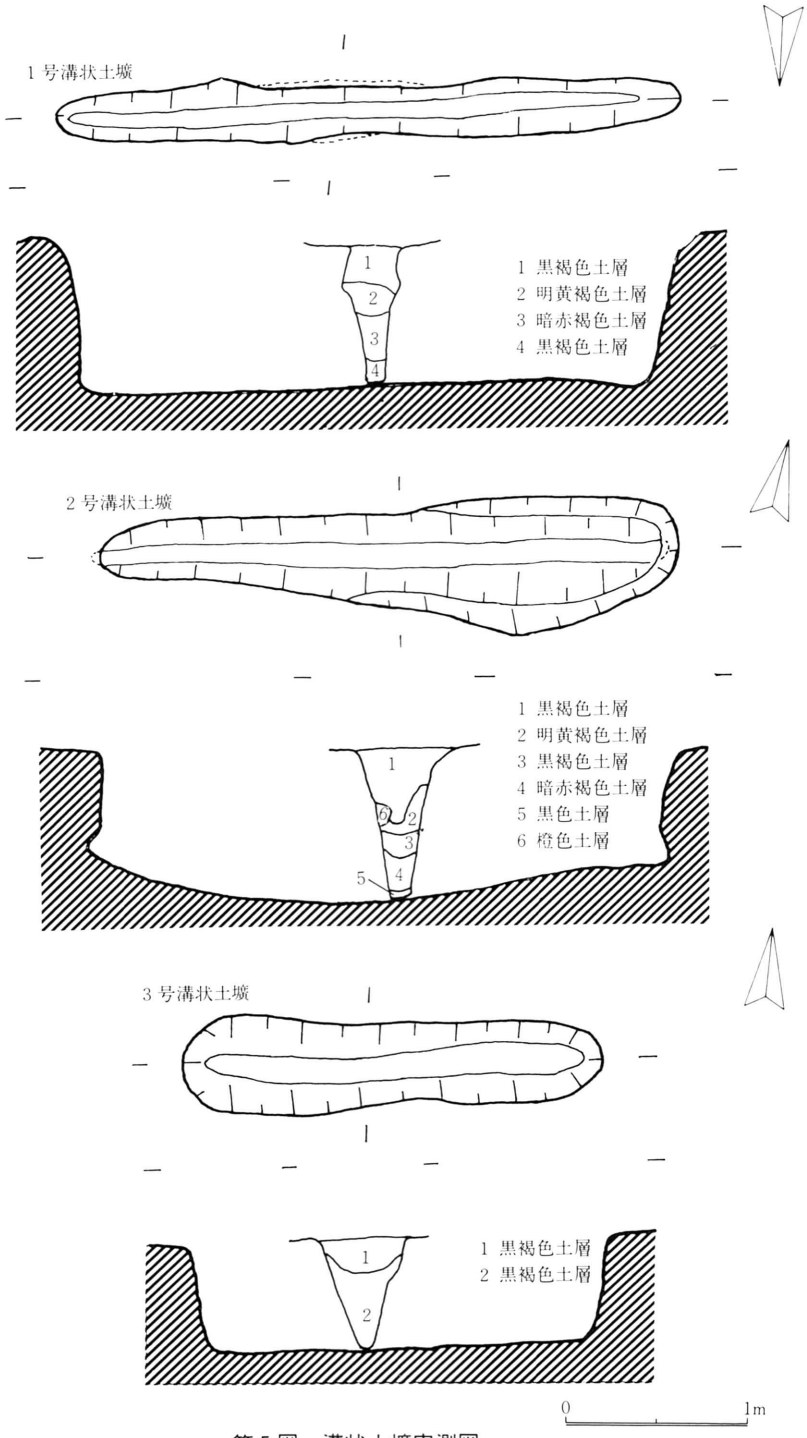
溝状土拡検出遺跡＜新幹線関係＞

昭和47～53年度

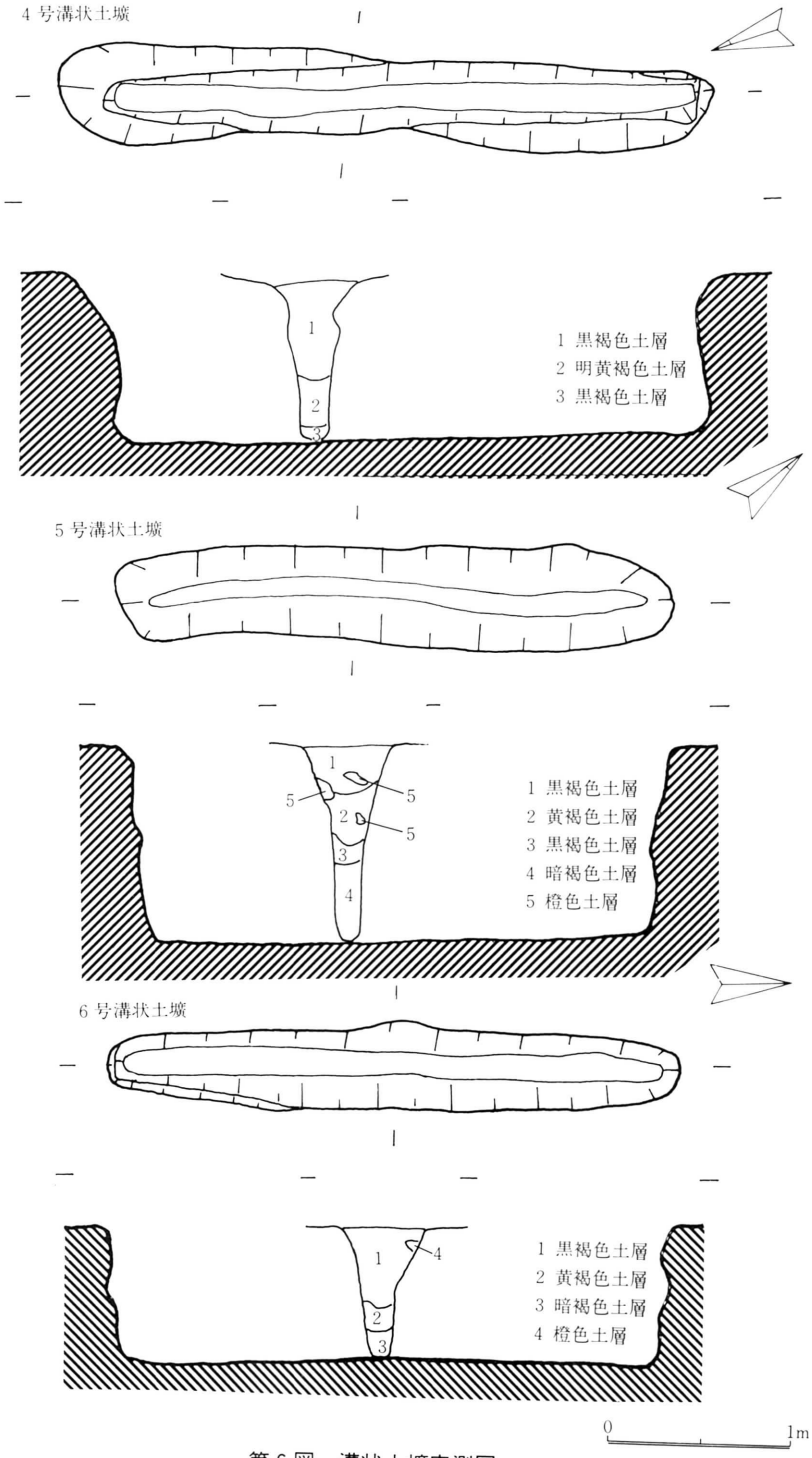
	遺跡名	所在地	立地	主な遺構と時期	溝状土壙数
1	西田	紫波町	河岸低地にかこまれた残丘上 (1,700 ㎡)	・竪穴住居址(25)……縄平 ・舟底状、円筒形、貯蔵穴 ・状土壙多数、墓壙群他	10
2	古館駅前	紫波町	段丘南緩斜地から平担面 (3,360 ㎡)	・竪穴住居(2)……平安 ・竪穴状遺構、溝 ・溝状土壙	1

	遺跡名	所在地	立地	主な遺構と時期	溝状土壙数
3	古館橋	紫波町	段丘北縁平担地 （4,200 ㎡）	・竪穴住居址(1)……平安 ・溝 ・溝状土壙	3
4	白沢	矢幅町	段丘東縁緩斜地から平担面 （3,726 ㎡）	・竪穴住居址(2) ・古墳周溝(3)円形土壙 ・溝状土壙 縄奈平	4
5	前九年Ⅰ	盛岡市	段丘東端 （5,150 ㎡）	・竪穴住居址(1)……縄文 ・フラスコピット(7) ・円形土壙(7)	4
6	前九年Ⅱ	盛岡市	段丘の東縁部 （3,400 ㎡）	・溝状土壙	1
7	長畑	盛岡市	段丘の東縁部 （6,370 ㎡）	・ピット(2) ・溝状土壙(1)	1
	計				24

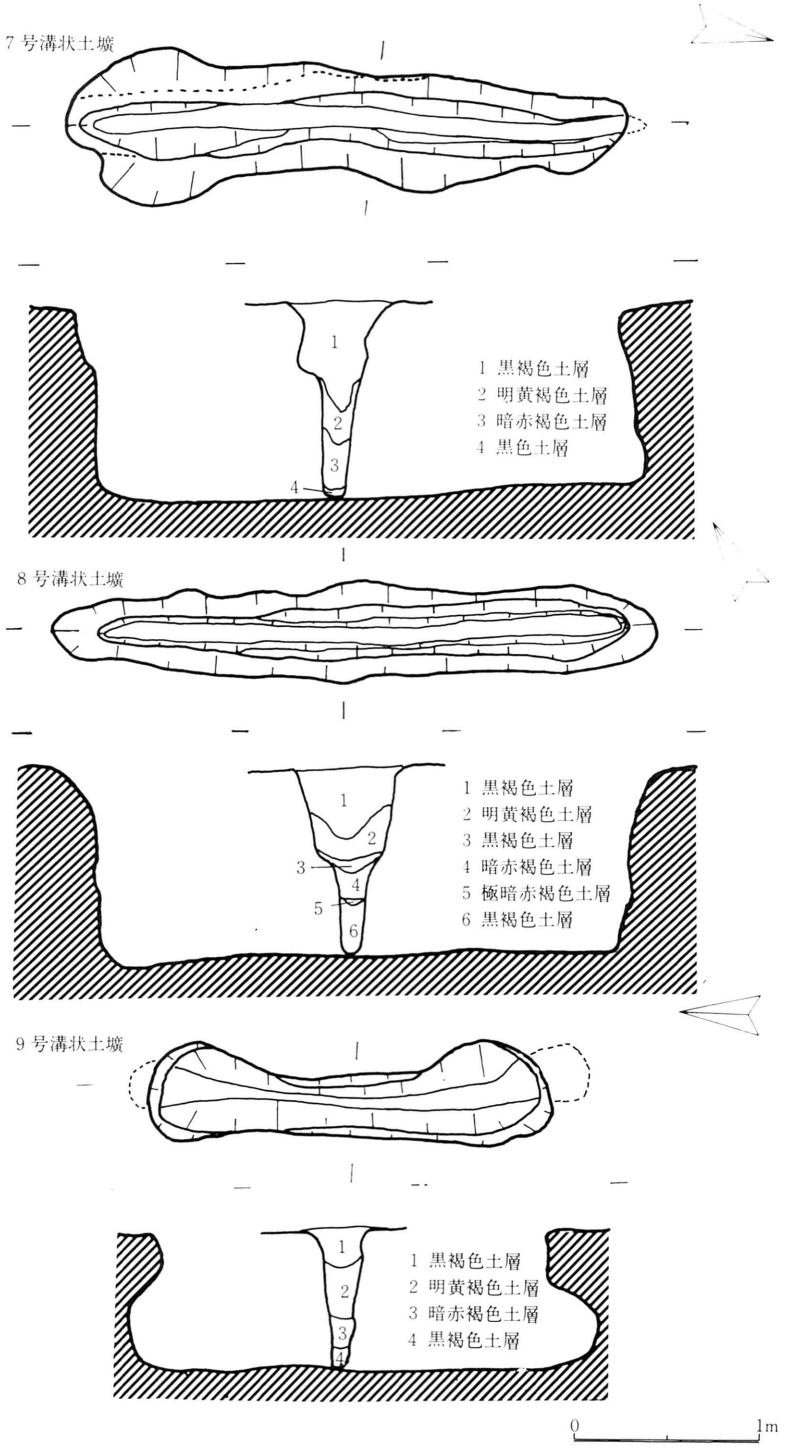
（現説資料）


1 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 暗赤褐色土層
4 黒褐色土層
2 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 黒褐色土層
4 暗赤褐色土層
5 黒色土層
6 橙色土層
3 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 黒褐色土層
0
1m

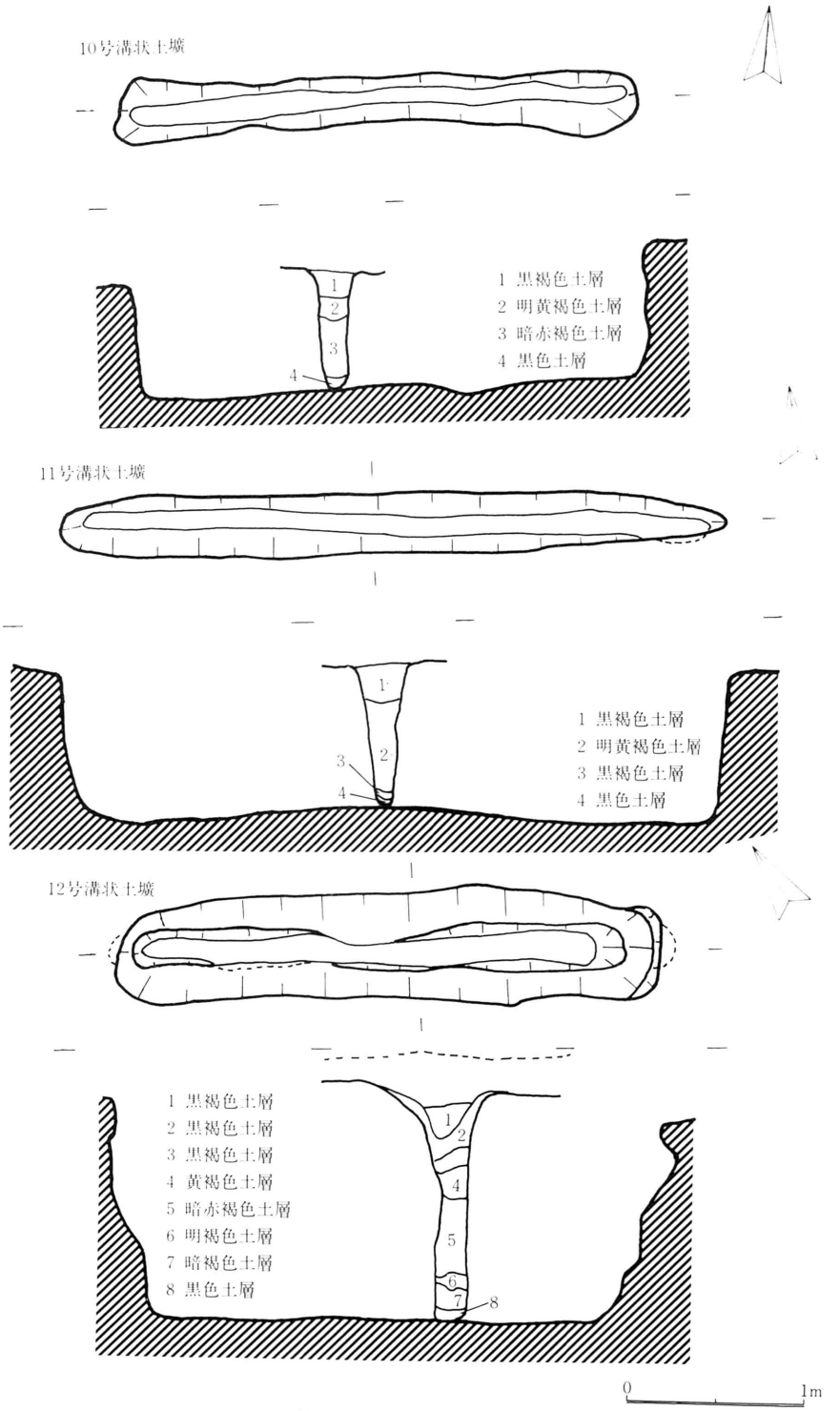
第 5 図　溝状土壙実測図


4 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 黒褐色土層
5 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 黄褐色土層
3 黒褐色土層
4 暗褐色土層
5 橙色土層
6 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 黄褐色土層
3 暗褐色土層
4 橙色土層
0
1m

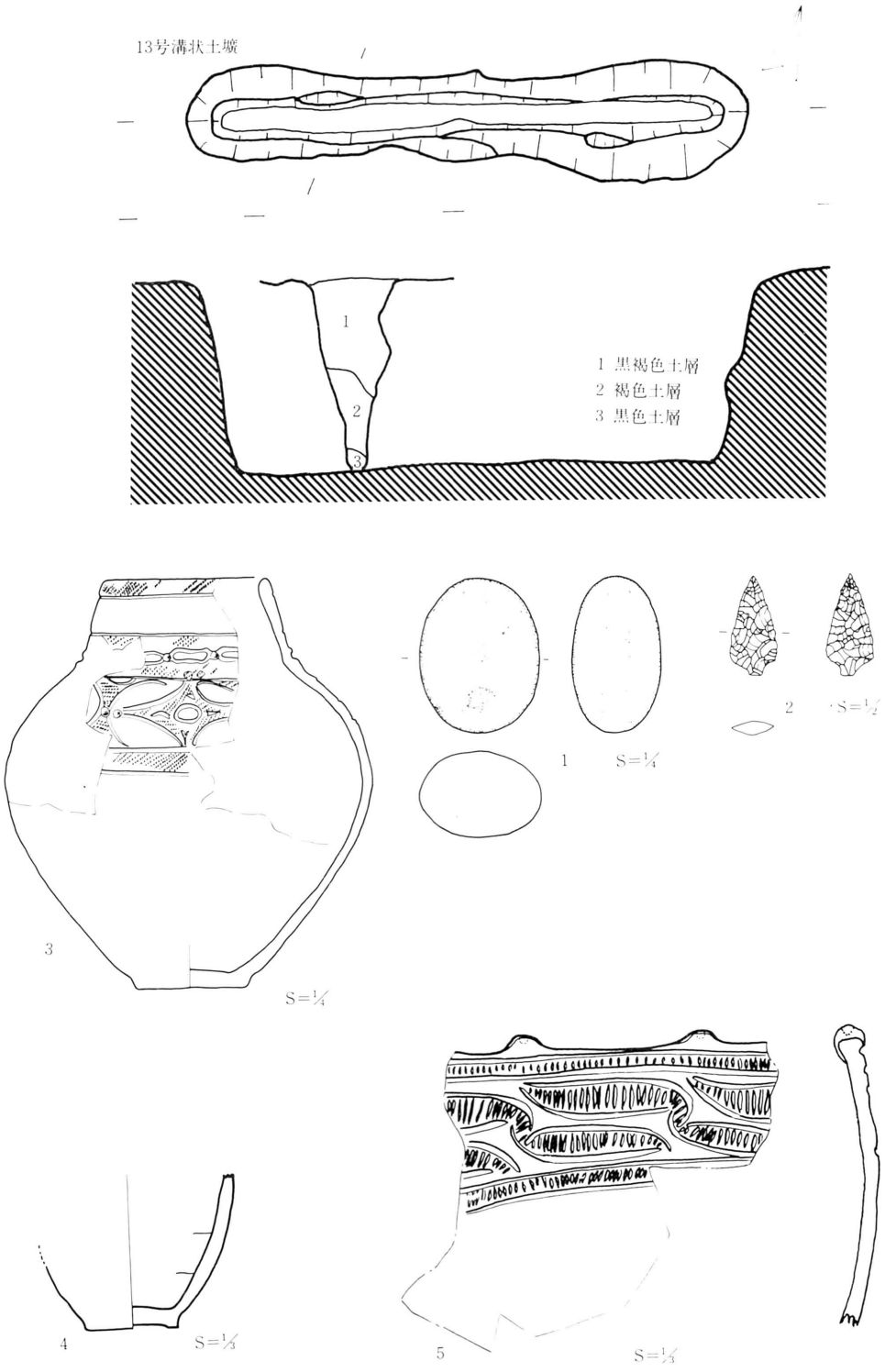
第 6 図　溝状土壙実測図


7 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 暗赤褐色土層
4 黒色土層
8 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 黒褐色土層
4 暗赤褐色土層
5 極暗赤褐色土層
6 黒褐色土層
9 号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 暗赤褐色土層
4 黒褐色土層
0
1m

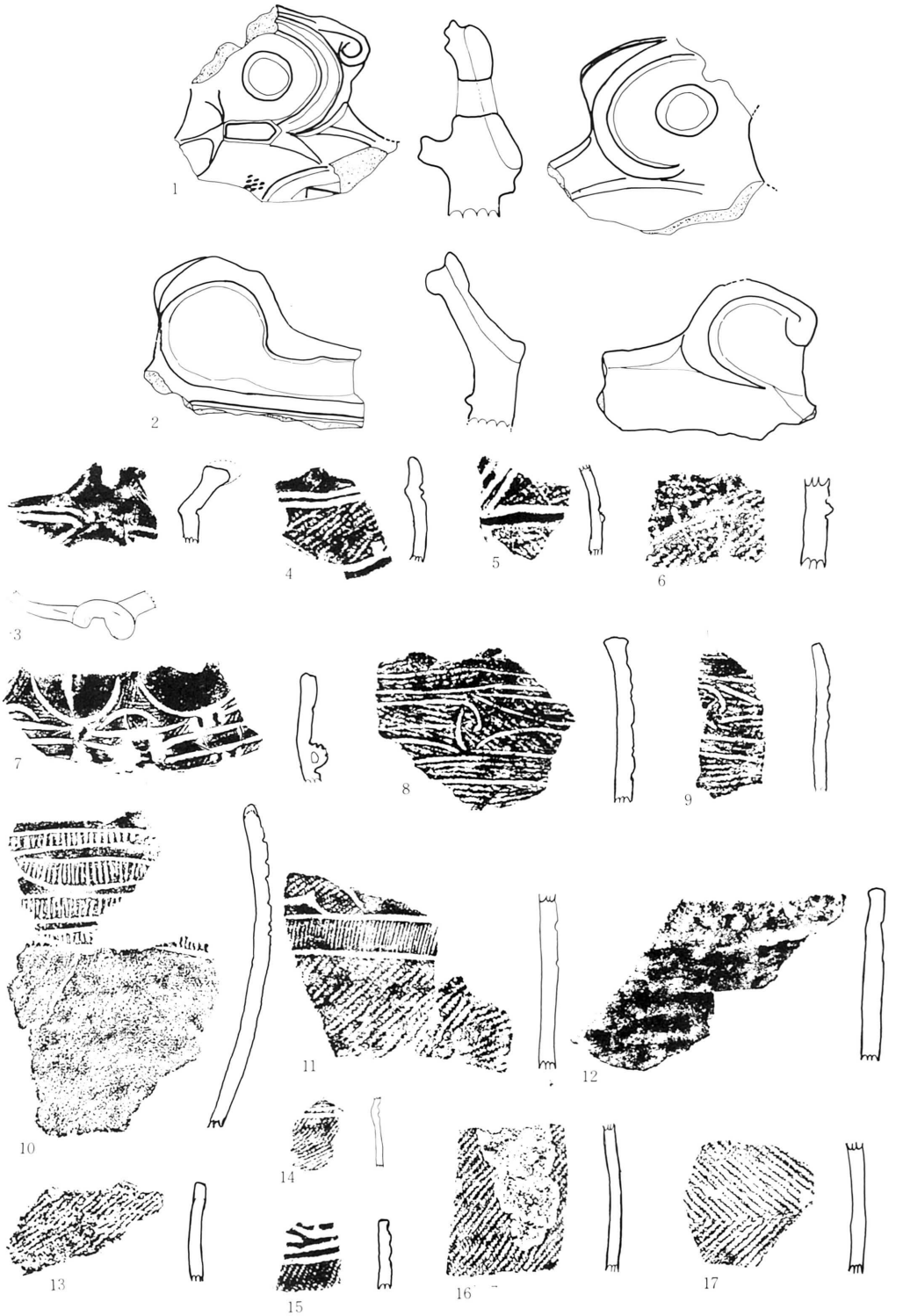
第 7 図　溝状土壙実測図


10号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 暗赤褐色土層
4 黒色土層
11号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 明黄褐色土層
3 黒褐色土層
4 黒色土層
12号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 黒褐色土層
3 黒褐色土層
4 黄褐色土層
5 暗赤褐色土層
6 明褐色土層
7 暗褐色土層
8 黒色土層
0
1m

第８図　溝状土壙実測図



第９図　溝状土壙実測図　石器、土器実測図



第10図　出土土器実測図、拓影図　S＝1/3

高柳（たかやなぎ）遺跡

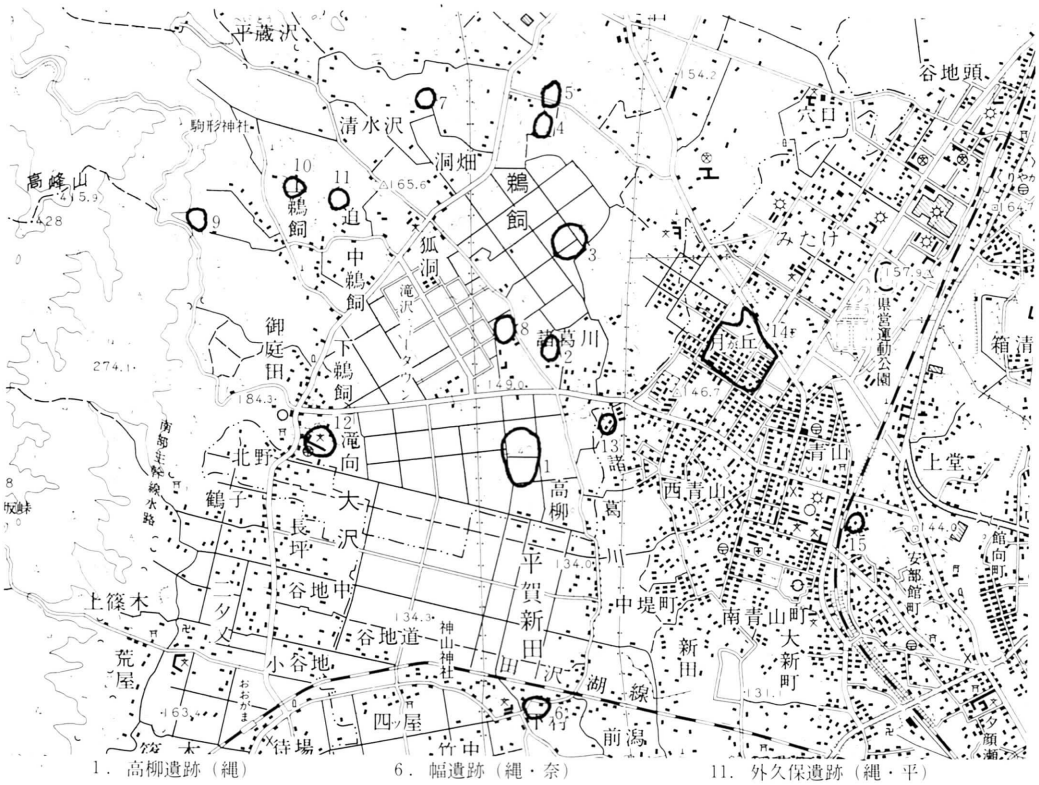
遺　跡　名：高柳（略号ＴＹ76，77）
遺跡所在地：岩手郡滝沢村大字鵜飼26地割字高柳
調査期間：昭和51年9月7日～12月4日（第1次）
　　昭和52年4月4日～5月24日（第2次）
調査対象面積：14，400㎡
発掘調査面積：8，600㎡（第1次）
　　4，500㎡（第2次）
　　計13，100㎡

Ⅰ　遺跡の立地と環境

高柳遺跡は滝沢村役場の東約1.5 kmに位置している。この地区には、西部山地の平蔵沢附近より南東に扇状地状に張り出している丘陵性台地があり、その南端に位置する通称「笹森」と呼ばれる低平丘陵の南緩斜面（標高143 ～ 136 m）に、当遺跡が立地している。

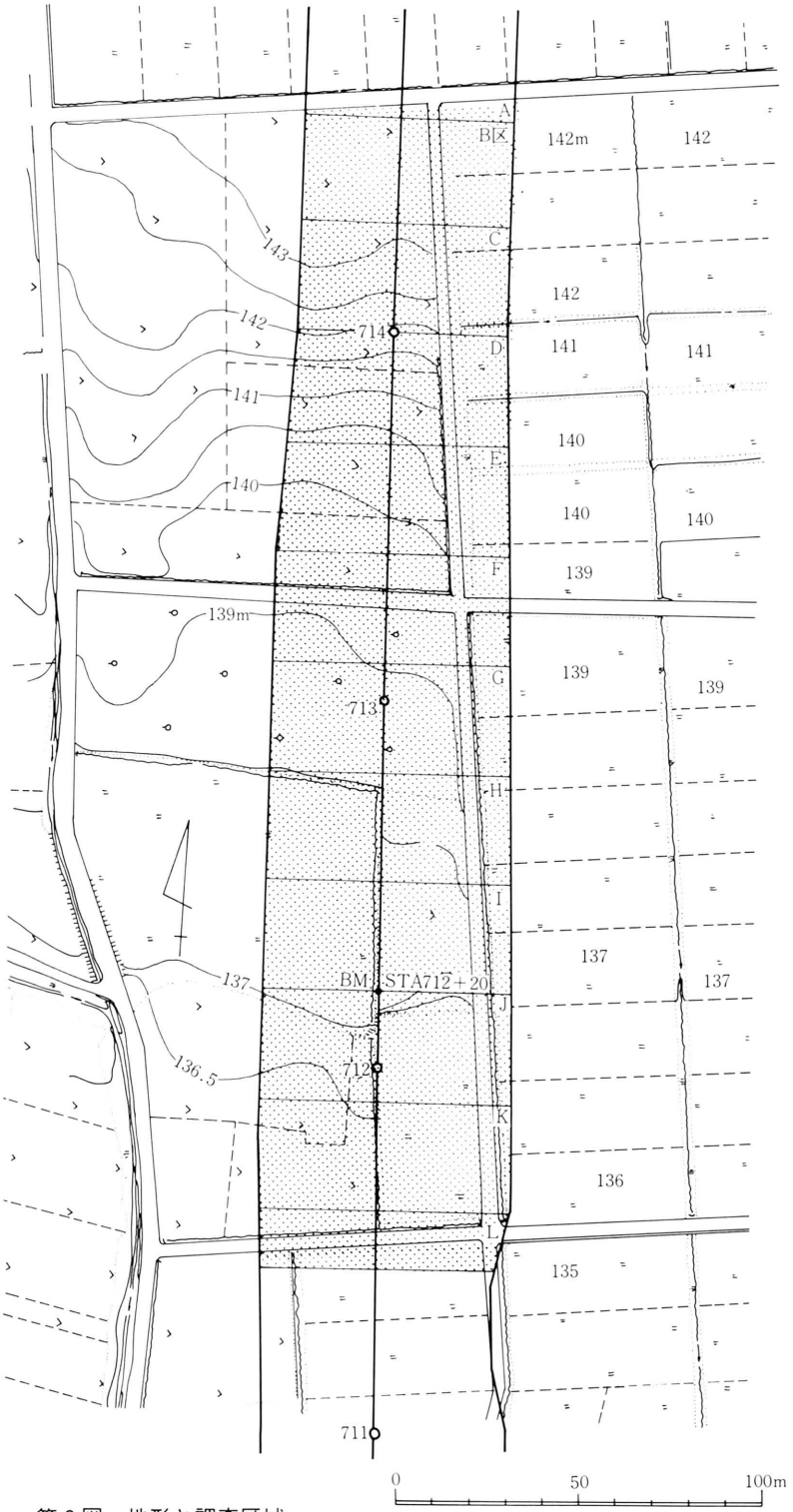
遺跡の東半は、既に機械力によって開田され、残り部分が畑地、果樹園として利用されているが、近年は更に、周辺より宅地化の傾向が急速に進められてきている。

笹森周辺には、従来から縄文・土師器等の散布地として周知されてきた遺跡群があり、当遺跡の北方丘陵性台地上には、東北縦貫自動車道関連遺跡として、大緩・大久保・高屋敷等の縄文時代の遺跡があり、西方奥羽後背山地東麓部の丘陵性台地緩斜面には、狐洞山・清水原・大畑・上篠木・白石等の縄文時代から、弥生時代・古代にかけての遺跡が数多く点在している。又、低地をはさんだ東方の丘陵性台地には、大館・境橋・青山等の縄文時代から古代にかけての遺跡が存在する。

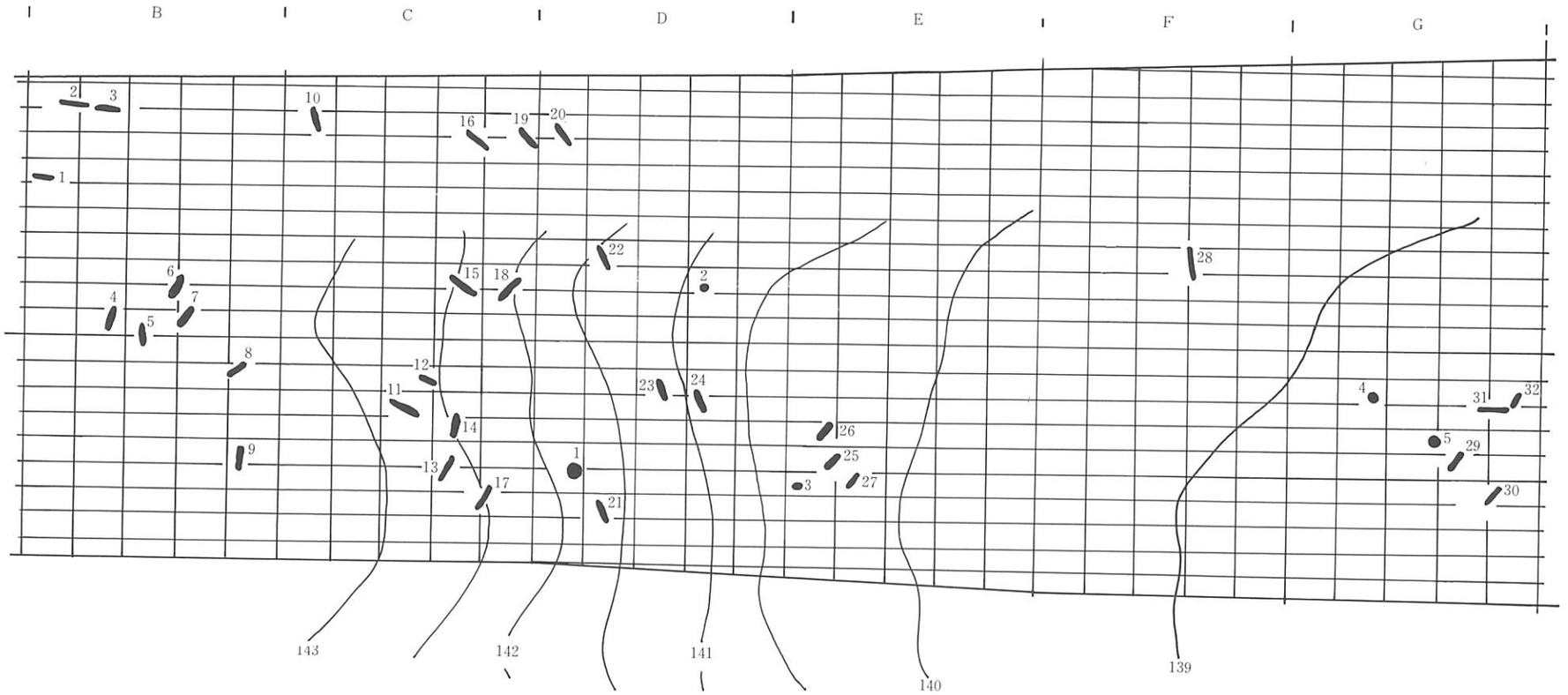


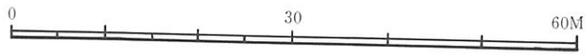
1．高柳遺跡（縄）
2．大緩遺跡（縄）
3．大久保遺跡（縄）
4．高屋敷Ⅱ遺跡（縄）
5．高屋敷Ⅲ遺跡（縄）
6．幅遺跡（縄・奈）
7．清水原遺跡（縄）
8．滝沢笹森遺跡（縄）
9．上鵜飼遺跡（縄）
10．大畑遺跡（縄）
11．外久保遺跡（縄・平）
12．滝向遺跡（縄）
13．境橋遺跡（平）
14．観武所遺跡（平）
15．長畑遺跡（平）

第１図　遺跡の位置と主要遺跡（盛岡５万）


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
142m
142
143
142
141
140
139m
139
137
136.5
136
135
714
713
712
711
BM
STA712+20
0
50
100m

第２図　地形と調査区域





第３図　遺構配置図

Ⅱ　調査の方法と経過

高柳遺跡は、昭和47年の東北縦貫自動車道関連の遺跡分布調査によって発見された遺跡であり、路線敷地内で完形の石鏃を採取したことと、周辺畑地にわずかではあるが縄文土器片が散布していること、地形等から勘案して遺跡として登録されたものである。

調査にあたっては、路線敷地内14,400㎡を対象として、その全域に路線中心杭 712 ＋20（原点）と中心杭 714 ＋00の二点を通る軸線と、これに直交する線を基準線とし、原点から30ｍごとの調査区（北よりＡ～Ｌ区）を設定し、更にこれを細分する３ｍ単位のグリットを組んだ。

発掘調査は、まず調査区内の基本的な層序を把握することからはじめ、遺構の分布状況を確認するために幅６ｍのトレンチを南北に等間隔（東西６ｍごと）に入れて、その検出、精査にあたった。遺構が検出された地区については、全面調査を実施して、他遺構との関連等、全体的な把握を志向した。また、調査の粗掘段階における表土の除去作業には、バック・ホーを併用したが、もっぱら表土中層までの除去にのみ用い、極力、遺構検出面までの掘り下げをさけるよう配慮し、その後の検出面までの掘り下げと検出作業は、調査作業員によって実施し、遺構の検出面をできるだけ上層で把握するように努めた。

第１次調査（昭和51年）は、Ｄ～Ｇ・Ｊ～Ｌ区と、南北農道東側水田部分を対象に、8,600㎡を発掘した。調査によって検出された遺構は、溝状土壙15基とピーカー形土壙が５基である。これらの形状、埋土、伴出遺物、築壙方法等の精査にあたった。

第２次調査（昭和52年度）は、前年に続いて、Ｂ・Ｃ区全面と、Ｄ～Ｆ区を対象に4,500㎡を発掘した。調査の結果、新たに、17基の溝状土壙が検出されたが、それ以外の遺構は認められず、これら土壙の形状、埋土、伴出遺物、築壙方法等の精査とあわせて、土壙群の総合的な把握に努めた。なお、両年度にわたる調査によって検出された遺物は、縄文土器（後、晩期）片、土師器片が若干であるが、検出された土壙群には、いずれも伴出していない。

Ⅲ　遺跡の層序

遺跡の立地面は、大旨、全体として南に向って、ゆるやかに傾斜しているが、細別してみると、北側よりＡ～Ｂ区の平坦面（標高 143 ｍ）、Ｃ～Ｅ区の南緩斜面（標高 143 ～ 140 ｍ）、さらになだらかなＦ～Ｈ区（標高 139 ～ 138 ｍ）、Ｉ～Ｌ区の低平湿地（標高 136 ｍ）といった微地形からなり、その層序も、これらの地点によって幾分の相違があるが、ほぼ均一であり、全域に共通する基本的な層序は、およそ、次の通りである。

第Ｉ層　黒色腐植土（Hue 7.5ＹＲ2/1）

表土で有機質混りの耕作土である。緩斜地裾部の平坦面および低平湿地面にあっては、この下部にクロボク状の黒色土が入る。

第Ⅱ層　暗褐色シルト質土（Hue YR3/3）

さらさらして、しまっており、炭化物や小礫をわずかに含有している。

この層までが、わずかではあるが遺物を包含している。遺構、遺物の検出面は、この層の上面である。

第Ⅲ層　明褐色シルト質土（Hue 7.5 YR5/6）

固くしまっており、小礫を多く混入している。炭化物も微量ながら含まれる。

第Ⅳ層　明褐色礫土（Hue 7.5 YR5/8）

固くしまって、ざらざらしている。火山降下物であるパミス（Pamss）の推積層である。

第Ⅴ層　暗青灰色砂質土（Hue 10 BG4/1）

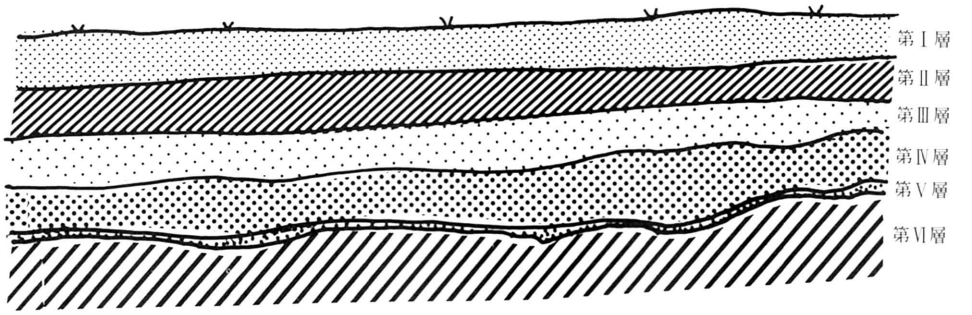
薄い層で固くしまっている。石英、長石等の下山降下物によって形成されている。

第Ⅵ層　橙色シルト質土（Hue 7.5 YR6/8）

粘性の強い細かなシルトで、微量の小炭化物および小礫が含まれている。

溝状土壙は、この層まで、掘り込まれている。

第Ⅶ層　黄橙色粘土（Hue 7.5 YR7/8）



第4図　遺跡の基本的層序　　Ch27地点　Scale 1：40

Ⅳ　発見された遺構と遺物

調査の結果、発見された遺構は、溝状土壙が32基、それにピーカー形の形状をもつ土壙が5基である。

溝状土壙は、B区とC～E区、それにG区に比較的集中して検出された。これらは、いずれも第Ⅱ層上面で検出され、以下第Ⅵ層まで掘り込んで構築されている。

なお、これらの土壙群には、それぞれ北より遺構番号とグリット名を付した。（第3図）

また、出土遺物には、縄文土器（後・晩期）片があるが、量は少なく、検出遺構には、いずれも伴出していない。

1　検出遺構

(1)　溝状土壙

第1号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
1	Ba 68	249 × 82	267 × 11	143	N－3°－W	ナ　シ	5　2 8

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　黄褐色土層
　　5.　黄橙色土層　　6.　黒色土層

概　要：

遺跡の北部平坦部に位置し、長軸方向は等高線にほぼ直交する形に開口されている。開壙部の平面形は、他の土壙群に比して短軸幅があり、ややずんどうの小判形を呈している。壙底部は、長軸両端を抉り気味に掘り込んで溝状に穿壙し、床面は平坦である。短軸断面は、下位はほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、上方にいくに従って開いていく形状を呈している。

埋土は上部に黒色土をもち、その下に、これらと火山灰粒の混在した暗褐色土がみられ、中～下位にかけては、火山灰主体の汚れた黄褐色土が堆積し、最下部に黒色土（クロボク）が認められる。これらは、開口部からの自然流入と、一部側壁の崩落土による自然堆積の様相を示している。伴出遺物は、検出されない。

第2号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
2	Bb 77	384 × 34	340 × 9	95	N－1°－W	ナ　シ	5　2

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　黒色土層

概　要：

遺跡の北部平坦部に位置して第3号溝状土壙と一線上にならび、長軸方向は等高線とほぼ直交する。平面形は、開壙部・壙底部とも細長い長方形の溝状を呈しており、底部は、平坦である。長軸断面は、開壙部両端より底部にかけて、ほぼ直に掘り込まれており、面をとって整形されている。短軸断面は、下位はほぼ垂直に立ち上がり、上方にいくに従って、わずかに開いている形を呈している。

埋土は、大旨4層からなる。1層は開口部からの流れ込みであり、2・3層は、側壁の崩落土と流れ込み土の混入堆積層で、4層はクロボクからなる。自然堆積の様相を呈している。

伴出遺物は、検出されない。

第3号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
3	Bc 74	373 × 48	364 × 10	87	N－6°－W	ナ　シ	5　　2

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　黄褐色火山灰質土層
　　4.　暗褐色土層　　5.　黒色土層

概　要：

第2号溝状土壙と一線上にならぶ。開壙部の平面形は溝状を呈しているが、南半部は、両側壁の崩落によって、やや広がっている。壙底部は、両端を抉り気味に掘り込んで狭小の溝状に穿壙し、床面は平坦である。短軸断面は、中～下位はほぼ垂直に立ち上がり、上方がわずかに開いた形を呈している。

埋土は、5層からなる。1層は、開口部からの流入土であり、2～4層は、側壁の崩落土と流入土からなる堆積層で、最下部にクロボクが認められる。自然堆積の様相を呈している。

伴出遺物は、検出されない。

第2号・3号土壙は、位置関係から、セットして構築され、機能した可能性が高い。

第4号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
4	Bd 50	428 × 64	352 × 10	114	N－61°－W	ナ　シ	6　　2

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　黒色土層
　　5.　黒褐色土層

概　要：

遺跡北部平坦部に位置し、等高線とほぼ平行する。開壙部の平面形は、やや幅の広い葉巻状を呈し、長軸両端が、底部に向かって垂直に掘り込まれている。周壁上半部と東南部に崩落が認められるが、その他、特に下半部の保存状態は良好である。壙底部は狭小の溝状に穿壙され、床面は平坦である。短軸断面は、中～下位は垂直に立ち上がり上方が開いた漏斗状を呈している。

埋土は、5層からなる。1層のクロボクは流れ込みであり、2～5層は、流れ込み土と周壁崩落土の混入による互層をなして、自然堆積の様相を呈している。

伴出遺物は、検出されない。

第5号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
5	Be 03	368 × 64	344 × 15	137	N－79°－W	ナシ	6　3

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒色土層　　3.　黒褐色土層　　4.　黄褐色土層

5.　黒褐色土層　　6.　にぶい黄褐色土層

概　要：

遺跡北部平坦部位置し、等高線とほぼ平行して穿壙されている。平面形は、やや不整形な葉巻形を呈している。これは、東端部を除く大部分の壁面が崩落した状態で検出されたからであり、原形は、保存状態の良好な東端部から推定すると、細長い長方形を呈していたと想定される。壙底部は狭小な溝状を呈し、床面は平坦である。両端部は開口部より底部まで、ほぼ垂直に面をとって掘り込んでいる。短軸断面は、上方に開き気味に直に立ち上がる。

埋土は、6層からなり、開口部からの流入と周壁の崩落土の混土層からなる自然堆積を示している。

伴出遺物は、検出されない。

第6号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
6	Bf 53	359 × 61	365 × 6	116	N－65°5′－W	ナシ	6　3 9

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　褐色土層　　4.　黒褐色土層

5.　黄褐色粘土層

概　要：

遺跡北部平坦面に位置し、等高線とほぼ平行して穿壙されている。平面形は開壙部・壙底部とも溝状を呈し、長軸方向両端下部が奥に抉りこまれている。床面は若干内彎ぎみであるが大旨平坦である。短軸断面は下半部の垂直な立ち上がりに比して、中位がふくらみ、上位が両側に広がりを呈する。これは、上半部壁の崩壊によるもので特に中位のパミス混入の火山灰主体からなる褐色土の崩壊が顕著である。

埋土は、上位からクロボクと黒褐色土、中位はクロボクのにじみがみられる火山灰主体の褐色土で、下位は同じく柔かい黒褐色土が堆積している。これらは開口部からの流れ込みと側壁の崩落による自然堆積を示している。

伴出物は、検出されない。

第７号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
7	Bf 50	358 × 63	384 × 12	124	N－62°－W	ナ　シ	7　3 9

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　明褐色土層
5.　明褐色土層　　6.　黒褐色土層　　7.　暗褐色土層　　8.　黒褐色土層
9.　黒色土層

概　要：

遺跡北部の平坦部に位置し、第６号土壙とほぼ平行である。開壙部の平面形は西側が後世の撹乱によって張り出した、やや不整形な溝状を呈している。壙底部は長軸方向両端を抉り気味に掘り込んで狭小な溝状に穿壙し、床面は東部に向い25cm±低くなっている。短軸断面は、下位が垂直に立ち上がり、中位から上位にかけて、両側に広がりをみせる袋状の漏斗形を呈している。

埋土は、上位のクロボクと黒褐色土、中～下位のこれらと側壁崩落土の混入による火山灰主体の汚れた褐色土の堆積、最下層の僅かに炭化物を含むクロボクと大別できる。

伴出遺物は、検出されない。

第８号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
8	Bh 06	355 × 112	355 × 13	172	N－28°－W	ナ　シ	7　3 8

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　黄褐色土層　　4.　にぶい黄褐色土層
5.　黒褐色土層　　6.　明褐色土層　　7.　明褐色礫土層　8.　黄褐色土層
9.　暗赤褐色礫土層　　10.　黒色土層　　11.　暗赤褐色礫土層　　12.　黒色土層

概　要：

遺跡北部の平坦部に位置している。平面形は、他の土壙群に比して短軸幅があり、ずんどうの小判形を呈している。壙底部は長軸方向両端底部を奥に袋状に抉り込んで狭小な溝状に穿壙している。床面は、なだらかな内湾ぎみのカーブを示している。短軸断面は、漏斗状である。

即ち、下半部が垂直に掘り込まれ保存状態も良好であるのに比して、上半部側壁の崩壊が顕著であり、両端に幅広く開口している。埋土は、上位のクロボク、黒褐色土と、中～下位のこれらとブロック状に混入した側壁崩落土の火山灰主体の土層の自然堆積である。

伴出遺物は、検出されない。

第９号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
9	Bｉ 15	322 × 86	285 × 9	151	N－83°－W	ナ　シ	8　4 9

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　黄褐色土層　　4.　黒色土層
5.　黒褐色土層　　6.　黒色土層　　7.　黒褐色土層　　8.　黒褐色土層
9.　黒色土層　　10.　黒褐色土層

概　要：

遺跡北部の平坦部に位置し、等高線とほぼ平行である。開壙部の平面形は幅広の小判形を呈している。壙底部は両端から直に掘り込まれ狭小な溝状を呈し、床面は平坦である。短軸断面は、上方が広く除々に狭まり中位で段をもち急に掘り込まれた形を呈する。

埋土は、上層のクロボク、黒褐色土、中～下層のこれらと側壁の崩落によるパミスを多く含んだ火山灰主体の土の混入土と、下層のクロボクと柔かい黒褐色土に大別される。

伴出遺物は、検出されない。

土壙下半部の保存状態の良好さに比して、上半部側壁の崩壊が顕著である。

第10号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
10	Cｂ 74	340 × 46	330 × 12	88	N－83°－W	ナ　シ	8　4 9

層　位：1.　黒色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　にぶい黄褐色土層
5.　黒色土層

概　要：

遺跡北部平坦部南縁に位置し、等高線とほぼ平行である。開口部の平面形は、西端部側壁の崩壊によって、やや右湾曲ぎみの溝状を呈している。壙底部も狭小な溝状を呈し、長軸方向両端部も、開口部より垂直に掘り込まれている。床面も平坦である。短軸断面は、上方にやや開く、むしろ垂立に近い立ち上がりを示す「くさび形」を呈している。

埋土は、上層のクロボク、中～下層の火山灰主体の褐色土、最下層の僅かに炭化物を含み火山灰が粒状に点在する黒色土からなる自然堆積である。

伴出遺物は、検出されない。

第11号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
11	Ce 09	354 × 57	393 × 7	141	N－25°－E	ナ　シ	9　4 10

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　暗赤褐色礫土層 4.　黒褐色土層
5.　暗赤褐色礫土　　6.　黒褐色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ直交する。開壙部の平面形は両端部が広がり中央がややしまった溝状を呈している。壙底部は長軸方向両端下部が奥に袋状に抉り込まれ狭小の溝状を呈し、床面は中央部から両端に向い10cm±低くなっている。短軸断面は、上方が僅かに開らくほとんど垂直に近い掘り込みを示す、くさび形を呈している。両端部の壁面上半部のパミスを多く混入する火山灰土の抉入状の崩壊を除いて原形が比較的たもたれている。

埋土は、上層のクロボクから、中～下層のクロボクと側壁崩落によるパミスを多く含む火山灰主体の混入土、最下層の僅かに炭化物を含む黒褐色土に大別できる。

伴出遺物は、検出されない。

第12号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙低部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
12	Cg 06	396 × 97	390 × 14	118	N－35°－E	ナ　シ	9　4 10

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　黄褐色土層　　4.　にぶい黄褐色土
5.　黄褐色土層　　6.　黒色土層　　7.　黒褐色土層　　8.　黒色土層
9.　黒褐色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置している。開口部の平面形は幅広の小判形を呈している。これは側壁上部のパミスを多く含む層の崩壊によるものであり原形は溝状であると想定される。壙低部も狭小な溝状を呈し、長軸方向の両端下部が奥に袋状に抉り込まれている。床面はほぼ平坦である。短軸断面は、上方が広く除々に狭まり中位で段をもち、急に直に掘り込まれた形を呈している。

埋土は、上層のクロボクと黒褐色土、中～下層のこれらと側壁の崩落によるパミスを多く含んだ火山灰主体の土の混入土と、下層のクロボクと黒褐色土の堆積に大別される。

伴出遺物は、検出されない。

第13号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
13	Cg 18	405 × 50	351 × 12	94	N－63°－W	ナシ	10　5 10

層　位　1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　黒褐色土層　　4.　黄褐色土層
5.　黄褐色土層　　6.　黒褐色土層　　7.　黒色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置する。平面形は開壙部・壙低部ともに溝状を呈している。ただ、開壙部は両端が広くなっており東端部がカギ形にまがって掘り込まれている。床面は平坦である。長軸断面は底部より開壙部に向って外傾ぎみに立ち上がっており、東端底部が奥に向かって僅かに抉り込まれている。短軸断面は下半部が、ほぼ垂直に掘り込まれ、上半部が側壁のパミスの崩壊によって、やや両端に開らく広がりを呈している。

埋土は、7層からなり、上層の開壙部からの流入土であるクロボクと黒褐色土、中層のこれらと側壁崩壊による火山灰主体の褐色土との混入土、下層の腐植質の黒褐色土、クロボクの堆積に大別できる。

伴出物は、検出されない。

第14号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
14	Cg 12	324 × 83	321 × 13	128	N－81°5′－E	ナシ	10　5

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　(撹乱土)　　4.　黄褐色土層
5.　にぶに黄褐色土層　6.　暗赤褐色礫土層（パミス）　7.　黒褐色土層
8.　黒褐色土層　　9.　黒褐色土層　　10.　黄褐色土層　　11.　黒褐色土層
12.　暗褐色土層　　13.　黒色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ平行である。開壙部の平面形は他の土壙群に比して短軸幅があり、幅広の溝状を呈している。しかし、土壙下半部は、幅の狭い溝状で垂直に掘り込まれており、床面も平坦である。長軸断面は、両端の抉り込みによって、ほぼ台形をなし、短軸断面は、漏斗状を呈している。これは保存状態の良好な下半部に比して、上半部壁面の崩壊が顕著であることを示している。

埋土は、大別して、上層のクロボクと黒褐色土、中～下層の、これらと側壁崩落土の混入した汚れた火山灰主体の褐色土と、最下層の黒色土からなる。

伴出物は、ない。

第15号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
15	Cg 56	360 × 70	330 × 22	112	N－27°5′－E	ナシ	10　5

層　位：1.　黒色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　暗赤褐色土層
　　5.　暗褐色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ直交する。平面形は開壙部・壙底部ともに溝状を呈している。床面は、平坦である。長軸断面は、両端がほぼ垂直の立ち上がりを示している。短軸断面は、上位で開き、中位ふくらみをもつが、大旨、底部幅の狭い逆台形を呈する。

埋土は、5層からなり、上半はクロボク主体の層で下半は、側壁の崩落による汚れた火山灰主体の層となる。いずれも、レンズ状に堆積した自然堆積の様相を呈している。

伴出遺物は、検出されない。

第16号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
16	Ch 71	364 × 38	343 × 11	119	N－28°4′－E	ナシ	11　5 10

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　黄褐色土層
　　5.　暗褐色土層　　6.　黄褐色土層　　7.　暗褐色土層　　8.　黄褐色土層
　　9.　暗褐色土層　　10.　黒色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ直交する。また、第19号・20号土壙とほぼ同方向に穿壙されている。平面形は、開壙部・壙底部とも両端を方形に面をとった細長い長方形で溝状を呈する。長軸断面は両端で、垂直に掘り込まれ、床面も平坦である。短軸断面は、上方にやや開くが、ほぼ垂直の「くさび形」を呈している。全体的に原形が、よく保たれている。

埋土は、大別して、上層のクロボク主体の土と、中～下層の汚れた火山灰主体の土と、最下層の僅かに炭化物を含む黒色土から構成されている。

伴出遺物は、検出されていない。

第17号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
17	Ch 21	330 × 75	301 × 8	126	N－74°－W	ナシ	11　6

層　位：1.　黒色土層　　2.　黄褐色土層　　3.　黒褐色土層　　4.　黄褐色シルト

5. 暗褐色土層　6. 暗褐色火山礫土層　7. 黒色土層　8. 黄褐色土層
9. 黒褐色土層　10. 黒色土層　11. 黒褐色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ直交する。第13号土壙と同方向に穿壙されている。平面形は開壙部で幅広のルーズな溝状を呈するが、中段から底部にかけては垂直に掘り込まれ、狭幅の溝状を示している。長軸断面は、西壁がほぼ垂直に立ち上がり、東壁は上方より底部にかけて抉り込みが認められる。床面は平坦である。短軸断面は、上方が広く除々に狭まり中位で段状を呈し、下半部が細く垂直に掘り込まれている。これは中位側壁面に相当するパミスを多く含有する土層の崩落によるものである。

埋土は、上層のクロボク、中～下層の火山灰を主体とする土、最下層の黒色土に大別される。

伴出遺物は、ない。

第18号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
18	Ci 53	319 × 72	304 × 21	121	N－53°－W	ナシ	11　6

層　位：1. 黒色土層　2. 黒褐色土層　3. 黄褐色砂質シルト層　4. 黒褐色土層
5. 黒褐色土層　6. 黒色土層　7. 黒褐色土層

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ直交する。平面形は、開壙部・壙底部ともに溝状を呈する。長軸断面は、両端部がほぼ垂直に掘り込まれているが、西壁は下半部から底部にかけて袋状に抉り抉んでいる。床面は中央部から両端に向い10cm±低くなっている。短軸断面は、上位にやや開くU字形を呈しているが、中位は、側壁崩落によって湾状に抉入している。

埋土は、上層のクロボクと黒褐色土、中～下層のこれらと側壁崩落土の混入による火山灰主体の土に大別できる。いずれも、自然堆積の様相を呈している。

伴出遺物は、検出されていない。

第19号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
19	Cj 71	419 × 71	372 × 14	120	N－41°2′－E	ナシ	12

概　要：

遺跡北部の南緩斜面に位置し、第16号・20号とほぼ同方向に穿壙されている。平面形は、開壙部・壙底部とも溝状を呈する。長軸断面は、両端が、ほぼ垂直の立ち上がりを示し、床面も

平坦である。短軸断面は、上方に開きぎみの、底部幅の狭い台形を呈する。

埋土については、冠水と周辺からの浸透水によって記録を断念した。ただし、掘り上げの状況から判断して、大旨、他の土壙群と同じ様相を呈している。

伴出遺物は、検出されなかった。

第20号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
20	Cb 71	378 × 65	344 × 17	122	N－54°5′－E	ナシ	12　11

層　位：1.　黒褐色土層　2.　暗褐色土層　3.　暗褐色土層　4.　黄褐色砂質シルト層
5.　黄褐色粘土層　6.　黒色土層　7.　暗黄褐色土層

概　要：

遺物北部の南緩斜面に位置し、第16号・19号土壙とほぼ同方向に穿壙されている。平面形は開壙部・壙底部ともに溝状を呈している。長軸断面は、両端方向で、やや開くが、垂直に掘り込んでおり、床面は平坦である。短軸断面は、中～下位はほぼ垂直に立ち上がり、上位がやや袋状に広がり開壙部に向って開く形状を呈している。

埋土は、上層のクロボク主体の土と、中～下層の汚れた火山灰主体の混土から構成されており、自然堆積の様相を呈している。

伴出遺物は、検出されなかった。

第21号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
21	Dc 21	364 × 32	350 × 15	80	N－47°5′－E	ナシ	12　13

層　位：1.　暗褐色土層　2.　黒褐色土層　3.　黄褐色土層　4.　黒褐色土層
5.　黒色土層　6.　黄褐色土層　7.　黒色土層　8.　黒褐色土層
9.　黒褐色土層　10.　黒色土層　11.　黒色土層　12.　黒褐色土層

概　要：

遺跡中央部の南緩斜面に位置し、等高線にほぼ平行している。平面形は、開壙部・壙底部ともに溝状を呈している。短軸断面は、上方に僅かに広がる、ほぼ垂直に掘り込まれた底部幅の狭い逆台形を示している。長軸断面は、東壁がやや不整であるが、両端とも垂直に掘り下げられ、床面も平坦である。

埋土は、上層のクロボクと黒褐色土、中～下層のこれらと側壁の崩落土の混入による火山灰主体の土から構成され、立地形の傾斜に即応して堆積している。伴出遺物は、検出されなかった。

第22号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
22	Dc 59	344 × 82			N－62°－E	ナ　シ	12

第25号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
25	Eb 15	322 × 40			N－54°－W	ナ　シ	13

第26号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
26	Eb 12	323 × 50			N－28°－W		13

第22・25・26号土壙については、冠水と周辺からの浸透水のため精査を断念した。

第23号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
23	Df 09	312 × 55	271 × 17	95	N－73°4′－E	ナシ	13　6 11

層　位：1.　黒色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　黄褐色土層
5.　黄褐色土層　　6.　黄褐色粘質土層　7.　黒色土層　　8.　暗黄褐色土層
9.　黒色土層

概　要：

遺跡中央部の南緩斜面に位置し、第24号土壙とほぼ同方向に穿壙されている。平面形は、開壙部壙底部ともに、両端を方形に面どりをした細長い長方形を呈し、溝状になっている。長軸断面は、両端を上方から底部に内傾ぎみに直に掘り込んでおり、床面も平坦である。短軸断面は、上端部が、やや開きぎみで、以下は底部まで垂直に掘り込まれている。

埋土は、上層のクロボク主体の土、中～下層の汚れた火山灰主体の土、最下層の僅かに炭化物を含む腐植土質の黒色土に大別できる。

伴出遺物は、検出されない。

第24号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
24	Dg 09	335 × 61	317 × 13	101	N－60°5′－E	ナシ	13　6 11

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　暗褐色土層　　4.　暗褐色土層
5.　暗黄褐色土層　　6.　黒色土層

概　要：

遺跡中央部の南緩斜地に位置し、第23号土壙とほぼ同方向に穿壙されている。平面形は開壙部・壙底部とも細長い長方形を呈し、溝状になっている。特に、壙底部は狭小で、両端部に比較して中央部ほど、その傾向が強くなっている。長軸断面は、両端が底部へ垂直に掘り下げられており、床面も平但である。短軸断面は、上端が両側に開きぎみの、以下、ほぼ垂直に掘り下げられた「くさび形」を呈している。

埋土は6層からなるが、上層のクロボク主体の流入堆積土と、中～下層のこれらと壁崩落土の混入土である火山灰主体の土と、最下層の黒色土に大別できる。

伴出遺物は、検出されなかった。

第27号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
27	Ec 18	310 × 27	322 × 7	36	N－61°－W	ナシ	14　7 12

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　にぶい黄褐色土層

概　要：

遺跡中央部の南緩斜面の下位に位置し、第25・26号土壙とほぼ同方向に穿壙されている。平面形は、開壙部・壙底部ともに細長い溝状を呈している。長軸断面は、車壁が底部奥に抉り込まれているが、西壁は、ほぼ垂直に掘り下げられ、床面は、平坦である。短軸断面はV字形を呈している。

埋土は、3層からなり、上層はクロボク混入の火山灰土で、下層は汚れた火山灰主体の黄褐色である。

伴出遺物は、検出されなかった。

他の土壙に比較して、検出面からの深さは、一番浅くなっている。

第28号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
28	Fg 56	354 × 43	340 × 16	72	N－79°－E	ナ　シ	14　7 12

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　黄褐色砂質シルト層　　4.　粘土層
5.　黒色土層　　6.　暗黄褐色土層　　7.　暗褐色土層

概　要：

遺跡中央部の平坦面に位置する。平面形は、開壙部・壙底部ともに細長い溝状を呈している。壙底部は、特に、両端部が広がりをみせ、中央部の幅が狭くなっている。長軸断面は、両壁とも垂直に掘り下げられ、床面は、平坦であるが両端壁ぎわが内湾状に掘り込められている。短軸断面は、上方開きぎみに、ほぼ垂直な立ち上がりを示し、底部幅の狭い逆台形を呈する。

埋土は、7層よりなるが、上層のクロボク主体の土と、中～下層の汚れた火山灰主体の土に大別できる。

伴出遺物は、検出されなかった。

第29号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺　物	挿図・図版
29	Gg 15	315 × 33	299 × 4	71	N－64°－W	ナ　シ	14　7 12

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　黄褐色土層　　3.　黒褐色土層　　4.　黄褐色土層
5.　黒褐色土層　　6.　黄褐色土層　　7.　暗褐色土層　　8.　暗黄褐色土層
9.　黒色土層

概　要：

遺跡南部の平坦面に位置し、第30号土壙とほぼ同方向に穿壙されている。開壙部の平面形は細長い長方形を呈し、壙底部も幅のきわめて狭い溝状を呈している。長軸断面は、底部より上方に垂直な立ち上がりを示し、床面も平坦である。短軸断面は、中位が、ややふくらむV字状を呈している。

埋土は、9層に分けられ、いずれもレンズ形に堆積した火山灰主体の土で、最下層に僅かに炭化物を含む腐植質の黒色土が認められる。

伴出遺物は、検出されなかった。

第30号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
30	Gh 18	303 × 27	307 × 7	59	N－51°－W	ナシ	14　7 12

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　黒褐色土層　　3.　にぶい黄褐色土層　　4.　黄褐色土層
5.　暗褐色土層

概　要：

遺跡南部の平坦面に位置し、第29号土壙と、ほぼ同方向に穿壙されている。平面形は、開壙部・壙底部ともに溝状を呈している。特に、壙底部は、両端が広く中央部が狭小になっている。長軸断面は、東壁が垂直に立ち上がっているのに対して、西壁には上方より底部奥に抉り込みが認められ、床面は、中央部の平坦に対して両端部が、浅く湾状に掘り込まれている。短軸断面は、中位に、ややふくらみをもつV字状を呈している。

埋土は、5層からなり、いずれも、汚れた火山灰主体の土が、レンズ状に堆積している。

伴出遺物は、検出されなかった。

第31号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
31	Gh 09	407 × 45	392 × 8	70	N－2°4′－E	ナシ	15　8 13

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　黄褐色土層　　4.　粘土層
5.　黄褐色土層　　6.　黒色土層

概　要：

遺跡南部の平坦面に位置している。平面形は、開壙部・壙底部とも、方形に面をとった細長い長方形で、溝状を呈している。長軸断面は、両壁とも垂直に掘り下げられ、床面も平坦である。短軸断面は、底部幅の狭い、立ち上がりも垂直に近い逆台形を呈している。厚形が良く保たれている。

埋土は、5層からなり、汚れた火山灰主体の自然堆積を示している。

伴出遺物は、検出されなかった。

第32号　溝状土壙

土壙番号	土壙名	開壙部(cm)	壙底部(cm)	深さ(cm)	長軸方向	遺物	挿図・図版
32	Gi 09	253 × 59	280 × 9	90	N－59°－W	ナシ	15　8 13

層　位：1.　黒褐色土層　　2.　暗褐色土層　　3.　黄褐色砂質シルト層
4.　黄褐色粘質土層　　5.　黒色土層　　6.　暗黄褐色土層　　7.　暗褐色土層

概　要：

遺跡南部の平坦部に位置し、第31号土壙に隣接して検出された。平面形は、やや幅広の溝状を呈している。長軸断面は、両端部が、上方より底部奥に向かって袋状に抉り込まれており、床面は平坦である。短軸断面は、上方が開き、下方がほぼ垂直に掘り込まれる逆台形を示している。

埋土は、7層からなり、上層のクロボク主体の土、中～下層のこれらと側壁崩落の混入した火山灰主体の土と大別される。

伴出遺物は、検出されなかった。

(2)　ビーカー形の形状をもつ土壙

第1号土壙（Db18 Pit）…… 第15図、図版14

遺跡中央部の南緩斜面に位置する。開壙部径156 cm±×157 cm±・壙底部径140 cm±×140 cm±の規模をもち、深さ59cm±を計る。平面形は円形である。壁は開口部から中位まで、ほぼ垂直に掘り込り、中位から底部奥に向かって抉り込まれている。床面は平坦である。

埋土は、クロボク主体の黒褐色土で、底部周縁の抉入部分には、これと壁の崩落土の混入した汚れた火山灰土が堆積している。伴出遺物はない。

第2号土壙（Dg56 Pit）…… 第15図、図版14

遺跡中央部の南緩斜面に位置する。開壙部径92cm±×96cm±・壙底部径83cm±×85cm±の規模をもち、深さ40cm±を計る。平面形は円形である。壁は直壁で、床面は平坦である。

埋土は、上半のレンズ形に堆積した黒褐色土、下位壁際の汚れ火山灰、床面上の黒色土から構成される。伴出遺物はない。

第3号土壙（Ea21 Pit）…… 第15図、図版14

遺跡中央部の南緩斜面に位置する。開壙部径92cm±×93cm±・壙底部径80cm±×82cm±の規模をもち、深さ42cm±を計る。平面形は円形である。壁は上半部が開き、中位から底部奥に向かって抉り込まれた「く」字状を呈する。床面は平坦である。

埋土は、上半は黒褐色土、下半は抉入部分の汚れた火山灰土と、床面上の黒色土から構成される。伴出遺物はない。

第4号土壙（Gd06 Pit）…… 第16図、図版14

遺跡南部の平坦面に位置する。開壙部径155 cm±×126 cm±・壙底部径77cm±×64cm±の規模をもち、深さ52cm±を計る。底部に比して開口部上半が大きく開き、壁上半に頸部状のくびれが形成される。壁下半は直壁で床面は平坦である。

埋土は、上半は黒褐色土がレンズ状に堆積し、下半部床面を汚れた火山灰層が覆っている。

伴出遺物はない。

第５号土壙（Ｇｆ12 Ｐｉｔ）…… 第16図、図版14

遺跡南部の平坦面に位置する。開壙部径 146 cm±× 145 cm±・壙底部93cm±×93cm±の規模をもち、深ち70cm±を計る。平面形は円形である。壁上半に頸部状のくびれが形成され、上半が大きく開き、下半が直壁を呈している。床面は平坦である。

埋土は、上層のクロボク主体の堆積土と、下層の汚れ火山灰主体の堆積土に大別される。

伴出遺物はない。

以上、検出された土壙群について概述してきたが、これらからは、遺物のみならず、川原石等も検出されなかった。

２　出土遺物

出土遺物は、まことにすくなく、縄文土器の細片10片と、その他に土師片がある。

第16図１・２・３（図版15）

遺跡中央部の南緩斜面（Ｄｆ53）の第Ⅱ層上面より．比較的まとまって（７片）検出された。いずれも、鉢形土器の体部片と思われ、単節斜行縄文（ＲＬ）が施文されている。器厚は４㎜の薄手で、焼成良好、灰褐色を呈している。特に３は、底部が剥離した状態を知る体部下半の破片であり、これによると、円板上の底部に、そのまま胴部を積みあげ、体部の粘土を底部上面にのばして接合していることがわかる。これらは、地文、胎土、焼成等よりみて同一個体である。縄文晩期の土器である可能性が高い。

第16図４（図版15）

遺跡中央部の平坦面（Ｅｊ74）の第Ⅱ層上面より、検出された体部破片である。表面には、数条の櫛歯状工具によって櫛歯状条線文が施文されている。裏面は横位に、みがかれている。器厚は６㎜で、胎土に石英粒その他の砂を含む。焼成は良好で橙色（５ＹＲ7/6）を呈している。縄文後期の土器である。

第16図５（図版15）

遺跡中央部の平坦面（Ｆｂ09）の第Ⅱ層上面より、検出された体部破片である。表面には、沈線による磨消縄文の区画文が施文されている。沈線の側縁はケズリによって調整され、裏面も横位に、みがかれている。器厚は４㎜と薄手であり、胎土は砂含み、焼成は良好でにぶい橙色（５ＹＲ 7/4）を呈している。縄文後期の土器の可能性が高い。

第16図６（図版15）

遺跡中央部の平坦面（Ｆ区）の第Ⅰ層より出土した底部破片である。底部は無文で器面調整されている。胎土は砂含みである。色調は断面の観察から、内部は黒褐色で、両面の表面が、にぶい橙色（５ＹＲ7/4）を呈している。縄文後期の土器の可能性が高い。

図版15…… 7

調査地に隣接する畑地から表面採集した縄文土器の細片である。

その他

調査区、耕作土（第Ⅰ層）より、土師器の細片（２片）を採集している。

Ⅴ　考察とまとめ

１　溝状土壙について

溝状土壙は、それを構成する要素（平面形、断面形、埋土など）が有機的に結合したものである。本遺跡では32基が検出されているが、以下、各要素の検討を通じて溝状土壙の構造（形態）を考えてみたい。

平面形：各土壙について、その平面形を検討すると次のように分類することができる。

- 平面形
  - 開壙部――溝状
    - 両端が方形基調……第２・３・４・５・６・15・16・17・18・20・23・24・27・28・29・30・31・32号土壙（18基）
    - 両端が円形基調……第１・７・８・９・10・11・12・13・14・19・21・22・25・26号土壙（14基）
  - 壙底部――溝状……幅が狭く細長……（28基）
  - 不明……（４基）

開壙部の平面形は、側壁の崩壊にあまり影響されない両端の掘り込み部分に着目した。

規模は、開壙部、長軸方向で最大長428 cm、最小長249 cm、平均長は348 cmであり、短軸方向では最大幅112 cm、最小幅27 cm、平均幅は59 cmになる。原形が比較的保たれている壙底部についてみると、長軸方向で長さが最大のもの393 cm、最小のもの267 cm、平均長は334 cmであり、短軸幅は最大幅22 cm、最小幅４cm、平均幅は11.6 cmとなる。

断面形：各土壙について、その断面形を検討すると次のように分類することができる。

a　長軸方向の断面形

○両端の壁がほぼ垂直に掘り込まれているもの。（15基）

第２・４・５・９・10・13・15・16・20・21・23・24・28・29・31号土壙

○両端壁が上方から底部奥に向かって抉り込まれているもの。（９基）

第１・３・６・７・８・11・12・14・32号土壙

○片側は直壁で一方が底部奥に向かって抉り込まれているもの。（４基）

第17・18・27・30号土壙

○不明のもの。（４基）

また、床面は

○平坦のもの。（22基）

○中央部から両端に向かって低くなり、端部が内湾状に掘り込められたもの。（4基）

第11・18・28・30号土壙

○中央部から両端に向かって内湾ぎみに高くなる浅い皿状のもの。（2基）

第6・8号土壙

○不明のもの。（4基）

b　短軸方向の断面形

○くさび形ないしは「V」字状の形状をもつもの。（18基）

第1・2・5・6・10・13・15・16・18・21・23・24・27・28・29・30・31・32号土壙

○上位が開壙部に向かって開き、中位から下位にかけて、ほぼ垂直に掘り込まれた「Y」字形の漏斗状を呈するもの。（10基）

第3・4・7・8・9・11・12・14・17・20号土壙

○不明のもの。（4基）

埋土：各土壙の埋土の状態についてみると、いずれも基本的には開壙部からの流れ込みと、側壁の崩落土の混入等による自然堆積の状態を示している。伴出遺物も皆無であり、川原石等も、まったく検出されなかった。

溝状土壙の分類：各土壙について平面形・断面形・埋土の特徴の概要を、それぞれ検討した。これらの項目をもとに分類をした結果、10タイプからみることができ、もっとも多いのは、

○開壙部の平面形が、両端方形基調であり長軸断面が直に立ち上がり短軸断面がV字状を呈するもの。（9基……第2・5・15・16・23・24・28・29・31号土壙）

○次に多いのが、開壙部平面形が、両端まるみをおび、長軸断面が両端上方より下底部へ抉り込まれたもので短軸断面がY字状を呈するもの（5基）となっている。

占地と分布の状態：（第3図）調査区の北部平坦面と、北部から中央部にかけての南緩斜面、それに南部の平坦面に比較的集中して検出された。これらは、穿壙された方向、配列、微地形、等高線との関係、土壙の形態的な特徴等から、いくつかにグルーピング出来そうであるが、現段階では明確でない。

土壙の構築時期：占地と分布にひとつの傾向性が、うかがわれるとしても、各土壙は、全く単独で検出され、他遺構との重複関係や、伴出遺物が皆無である事実より、構築時期を知る手がかりに欠けている。ただ、同様の形態を有する溝状土壙群を検出した周辺遺跡の大緩遺跡、高屋敷遺跡にあって、僅かな伴出遺物から縄文時代のものと想定され、更に都南村湯沢遺跡の調査によって、同様の形態を有する土壙が170基も検出され、しかもこれらは、住居跡群やフ

ラスコ形ピット・ビーカー形ピットとの重複関係を多くもつことの中から、その新旧関係が把握され、縄文中期末～後期初頭に属するものと判明されている。これらを勘案して当遺構の溝状土壙群の構築時期を想定した場合に、近隣から検出した縄文土器（後～晩期）片が、これらを解明するひとつの鍵となると考えられる。

土壙の性格：溝状土壙は、岩手県内では昭和48年、北上市相去遺跡において発見されて以来東北縦貫自動車道・新幹線、一般公共事業等に伴なう遺跡の発掘調査によって、現在では約50遺跡から800 基におよぶ検出がなされている。

当初、これらは土師器使用の集落跡から検出される場合が多く、したがって、それらに伴う遺構と考えられるようになり形態から想像してトイレ的なものではないかと思われてもきたが、埋土下層よりの伴出遺物が皆無で、築営時期や、その機能については、全く謎とされてきた。

しかし、近年調査例が増加するにつれて、他の遺構との重複関係から、土師器使用の住居跡よりは一様に古いことが判明した。これらは、その形態から「Ｖ字状溝」・「Ｖ字形溝状遺構」・「溝状遺構」などと仮称されてきたものである。

一方、県外においても大規模開発に伴う遺跡調査の増加から、関東以北、特に東北、北海道でも、全く同様の形態を有する土壙が多数群在する形で検出されるようになり、これらの検討もすすめられて、現在では今村啓爾等民俗学のグループから提唱された、けものの陥穴説が最も有力視されるようになり、意見の大勢を占めている。

名称も、その性格を規定した「Ｔ（トラップ）ピット」（函館空港・札幌市報告書等）・「陥し穴状遺構」（岩手県湯沢遺跡報告書）等が使用されるようになっている。

当遺跡の溝状土壙群についても、集落を離れた丘陵性台地の南緩斜面を広範に利用して築営していることから、トイレ説は消えるし、直接生活をささえた、けものの陥穴説を否定する積極的な理由は、なにものもみあたらない。むしろ、構築形態、分布状態等を考慮すると狩猟施設としての陥穴機能をもった土壙と考えるのが妥当なところと思われる。

2　ま　と　め

調査の結果を要約すると

(1)　広域な範囲にわたって調査を実施したにもかかわらず、住居跡等から構成される集落はみあたらず、検出遺構は、溝状土壙群とビーカー形土壙に限られている。

(2)　調査区全域から、出土した遺物は非常にすくなく、しかも散在した状態で検出された。主なものは、縄文土器（後・晩期）の細片若干である。

(3)　土壙群は、いずれも単独で検出され重複関係はない。伴出遺物も皆無である。

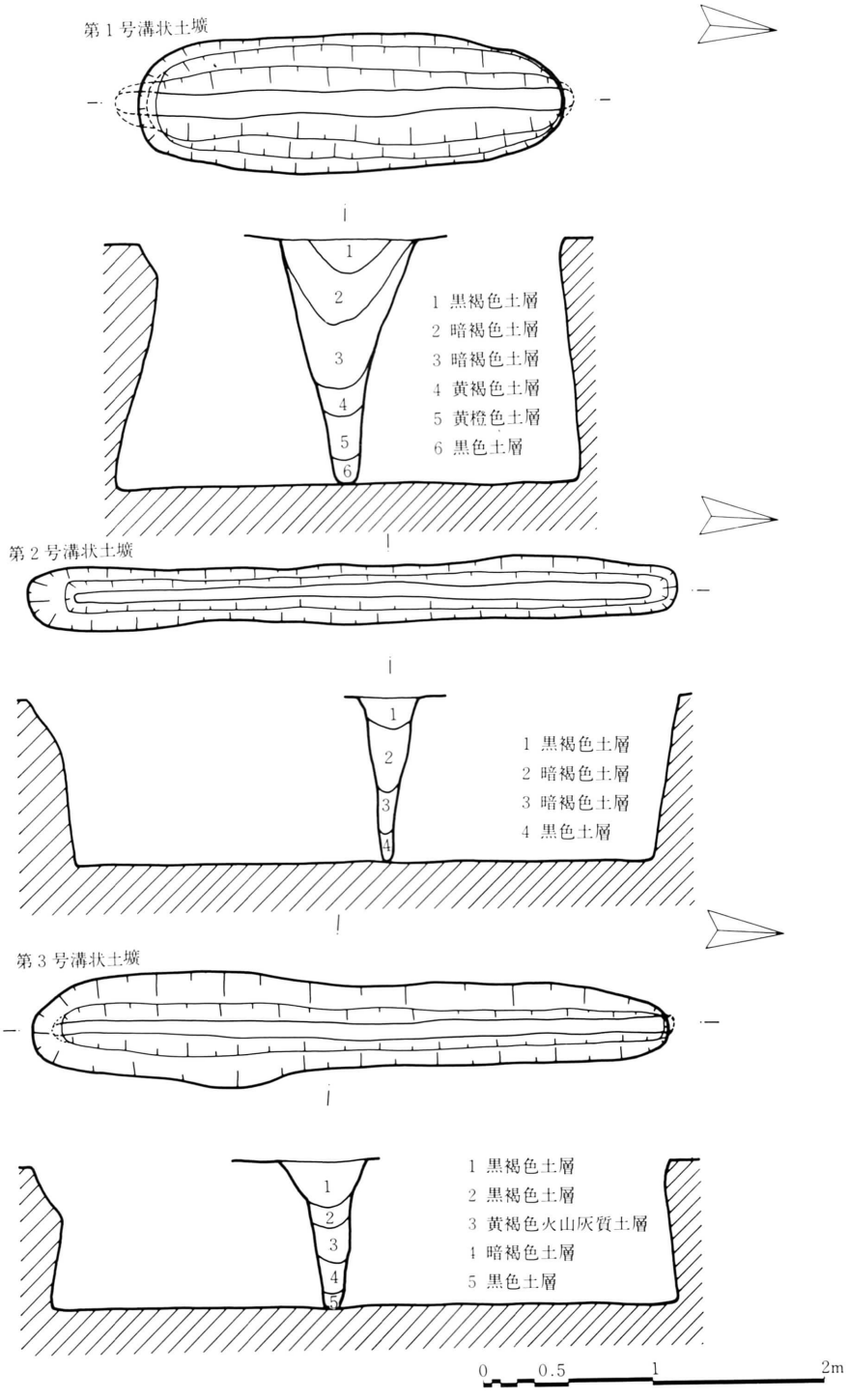
(4)　土壙群の埋土は、いずれも開壙部からの流れ込みと、側壁の崩落土の混入等による自然堆積である。人為的に一気に埋めたという痕跡は認められない。

(5) 広域に散在する土壙間の分布状態に、意図的な相関関係が予想される。

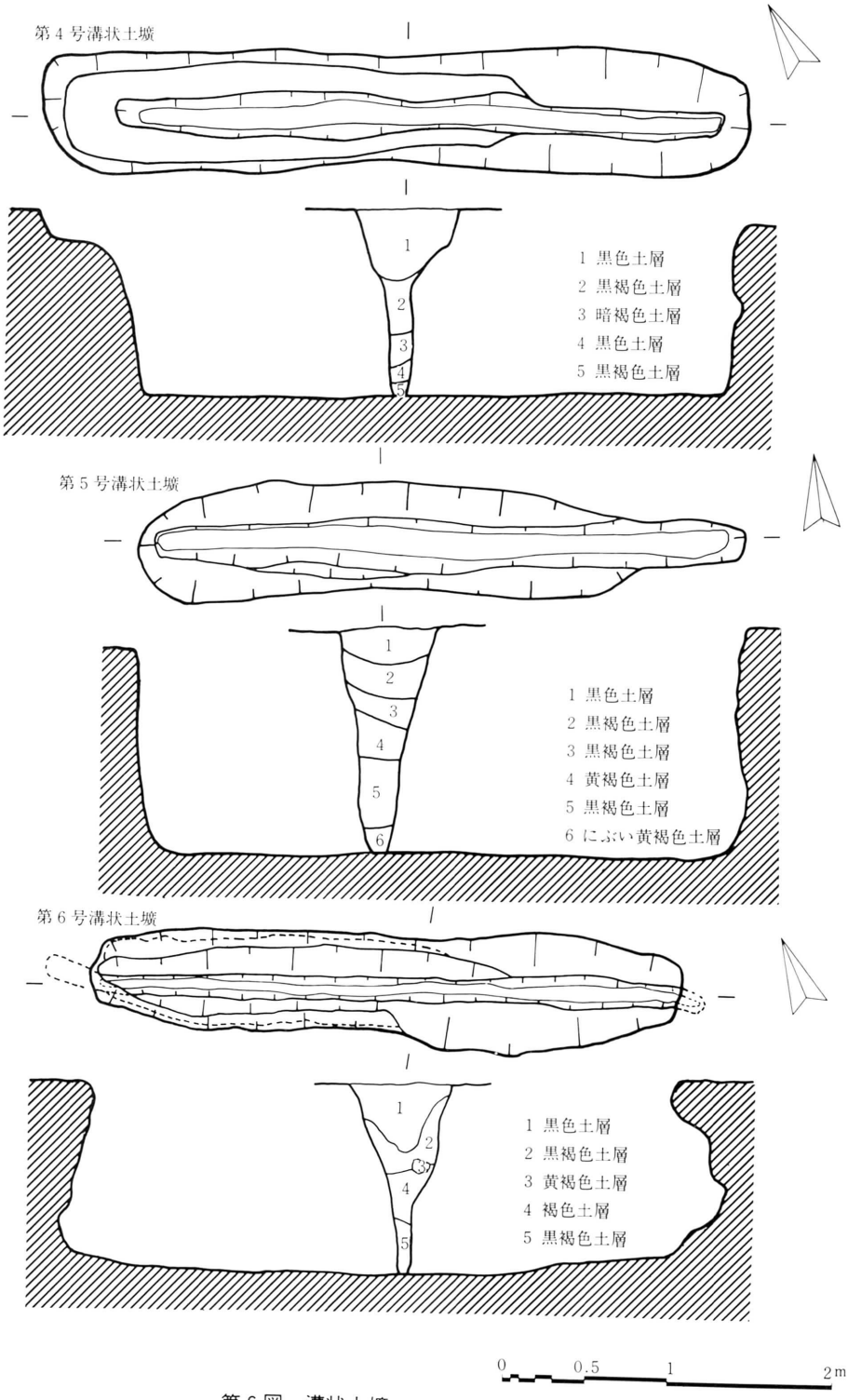
(6) 溝状土壙は、縄文時代の陥し穴（狩猟施設）としての機能を有するものと想定される。

(7) 上記より勘案して、調査区は、定住的な集落の場ではなくて、縄文時代の「狩猟の場」としての生活領域と考えられる。

以上、当遺跡は、縄文時代の狩猟形態を知るひとつの手がかりと、居住区と狩場等、その行動範囲などを知る生活領域にかかる多くの課題を示唆している。

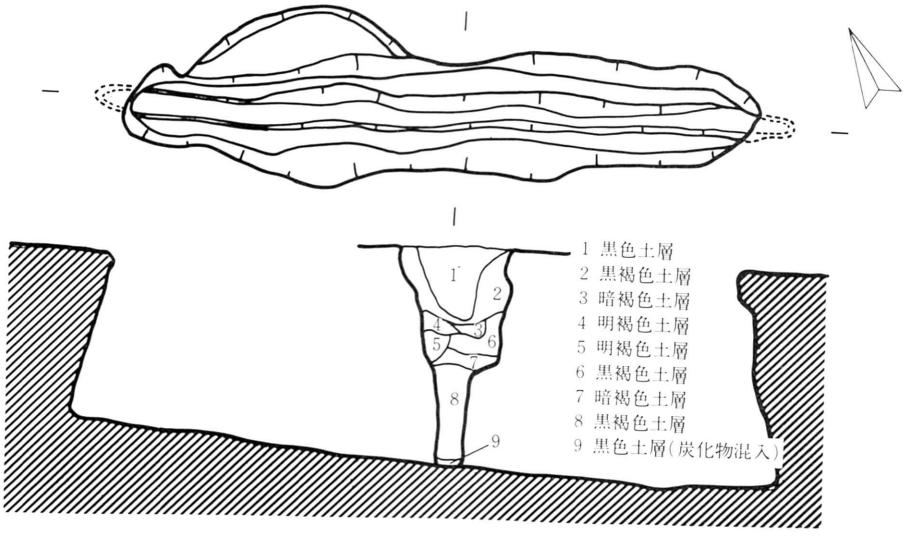

第1号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 暗褐色土層
3 暗褐色土層
4 黄褐色土層
5 黄橙色土層
6 黒色土層
第2号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 暗褐色土層
3 暗褐色土層
4 黒色土層
第3号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 黒褐色土層
3 黄褐色火山灰質土層
4 暗褐色土層
5 黒色土層
0
0.5
1
2m

第5図　溝状土壙

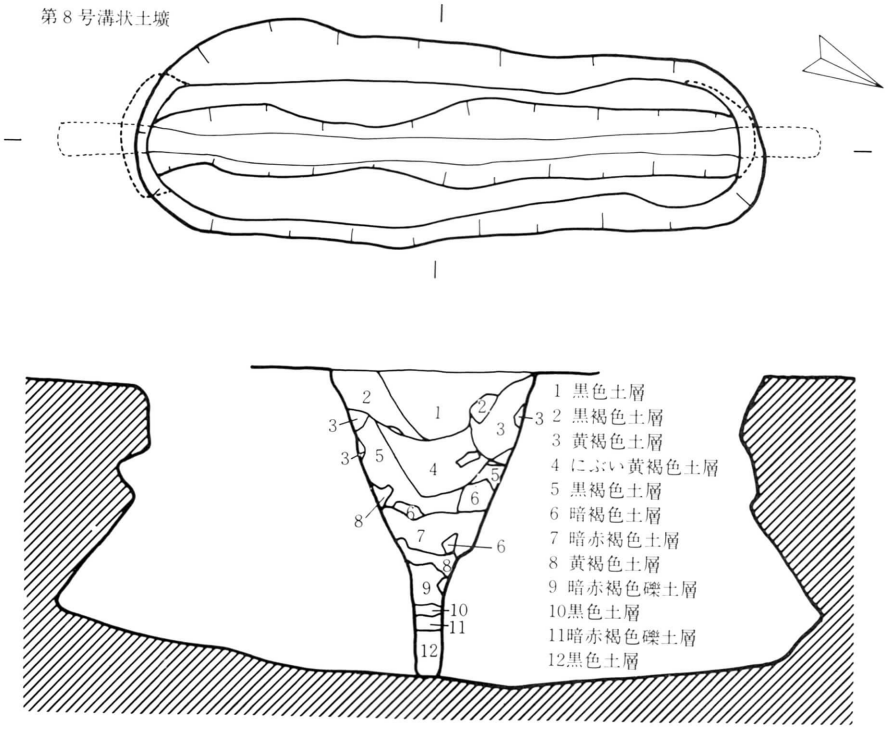

第4号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層
4 黒色土層
5 黒褐色土層
第5号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 黒褐色土層
4 黄褐色土層
5 黒褐色土層
6 にぶい黄褐色土層
第6号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 黄褐色土層
4 褐色土層
5 黒褐色土層
0
0.5
1
2m

第6図　溝状土壙

第７号溝状土壙

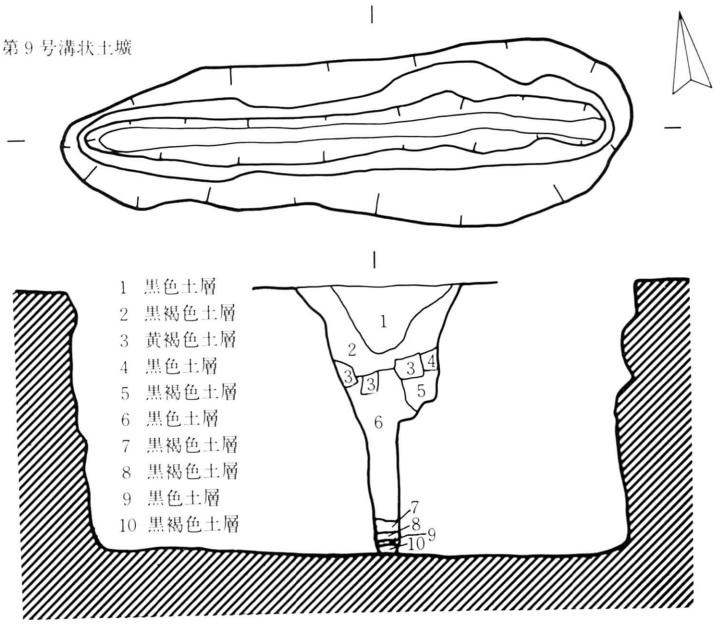


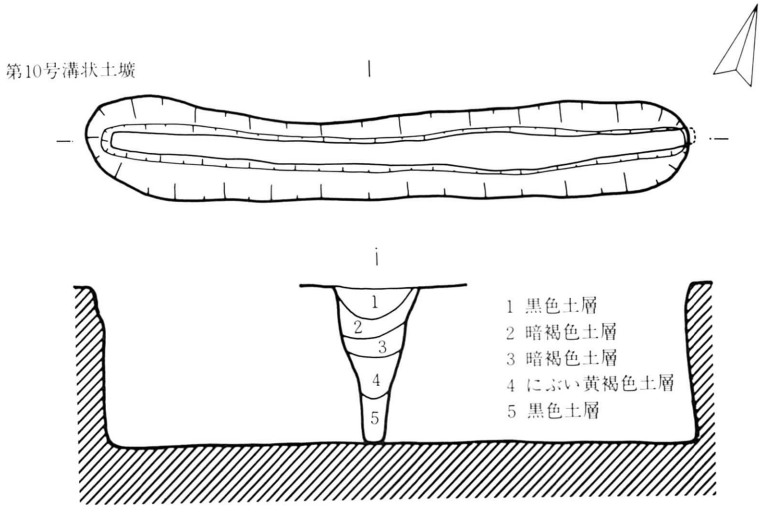
第８号溝状土壙



第７図　溝状土壙

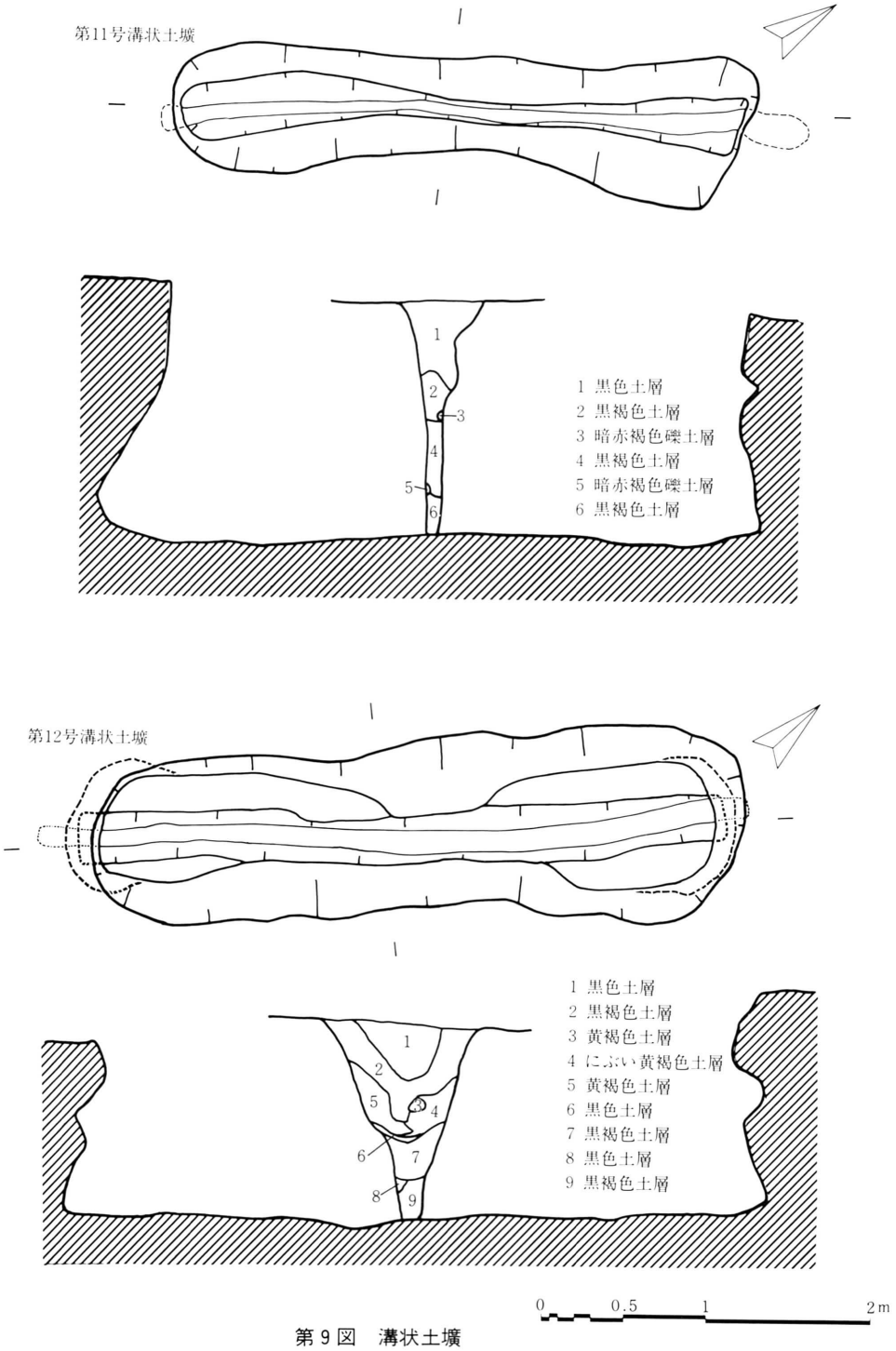
0　0.5　1　1m



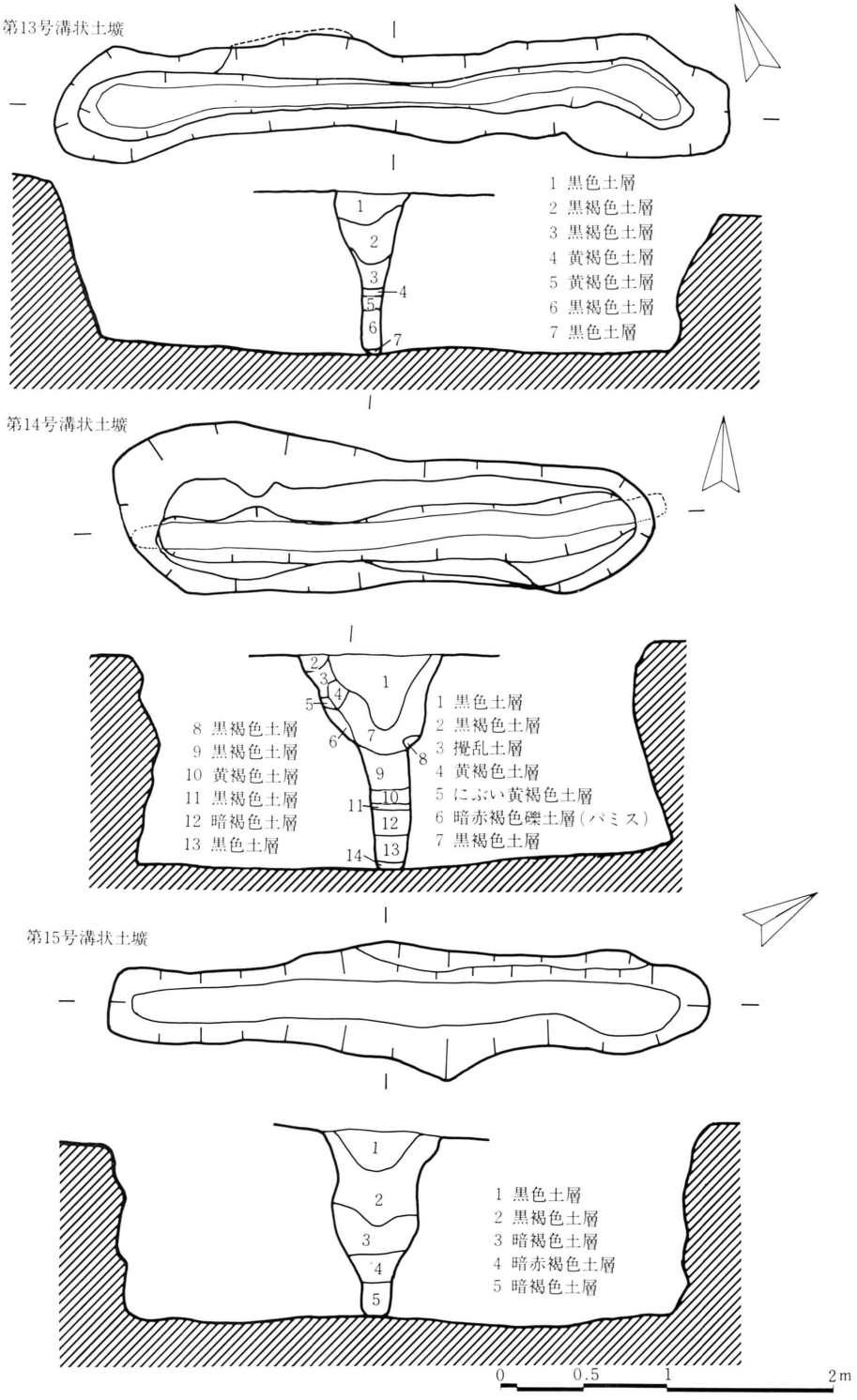


第8図　溝状土壙

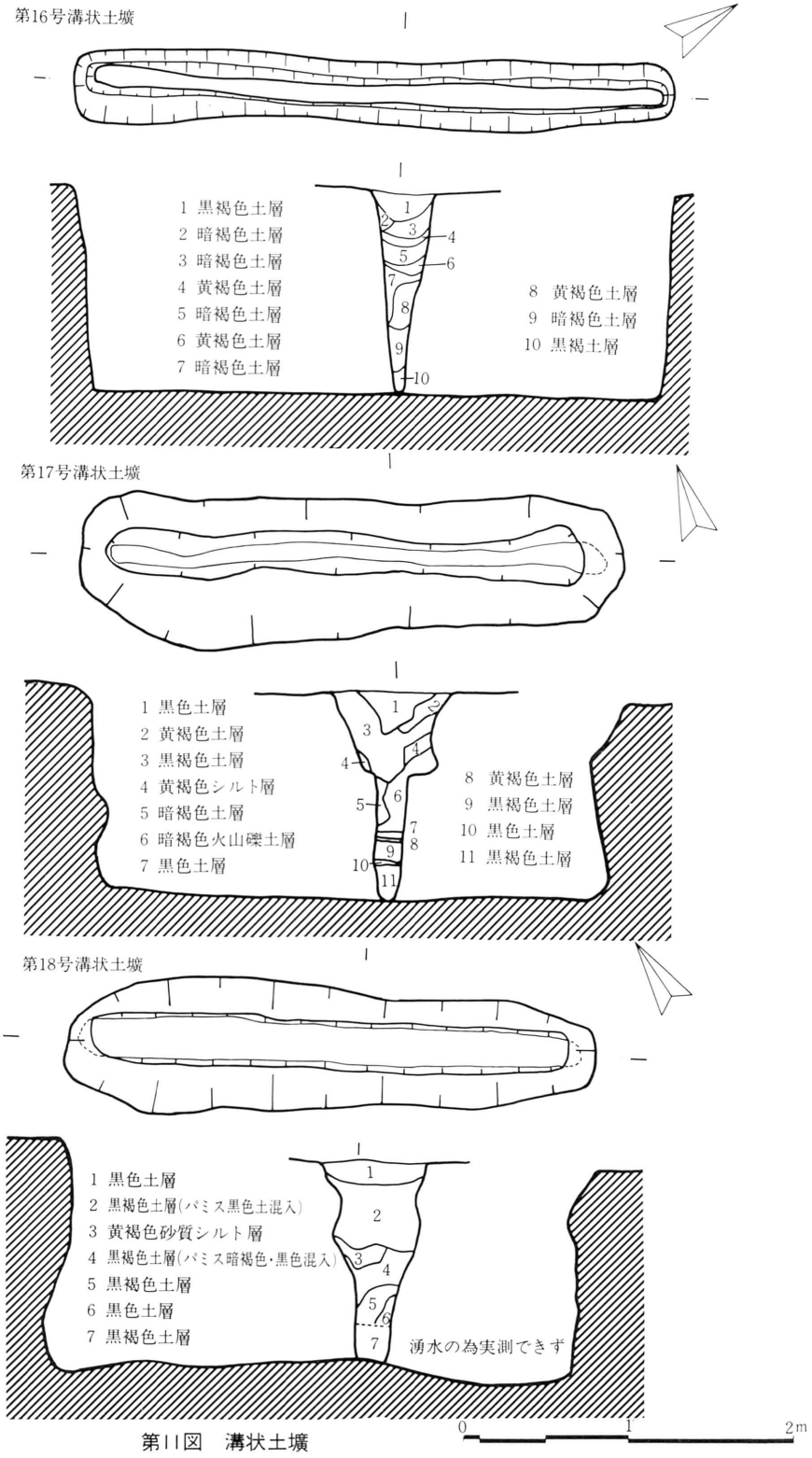
0　0.5　1　2m


第11号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 暗赤褐色礫土層
4 黒褐色土層
5 暗赤褐色礫土層
6 黒褐色土層
第12号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 黄褐色土層
4 にぶい黄褐色土層
5 黄褐色土層
6 黒色土層
7 黒褐色土層
8 黒色土層
9 黒褐色土層
0
0.5
1
2m

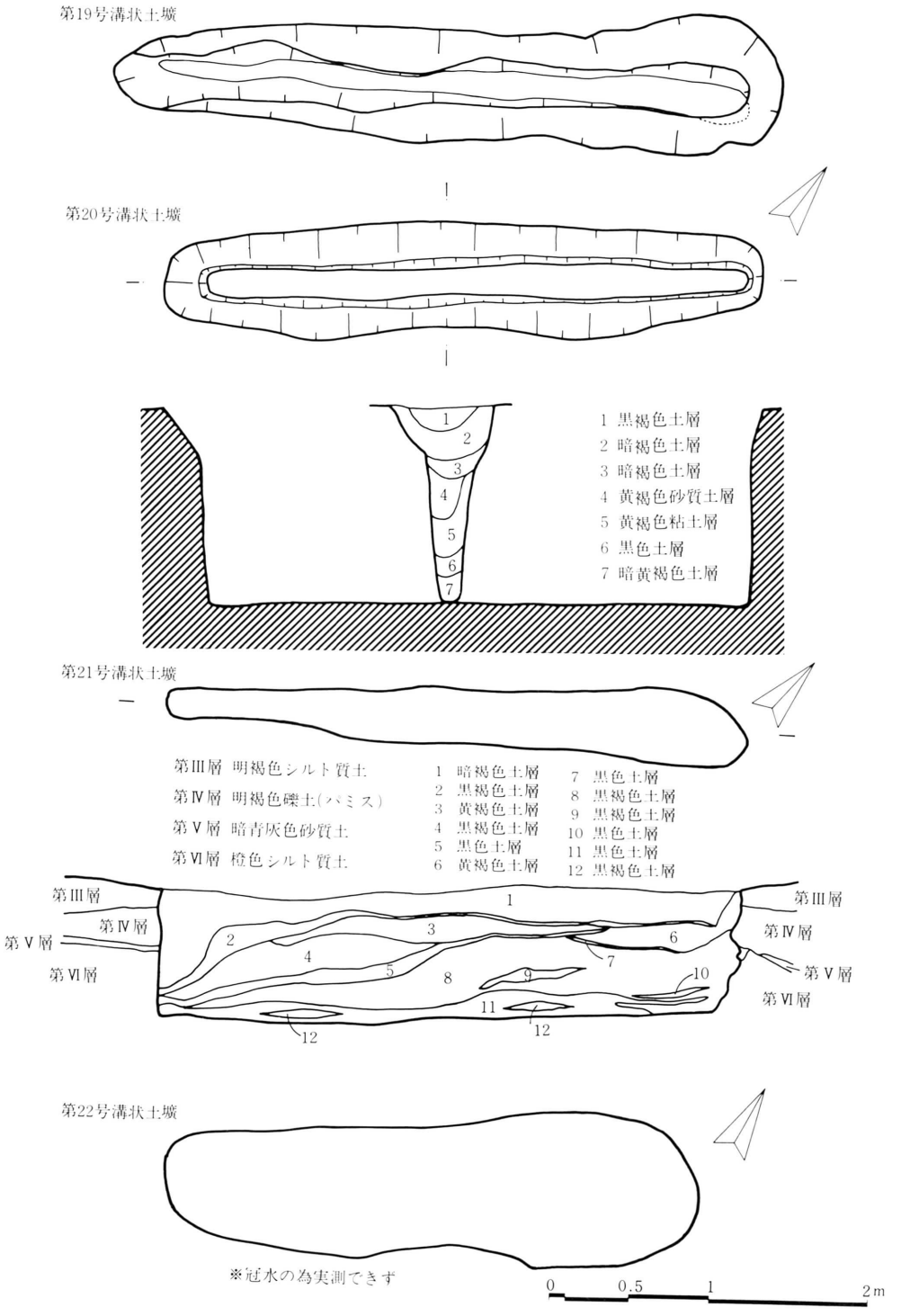
第9図　溝状土壙


第13号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 黒褐色土層
4 黄褐色土層
5 黄褐色土層
6 黒褐色土層
7 黒色土層
第14号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 撹乱土層
4 黄褐色土層
5 にぶい黄褐色土層
6 暗赤褐色礫土層(パミス)
7 黒褐色土層
8 黒褐色土層
9 黒褐色土層
10 黄褐色土層
11 黒褐色土層
12 暗褐色土層
13 黒色土層
第15号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層
4 暗赤褐色土層
5 暗褐色土層
0
0.5
1
2m

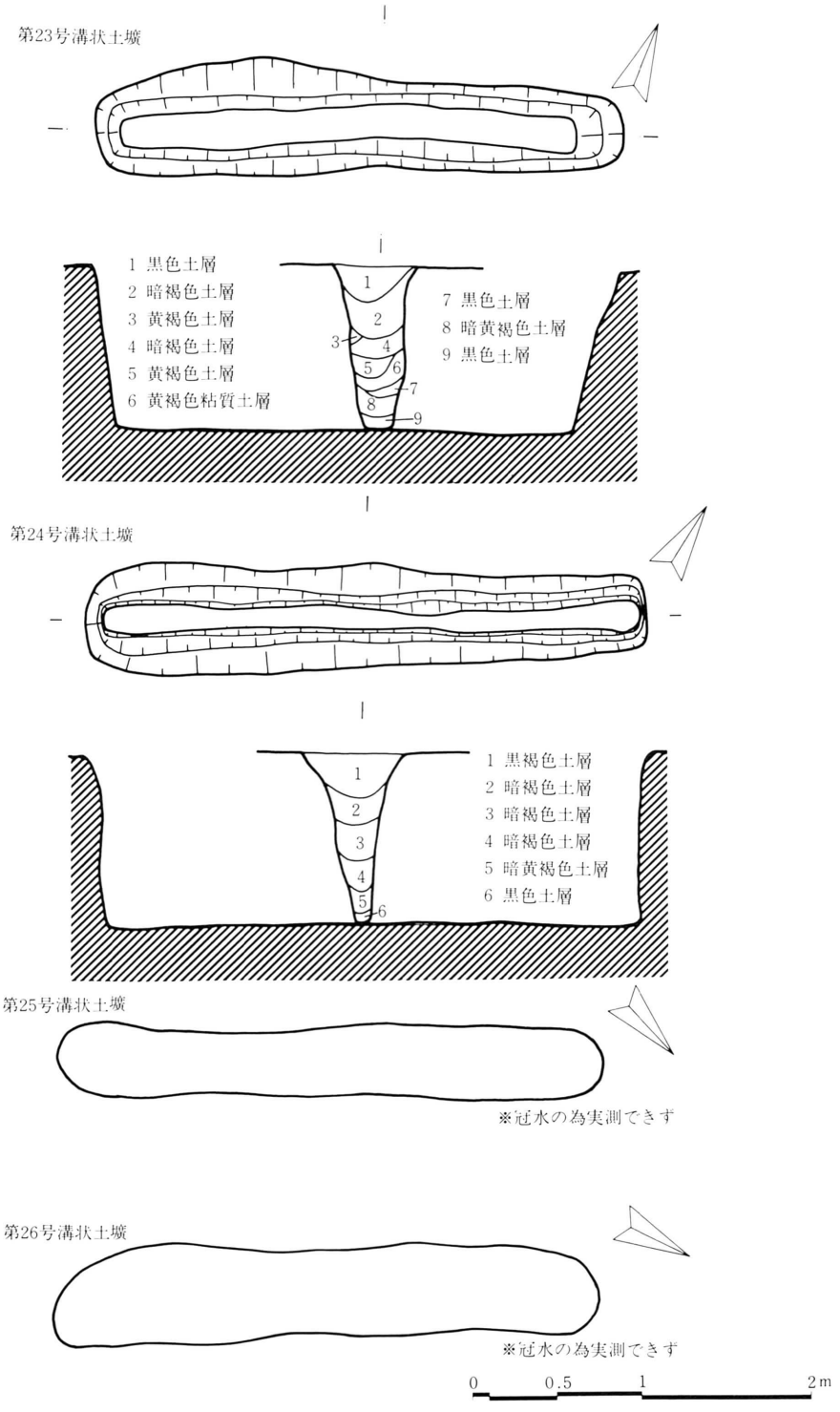
第10図　溝状土壙


第16号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 暗褐色土層
3 暗褐色土層
4 黄褐色土層
5 暗褐色土層
6 黄褐色土層
7 暗褐色土層
8 黄褐色土層
9 暗褐色土層
10 黒褐土層
第17号溝状土壙
1 黒色土層
2 黄褐色土層
3 黒褐色土層
4 黄褐色シルト層
5 暗褐色土層
6 暗褐色火山礫土層
7 黒色土層
8 黄褐色土層
9 黒褐色土層
10 黒色土層
11 黒褐色土層
第18号溝状土壙
1 黒色土層
2 黒褐色土層(パミス黒色土混入)
3 黄褐色砂質シルト層
4 黒褐色土層(パミス暗褐色・黒色混入)
5 黒褐色土層
6 黒色土層
7 黒褐色土層
湧水の為実測できず
0
1
2m

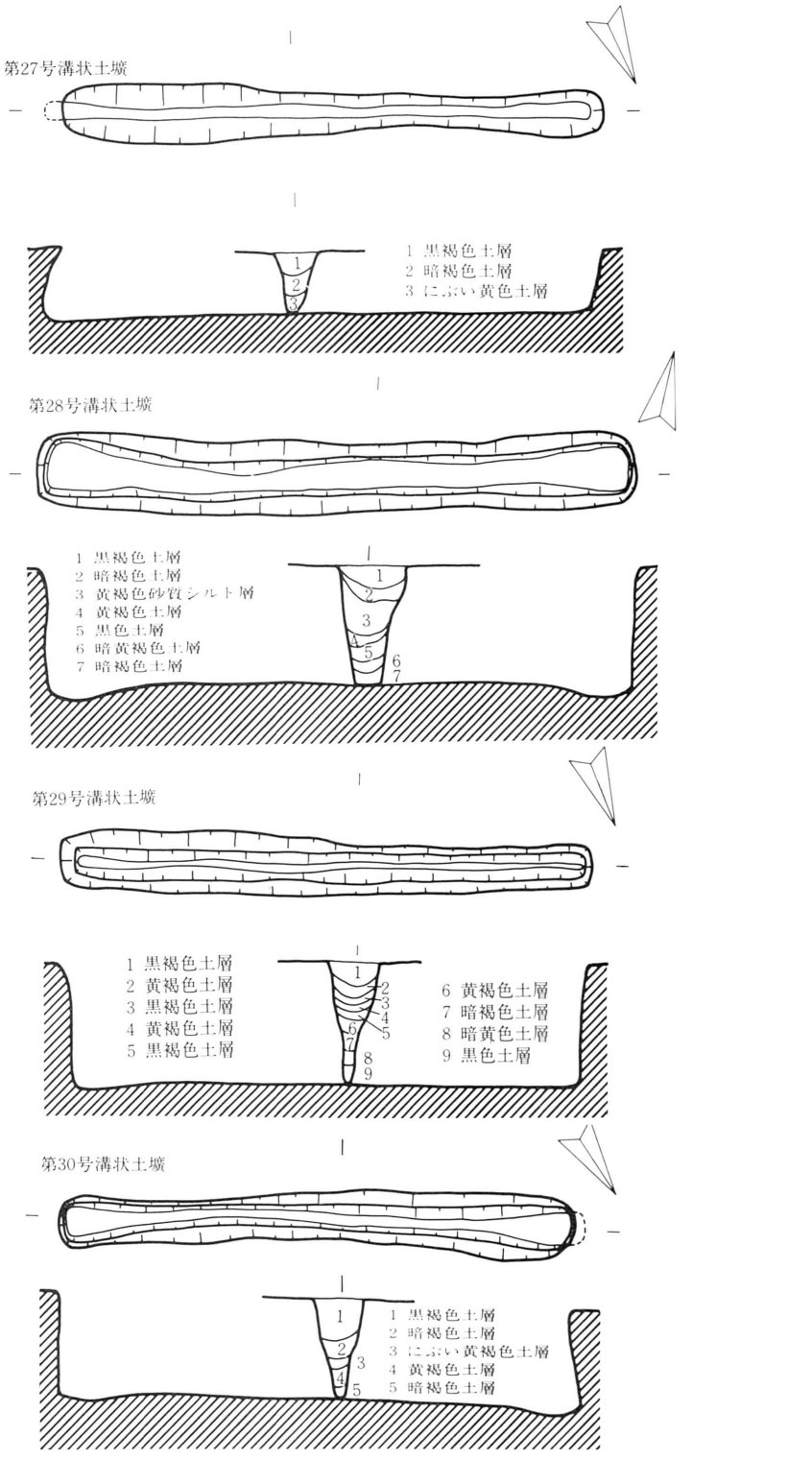
第11図　溝状土壙


第19号溝状土壙
第20号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 暗褐色土層
3 暗褐色土層
4 黄褐色砂質土層
5 黄褐色粘土層
6 黒色土層
7 暗黄褐色土層
第21号溝状土壙
第Ⅲ層 明褐色シルト質土
第Ⅳ層 明褐色礫土(ハミス)
第Ⅴ層 暗青灰色砂質土
第Ⅵ層 橙色シルト質土
1 暗褐色土層
2 黒褐色土層
3 黄褐色土層
4 黒褐色土層
5 黒色土層
6 黄褐色土層
7 黒色土層
8 黒褐色土層
9 黒褐色土層
10 黒色土層
11 黒色土層
12 黒褐色土層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層
第Ⅵ層
第22号溝状土壙
※冠水の為実測できず
0
0.5
1
2m

第12図　溝状土壙

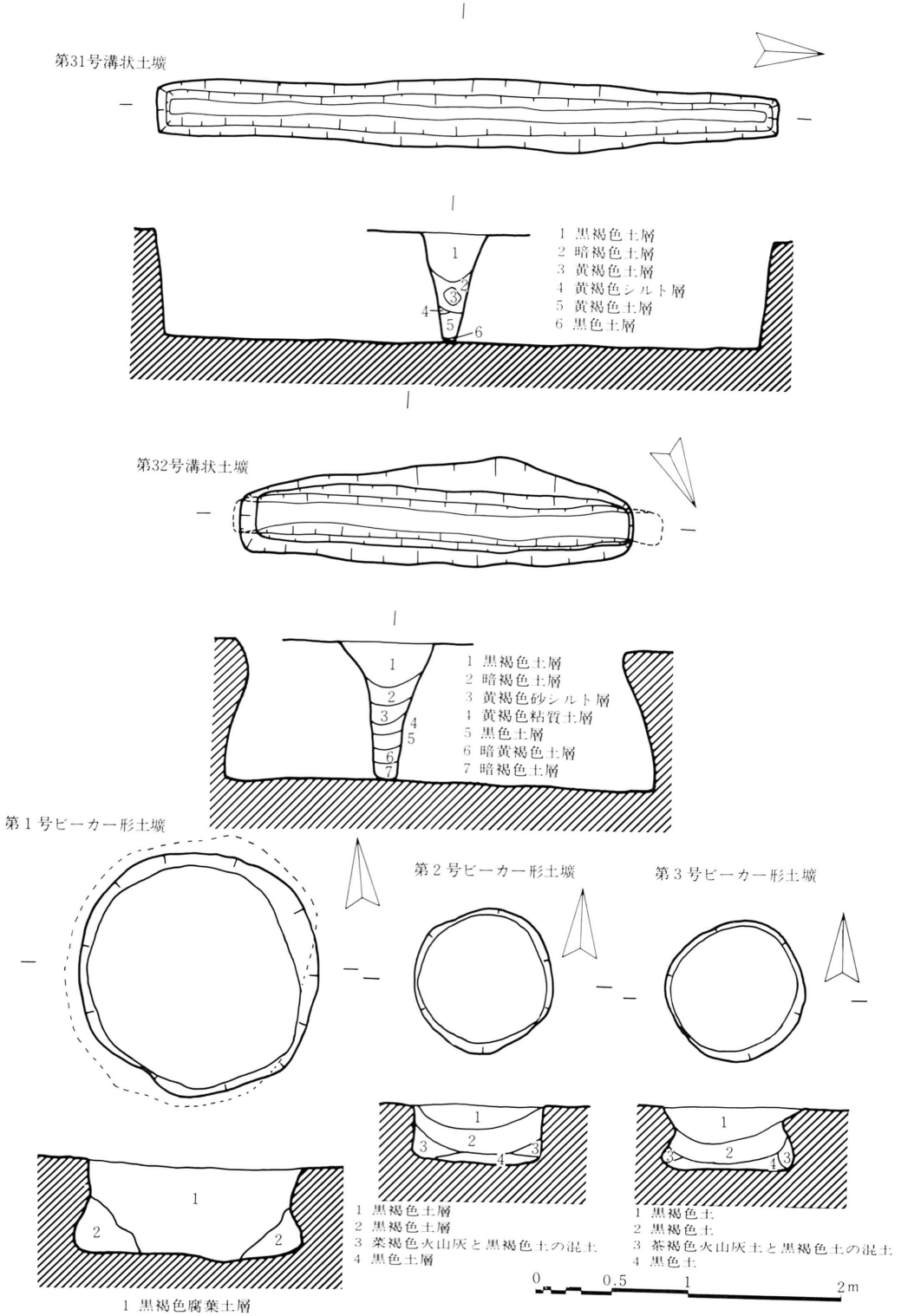

第23号溝状土壙
1 黒色土層
2 暗褐色土層
3 黄褐色土層
4 暗褐色土層
5 黄褐色土層
6 黄褐色粘質土層
7 黒色土層
8 暗黄褐色土層
9 黒色土層
第24号溝状土壙
1 黒褐色土層
2 暗褐色土層
3 暗褐色土層
4 暗褐色土層
5 暗黄褐色土層
6 黒色土層
第25号溝状土壙
※冠水の為実測できず
第26号溝状土壙
※冠水の為実測できず
0
0.5
1
2m

第13図　溝状土壙

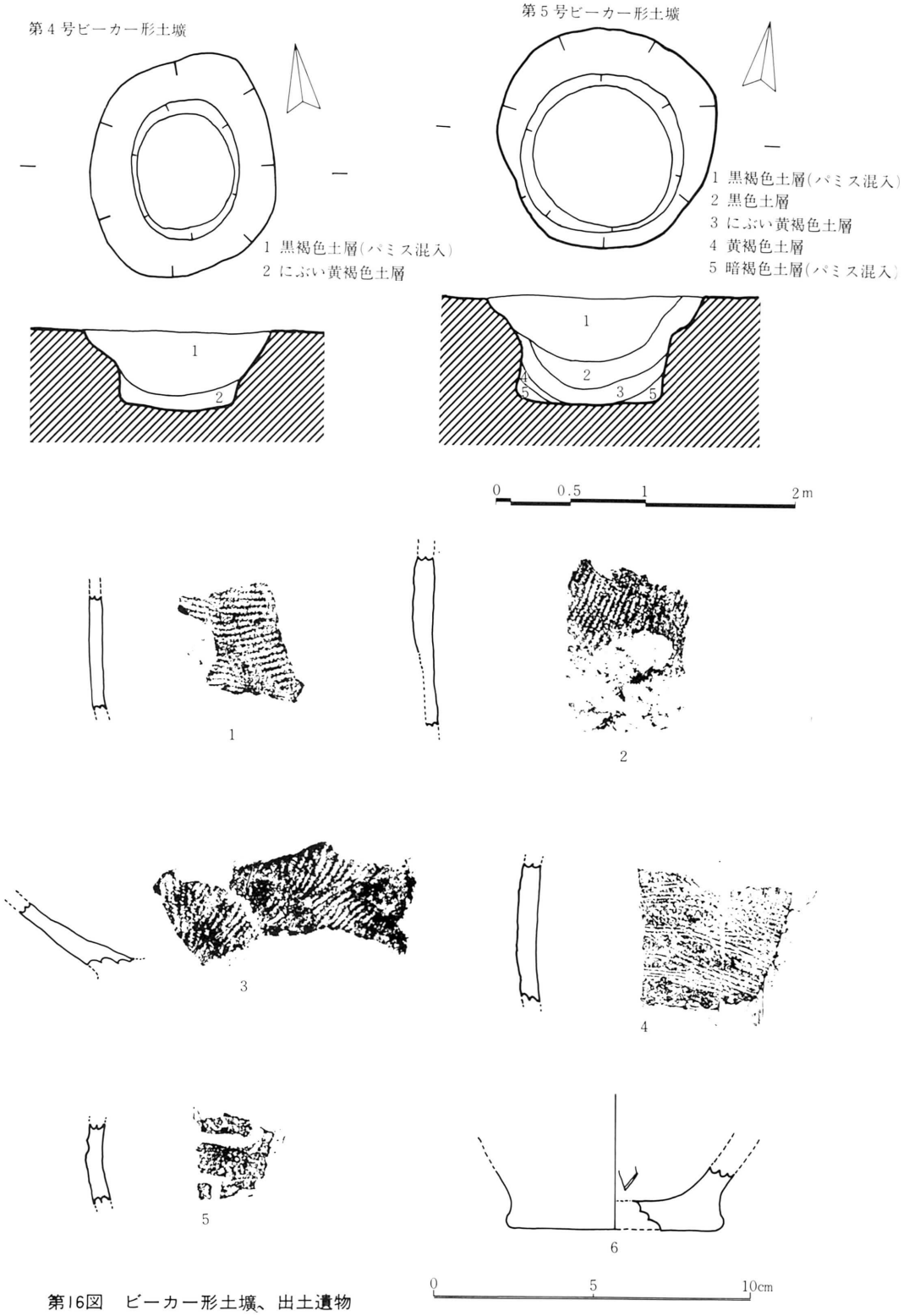


第14図　溝状土壙

0　0.5　1　2m



第15図　溝状土壙、ビーカー形土壙



第16図　ビーカー形土壙、出土遺物

幅（はば）　遺　跡

遺　跡　名：幅(略号HB76)
所　在　地：盛岡市上厨川字下村107番地 他
調 査 期 間：昭和51(1976)年7月19日～10月30日
調査対象面積：12,800㎡
発掘調査面積：7,614㎡

133.5
133.1
133.4
133.2
133.0
133.6
132.9
132.8
133.1
133.4
133.3
133.6
133.6
134.6
133.8
134.1
133.8
133.6
133.9
134.2
133.4
133.5
133.5
131.6
131.4
131.5
131.5
131.1
0
500
1000m

第１図　グリッド配置図

Ⅰ　遺跡の位置と立地（第1図、図版1－1）

調査地は盛岡市上厨川字下村107番地～平賀新田字平賀35－2に所在する。西方には標高380m前後の第三紀安山岩よりなる山地がそびえ、さらにその西側には小岩井農場のある盆状地がある。山地の東南には低平な丘陵性台地群が発達する。台地群のさらに東南方には盛岡段丘面が連続し、調査地はこれにのり、標高133m前後である。調査地の南限は段丘崖線である。段丘面と崖下の旧氾濫原この比高は約2m前後で、南方0.75km付近を雫石川が東流する。盛岡段丘面上には大舘・大舘堤・大舘町・大新・厨川柵擬定地その地の各期の遺跡が立地する。また前記西方山地の山麓・丘陵性台地群上にも、滝沢村外久保を代表とする集落址を含む各種の――縄文早期末～前期初頭、中・後・晩期、古代等――の遺跡群が濃密に分布する。なお昭和53年にフラスコ状ピット他が検出された清水沢遺跡は、本来的に外久保遺跡に包括されると考えてよい。

Ⅱ　層序と土質（第2図）

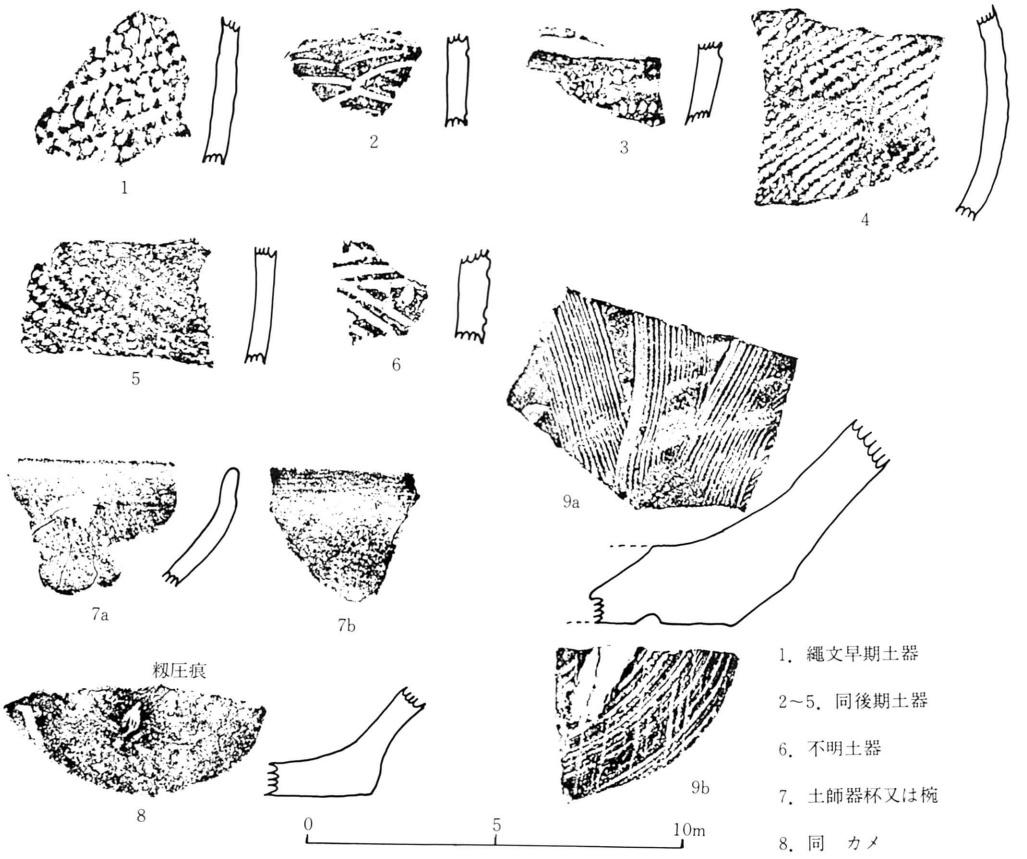
中川久夫氏らによると、雫石川付近よりも北の丘陵性台地および河岸段丘上には厚い火山拠出物層が発達する。これらは二戸面をおおうものを別として、層序および分布地域からおよそ四群にわけることができ、丘陵性台地ではそれらの下位の安山岩質角礫凝灰岩ないし火山岩塊が露出する。火山拠出物は古期のものから順に、(1)大石渡火山角礫岩、(2)渋民火山灰、(3)分火山灰、(4)一本木火山礫に大別される、とのことである。これらをふまえて調査地の層序と土質をみると第2図のようになる。

m	Ⅰa	Ⅰa	10YR 3/2	暗褐色土、耕作土	クロボク様土、各期の遺物を含む。
0.6	b	b	10YR 3/3	暗褐色土、火山灰起原の本来の表土。上面が遺構検出面	
	Ⅱa	Ⅱa	10YR 6/4	にぶい黄橙色	浮　石
0.5	b	b	〃	にぶい黄橙色、鉄分やや顕著	
	c	c	10YR 5/1	褐色、上下限に鉄分集積	
	Ⅲa	Ⅲa	7.5YR 7/8	黄橙色	粘　土
1.2	b	b	7.5YR 7/1	明灰褐色	
	c	c	〃	明灰褐色、鉄分やや含有	
0.2	Ⅳ	Ⅳ	10YR 5/6	黄褐色	砂
	Ⅴ	Ⅴ	礫	人頭大を含む	礫　層

第2図　層序模式図

以上のⅠ・Ⅱ層は分火山灰に相当するものと考えられる。ただし、佐藤二郎氏によばれ、従

来分火山灰といわれてきたものは低位の盛岡段丘にはのらず、より古期のものにのり、その名称も生出野(おいでの)火山灰がふさわしい、とのことであるが、ここでは一応従来の知見に従がっておく。



1. 縄文早期土器
2～5. 同後期土器
6. 不明土器
7. 土師器杯又は椀
8. 同　カメ
9. 擂鉢

第3図　出土土器類拓影図

HB76　幅出土遺物拓影図説明

図版番号	実測図番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	3－1	Hij65	Ⅰ	深鉢	体	明茶褐色	LR<1/1→	暗茶褐色	ナデかミガキ	普通	茶褐色	有	石英ありて粗	縄文早期末前期初
4－1	3－2	Ee71	〃	鉢？	〃	灰褐色	LR<1/1→沈線、ミガキ、磨消入組文	淡茶褐色	同上、膜状剥落	不良	淡茶褐色	／	石英、小石ありて粗	後期？
	3－3	Gb03	〃	〃	〃	茶褐色	LR<1/1→沈線、ミガキ	〃	同上	良好	茶褐色	／	同上	〃
4－1	3－4	Gcd06	〃	壺？	〃	灰乳色	LR<1/1→	乳色	ナデかミガキ	〃	灰色	／	〃	〃
	3－5	Gb03	〃	深鉢？	〃	明茶褐色	LR<1/1→	暗茶褐色	ミガキ？煤あり	〃	内－極暗褐色 外－茶褐色	／	〃	〃
	3－6	溝Hh	下位	鉢？	〃	〃	沈線、ミガキ	灰褐色	ナデかミガキ	普通	暗褐色	／	英粒ありて粗	不明
4－1	3－7	溝Hj～Ia	上位	杯？	口	灰乳色	ヨコナデ	灰乳色	ヨコナデ	良好	灰色	／	小石ありて粗	
4－1	3－8	Eab27	Ⅰ	甕	底	淡黄褐色	ハケメのちミガキ	肌色	ハケメ	普通	肌色	／	石英粒ありて粗	ロクロ不使用土師器
4－1	3－9	溝Hc	上位	擂鉢	〃	灰色	ロクロナデ	灰色	条線帯	良好	灰色	／	小石含み粗	須恵質、中世か

Ⅲ　発見した遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の土器・石器類若干、古代の竪穴住居跡１とその遺物、中世と思われる土器片、明治時代と思われる溝２と陶磁器・獣骨・銭貨類を検出した。以下時代順に記す。

１　縄文時代の遺物

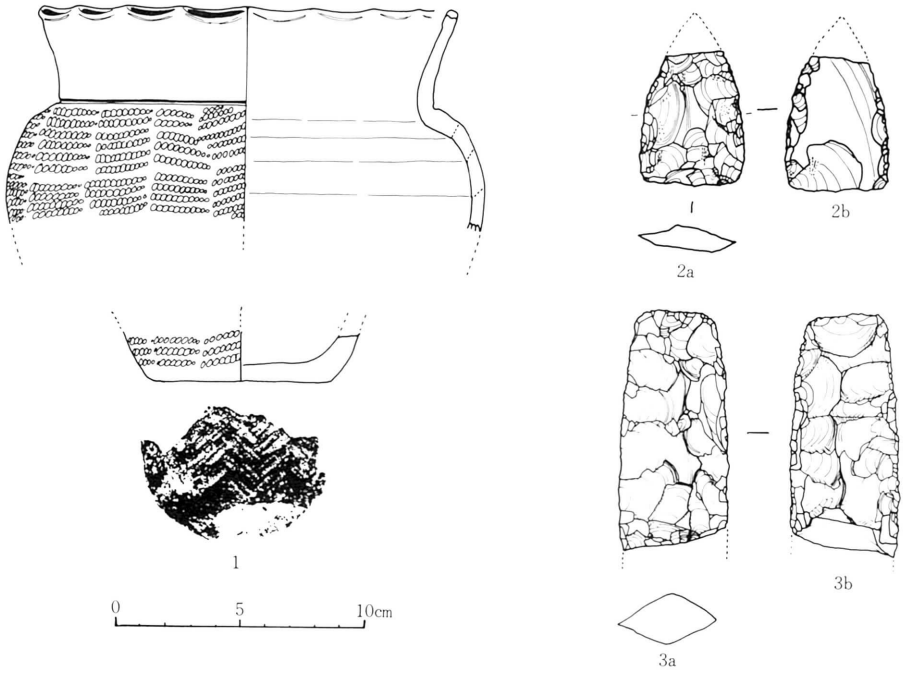
遺構とそれ関連の遺物は検出されず、土器・石器ともにⅠ層ないし近世の溝の覆土中より検出された。

土器（第３・４図，図版４の１）

ⓐ早期末ないし前期初頭と思われるもの（第３図１）。胎土に繊維を含み、器表面に太目の単節斜縄文を付す。盛岡市内には大舘堤・大舘町・一本松熊の沢（いっぽんまつくま さわ）に類例が、近隣の滝沢村高屋（たかや）敷（しき）他に類例がある。早稲田Ⅴ類あるいはそれ以降に相当するものと思われる。

ⓑ後期と思われるもの（第３図２～５）。やや疑問はあるが、沈線・ミガキ・縄文の組みあわせによる入組文的磨消縄文を有すること、多孔質の器面を有することなどから、一応後期初頭頃のものと考えておく。

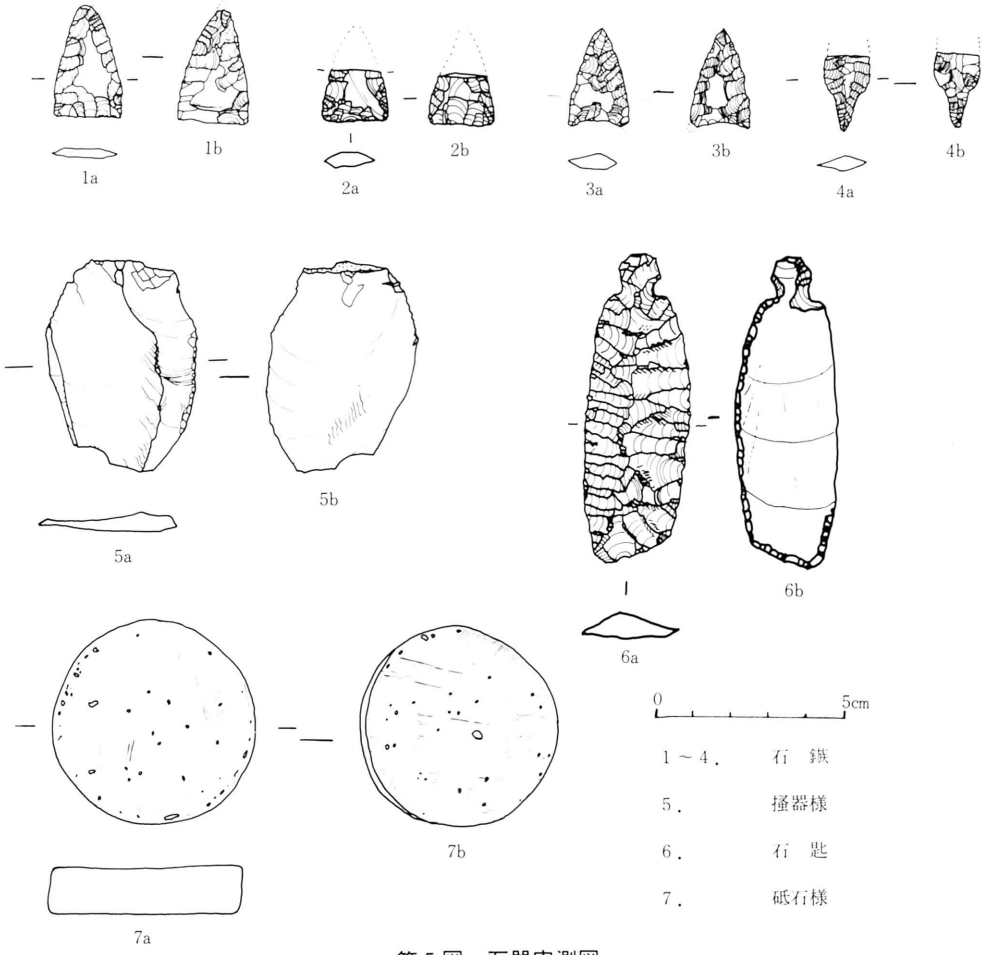
ⓒ晩期と思われるもの（第４図１）。中形の甕形土器一個体分である。張り出した肩部と外反する小波状口縁、凹みのある口唇部をもつことから、大洞Ａ′式相当とみなした。底部表面に網代痕が見られる。



第４図　縄文式土器・石箆状石器実測図

石　器

石鏃４、石箆状２、掻器状１、石匙１、剥片他若干を得た。説明においては、主要剥離面が明白なものについてはそれを背面、他面を片面と呼び、両面加工は適宜呼びわけている。



第５図　石器実測図

剥離の順序は、左半部から右半部へのものが多い。早期末～前期初頭のものが大半を占めると思われる。

ⓐ石鏃（第５図１～４、図版４の４～７）。二種ある。

(ア)いわゆる無茎式のもの。基部が直線的なものと、若干内湾するものとがある。両面ともにトリミング的剥離にとどめ、中央部を平坦なままに残す。これは早～前期の特徴であろう。

(イ)いわゆる有茎式のもの。半欠品である。両面加工が施こされ、断面は菱形に近い。晩期にまで下がる可能性があろう。

ⓑ石箆状石器（第４図２・３、図版４の２・３）。二種あるがいずれも半欠品である。

(ア)平面形が扁桃形になると思われる。剥離は片面は全面に、背面には二側縁にのみ施こされるらしい。横長剥片を用い、断面は三角形である。青森県ムシリ遺跡などにおいて銛状剥片石器と呼ばれているものに近いと思われる。

(イ)いわゆる撥形のもの。両面に粗な剥離が加えられ、断面は菱形をなす。

ⓒ掻器状石器（第5図5・図版5の1）。剥離が部分的であり、削器ないし剥片利用の不定形石器とした方が妥当かとも思うが、一応こう呼ぶ。縦長で断面三角形の剥片の一側縁にのみ刃部を付す。加撃点にはコーティングが残存し、非調整打面である。

ⓓ石匙（第5図6・図版5の2）。いわゆる縦形で、片面は押圧剥離によりパラレル・フレイキングに近い入念な加工が施こされ、背面はつまみ全周縁・左側縁・下底縁・右側縁下方などがトリミングされる。素材は断面三角形の縦長剥片で、加撃点は全面剥離される。

ま と め

(1)縄文時代に属する遺構を検出しえなかったことについては既にふれた。この解釈については遺構の残存状況の要素もあり即断はできないが「キャンプサイト的な短期間の遺跡」である可能性はあろう。その場合生活の本拠たる集落は西方の山麓、丘陵性台地群上あるいは東方の大舘付近に存在する可能性が高い。ただし前記の想定地と本調査地の間にはいくつかの異なる水系その他も存在し、今後は「集団領域論」的観点を導入するなどして、総合的な把握に努めねばならない。そのための一資料として、本調査例を提示することとする。

(2)石材の鑑定結果によると、黒色粘板岩の剥片の中には奥羽山地産出の可能性のあるものも存在するとのことであり、該期の「交易圏」復元への一資料とすることもできよう。

HB76　幅出土石器類一覧

図版番号	実測図番号	出土地点	出土層位	種別	タイプ	概況	最大長 cm			重量g	材質	その他
							たて	よこ	あつさ			
4－6	5－1	溝No31	中位	石鏃	無茎	完全	3.0	1.8	0.3	2	珪質頁岩	
4－7	5－2	Hi71	I	〃〃	〃	破損	／	1.7	0.4	／	〃	
4－5	5－3	Gab12	〃	〃〃	〃	完全	2.6	1.6	0.4	1.48	凝灰質チャート	
4－4	5－4	Ef77	II	〃〃	有茎	破損	／	1.2	0.4	／	珪質頁岩	
5－1	5－5	Fc03	〃	掻器様		完全	5.6	3.9	1.1	14.5	〃	
5－2	5－6	Hc80	I	石匙	縦形	〃	8.3	2.7	0.7	16.75	〃	
6－2	5－7	溝Hb74	クレイブロック	砥石？	円盤形	〃	5.3	5.3	1.4	66	流紋岩質細粒凝灰岩	
		溝Hj21～24	〃	剥片		半欠	1.1	4.4	0.5	／	黒色粘板岩	
		溝Hh	〃	〃		〃	2.2	2.5	0.3	／	珪質頁岩	
		Hcd86	I	〃		完全	2.8	4.8	0.9	10.5	〃	
		Gg50	〃	〃		〃	8.0	4.9	1.7	65	黒色粘板岩	
		Hc71	I	母岩又は剥岩		破	／	／	／	／	流紋岩	
		〃	〃	〃〃		〃	／	／	／	／	〃	

		〃	〃	剥　　片		〃	／	／	／	／	石　英	
		〃	〃	〃		〃	／	／	／	／	流紋岩	
		Hb 74	Ⅰ	母岩又は剥岩		〃	／	／	／	／	〃	
		〃	〃	〃		〃	／	／	／	／	〃	
		〃	〃	〃		〃	／	／	／	／	硬質シルト岩	
		溝 Hcd 116	中　位	有孔円盤		完全	2.2	2.7	0.6	5	繊維石骨	
		溝Habc	下　位	自　然　物		〃	12.7	2.9	0.5	27	硅化木	
		溝 Habc 71	下　位	〃		破	5.6	2.0	0.7	／	〃	
4　2	4　2	He 77	Ⅱ	石　箆　状	偏桃形	破損	／	4.2	1.3	／	珪質頁岩	
4　3	4　3	Fc 03	Ⅰ	〃	楔状	〃	／	4.3	2.2	／	〃	

2　古代の遺構と遺物　Ｆｊ03竪穴住居跡とその出土遺物を中心に説明する。

Ｆｊ03竪穴住居跡（第６図・図版１の２・３）

ⓐ〔遺構の検出〕；調査地の中央やや南寄りにおいて、Ｉｂ層上面に検出した。ただし調査上のミスにより北壁以外の三壁は掘りすぎで破壊してしまった。

ⓑ〔重複・増改築〕；上記のミスにより正確は期しがたいが、おそらくそのような事実は無かったと思われる。

ⓒ〔平面形・方向〕；上記のミスにより詳細は不明であるが、北西・北東の両コーナーはほぼ把握しえたこと、土色の相違・遺物と炭化物等の分布範囲から可能となった床面の推定、などにより規模を復元すると、ほぼ正方形に近く東西×南北それぞれ 2.5 × 2.7 m、深さは検出面より0.12 m程度になると思われる。北壁中央にカマドが設けられ、煙道・煙出しが北へのびる。その方向は磁北よりやや西にふれる。

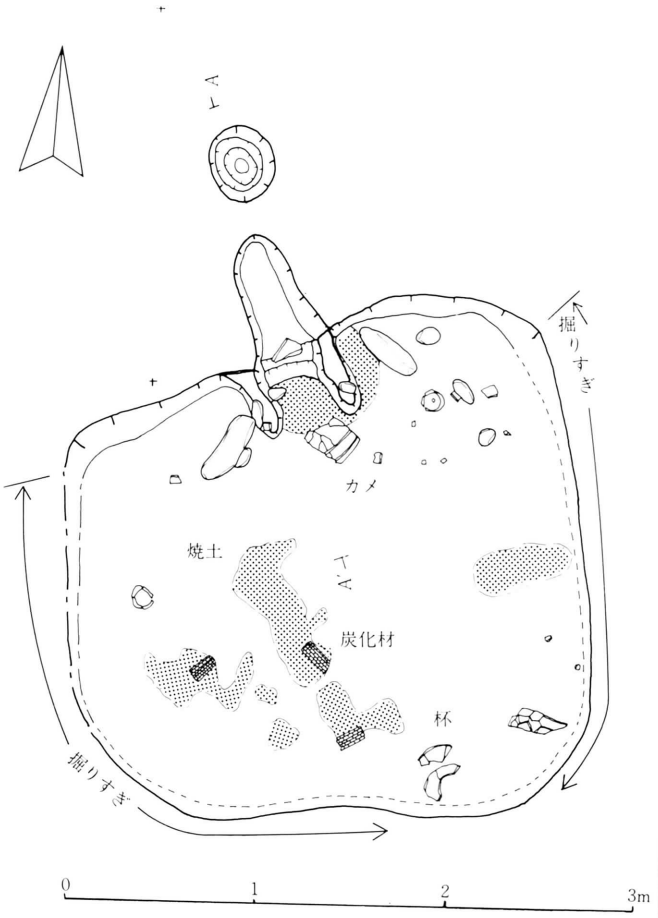
ⓓ〔覆土〕；これも同様に既述のミスにより詳細は不明であるが、第６図中のⓑ・ⓒ類似のものが堆積していたものと思われる。

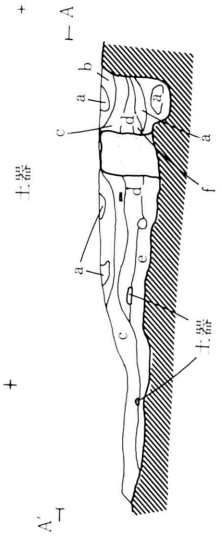
ⓔ〔床面〕；ほぼ平坦である。南半に焼土ブロック・炭化材等が多く分布する。これらはこの遺構を焼失家屋とみなしうるほど多量とは考えられない。

ⓕ〔柱穴〕；明らかにそれと認められるものは壁内の床面には検出できない。壁外については既述の掘りすぎにより不明である。

ⓖ（その他の施設〕；カマド関連のもののみで、貯蔵穴・周溝・出入口などには検出しえない。

カマド……既述のように北壁のほぼ中央に設けられ、現存長 0.4 mの袖部をもつ。袖部には芯として細長い河原石が用いられ、それは焚口上部にブリッジ状にわたされ「冂」状をなしていたらしい。袖部の構築土にはⅠ層とⅢ層の混土が用いられる。焚口部底はあらかじめ皿状に掘り凹められている。





a. 2.5 YR4/4（にぶい赤褐色）	炭化物粒混入、シルト質土
b. 10 YR3/2（黒褐色）	炭化物、焼土粒極少量混入 シルト質土
c. 7.5 YR3/4（暗褐色）	炭化物粒、焼土塊混入 シルト質土
d. 7.5 YR3/2（極暗褐色）	焼土粒混入、シルト質土
e. 7.4 YR3/2（黒褐色）	焼土、炭化物大量混入 ほぼ床面上に分布
f. 10 YR3/2（黒褐色）	炭化物極少混入 シルト質土

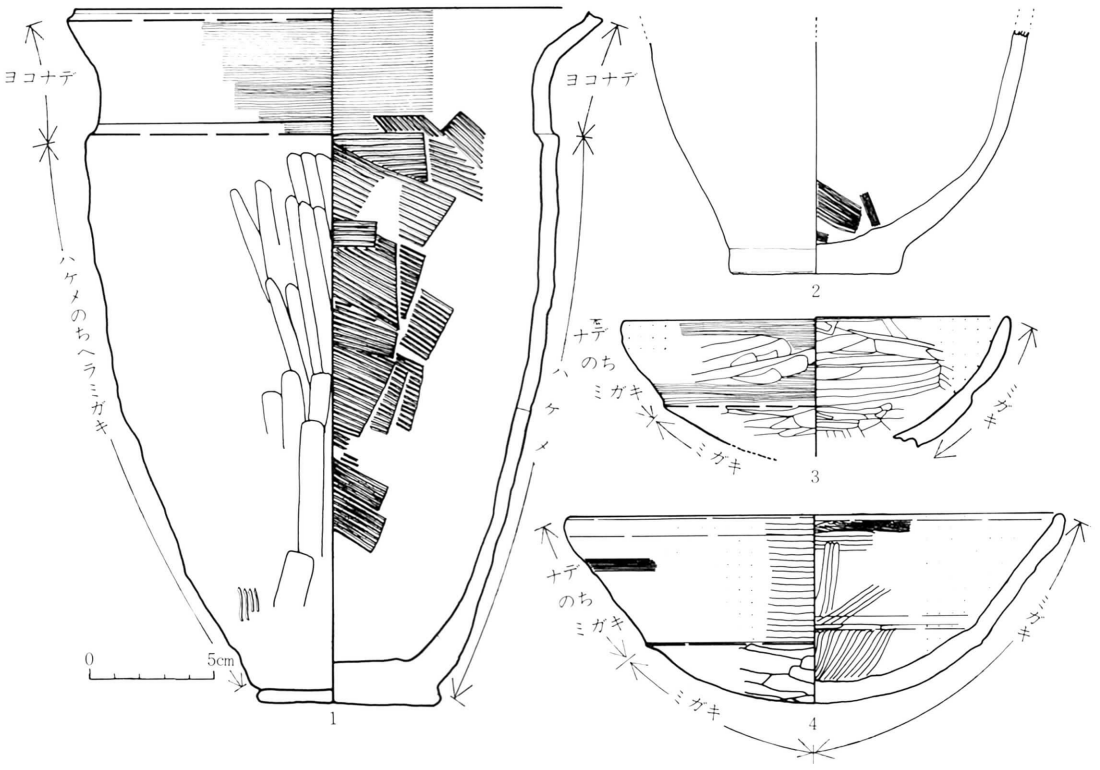
第６図　Fj03竪穴住居跡実測図

煙道・煙出し……焚口部前床面は北壁相当部でやや高くなり、それ以北を煙道とみなした。煙道から煙出しまでは比較的平坦に推移するが、煙出し直前がやや深くなる。煙出しは一段深くうがたれる。両者の連結は本来いわゆる「くり抜き式」であったと思われる。

ⓗ〔年代決定の資料〕；カマド焚口部前床面、南半その他の床面から出土した土師器があげられる。焼土ブロックと床面との層位関係により、これらは本来的に遺構に共伴するとみなしうる。

ⓘ〔遺物〕；（第７図・図版２の１・２、５の３～５）。すべて土師器であり、甕形２個体、杯形２個体を数える。なお、以下においては技法名の後に付すべき「調整」という語は省略する。

(ア)甕形……主としてカマド焚口部床面に検出され器形を復元しえたものについて説明する(1)。口縁は肩部から直上した後に外反し、表裏両面ともにハケメの後にヨコナデが施こされる。その



第７図　Ｆｊ03竪穴住居跡出土土師器実測図

図版番号	実測図番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整施文	内面 色調	内面 調整施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
4 1	4 1	Gd 03	I	甕	完形	浅黄色、一部赤橙色	口縁ミガキ、体部LR<1>、底部網代痕	褐色	ナデ	普通	褐色		石英細粒、雲母片をふくみ粗	大洞A'式？
5 3	7 1	Ｆｊ03住	床	〃	完全	明茶褐色 黒斑	口縁ハケメのちナデ、体部ハケメのちミガキ？ 底面ミガキ	茶褐色と明茶褐色	口縁ハケメのちナデ、体部ハケメのちヘラナデ	良好	茶褐色		雲母片、石英含有	ロクロ不使用土師器
	7 2	〃	〃	〃	底	明黄橙色	ハケメのち不明	淡橙色	ハケメ	〃	〃		雲母片、粗砂あり	同上
5 4	7 3	〃	〃	坏	完形	淡黄橙色	体部ナデのちヘラケズリ、底部ヘラケズリ	黒色処理	ヘラミガキ	〃	灰褐色		雲母片	〃
5 5	7 4	〃	〃	〃	半欠	明褐色	体部ナデのちヘラミガキ、底部ヘラケズリのちヘラミガキ	〃	ヘラミガキ、底部放射状	〃	〃		雲母片	〃

結果として口唇部に溝状の凹みが形成される。肩部には顕著な段があり、そこが最大胴径部位となっている。肩部以下の体部表面にはハケメの後に縦位のヘラミガキ様の調整が加えられる。裏面には横・斜位のハケメのみが施こされる。円盤を貼りつけたと思われる底部は顕著に外方に張り出し、底部表面はヘラミガキされる。胎土に雲母を含み特徴的である。体部表面に煤様のものが付着している。巻きあげ形成と思われ、粘土紐の巾は１～1.5 cm程度と思われる。

(イ)杯形……(3)は底部中央を欠失するが、杯部形態からして高杯ではないと思われる。内湾気味に立ち上がる体部と、丸底と思われる底部をもち、両者の境界には明瞭な段をもつ。体部表面にはヨコナデの後にヘラケズリが、底部にはヘラケズリのみが施こされる。底部には紐づくりの痕跡も認められ、粘土紐の巾は1㎝程である。体部表面口唇部近くにまで黒色処理が及ぶ。裏面は全面に入念なヘラミガキと黒色処理が施こされ光択がある。ミガキの方向は体部は短いストロークで横位に、底部は異方向を重複させるだけで放射状はなさない。なお体・底部境界にかすかなくびれを示す部分もある。胎土に雲母を含む。

(4)は破片からの反転復元であるが、(3)より大形になるのは確実であろう。その他は大略(3)に似る。体部表面はヨコナデの後にヘラミガキが、底部はおそらくはヘラ削り後にヘラミガキが施こされたのであろう。裏面のミガキの方向は体部横・縦位、底部放射状である。

ま と め

(ア)年代等　出土した土器は二器種のみであり、その全組成を示しているとはとうてい考えられないが、観察しえた限りの諸特徴は、従来「国分寺下層式」と呼ばれてきたものに類似する。

東北地方北半の古墳時代以降の土器の型式設定とその編年は、いうまでもなく桜井清彦氏を中心に行なわれ、その第Ⅰ型式と南半の第五型式が併行関係にあるとされた。その後東北地方南半の型式編年は細分化されるにいたったが、真に「型式」なるものの概念を満足させるものであったかは疑問である。いずれにせよその細分化された型式編年の成果によって立つ桑原滋郎氏により、第Ⅰ型式とされたものの大半は栗囲式ではなく国分寺下層式併行とみるのが妥当とされた。しかし桑原氏の用いる杯を主体とする観点のみならず、器種のセット・調整技法などを総合的にみる観点からしても、少なくとも岩手県地方においては「国分寺下層式」なるものの中には異なった特徴を有する二群の土器が内包されることが明らかになってきている。即ちⓐ須恵器が日常生活に不可欠な要素として組みこまれてはいないもの、ⓑ須恵器がセットの中に完全に組みこまれているもの、の二群である。ⓐの類例は、盛岡市百目木(どめき)遺跡の各遺構、江釣子(えづりこ)村猫谷地(ねこやち)遺跡Ｊｊ24その他、金ケ崎(かねさき)町上餅田(かみもちだ)遺跡 Ａｊ12他、水沢(みずさわ)市今泉(いまいづみ)遺跡 Bg62 住居跡出土の資料などに求められ、ⓑのそれは前記猫谷地 Bf 21 住居跡；水沢市石田(いしだ)Ｄd03 住居跡出土資料その他に求められる。本調査例は上記のⓐに該当するものと考えられる。東北南半における年代観を援用してよければ、その時期を8世紀中葉に比較的近いとみることも可能であろうが、8世紀の中葉以降9世紀初頭頃のものとのみのべておく。

(イ)遺構等　Ｆｊ03 竪穴住居跡は小形なこと、柱穴が不明なこと、貯蔵穴をもたないこと、など種々問題はあるが、一応通常の「住居跡」とみなしておく。既述のⓐの土器群を出土する竪穴住居跡は、低位段丘または自然堤防上に占地し、一棟ないし少数の大形住居跡と、多数の中・小形のそれが近接して存在し、配置からみて自然村落的集落（一定の規格性を有する村落で